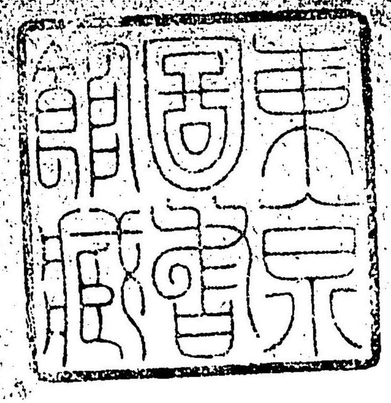


Poor and Rich,

Powerful and Powerless,

Oh, Mother Russia !

露國皇帝ニコラス第二世

征清の役あるや、余平田君と、大纛に陪從して、廣島に駐りぬ。

乃ち相與に語りて曰く、將來我か國民の最も深く且つ明らかに知らさる可らさるものは、それ露西亞にあらんかと。更らに君を慫慂して曰く、古人云へるあり請ふ隗より始めよと、君須らく先つ自から講究し、且つその結果を世に公にせよと。

爾來世態幾變遷、日短ふして事繁く、事繁くして、局面屢は轉廻す。吾人唯た天を仰て大息するのみ。

頃ろ君余に稿本を諗して曰く、幸ひに一讀せよ、是れ某か宿諾を果す所

以なりと。余之を見て、君か精力の甚た鮮少ならさるを覺ふ。それ露西亞は、世界の疑問なり。斯書豈之を解釋して餘蘊なしと謂はんや。但た其の旁引曲證の精且つ詳なる、之に加ふるに其の記叙動もすれは、極東時事問題に及ふもの、洵に多しとするに足るものあり。余は斯書の經世實用の著作たるを疑はす。

我邦の世界と交通するや、文物と商買は、專ら之を英米に仰き。軍務、學藝、法律制度は、之を獨佛に採り。而して政治的交渉に於て、特に露國を以て、其隨一と爲す。過去此の如し、將來知る可きのみ。

それ寛政文化の頃に於て、我か國民の先覺者に、愛國的精神を刺戟せしめたるは、露國北邊を擾るの警なりき。文久年間に於て、我邦の識者に一大怪驚を喫せしめたるものは、露艦の對馬を占領せんとしたるの警なりき。明治の初年に於て、我か志士をして憤涙を揮はしめたるもの樺太交換の事件なりき。若しそれ遼東還附の一事に對しては、その事餘りに吾人の記臆に新たなるの故を以て、今更ら覆說する迄もなし。

露國は我か强隣なり、而して悉比利亞鐵道の落成は、更らに此の强隣をして、我邦と接近せしむ。此の接近は、少くとも政治的交渉の接近を意味す。吾人は露國か世界の疑問たるか故に、之を知るとを遲疑す可らす。吾人若し自から之を解釋する能はすんは、露國は事實の上に於て、吾人に其の解釋を强ふるの事あるを期せさる可らす。余か江湖に向て斯書を推薦するは、我か國運の前途に就て、深慮遠憂あるか爲めのみ。

明治二十八年十月十四日

東京民友社に於て

蘇　峰　生

緒　言

一、渺たる一冊子、之に冠するに『露西亞帝國』の名を以てし、僭越の誹を免れんこと難し。露西亞の版圖の廣大なることのみを以てするも、之を知ることの如何に困難なるかを知るべき也。著者豈に此の困難にして重大なる問題を總て知れりと云はんや、此の渺たる一冊子を以て此の困難にして重大なる問題の總てを盡くしたりと云はんや。只だ、これよりして當さに世に出つべき露西亞に關する著述の陳渉、吳廣たるを得るを以て最大の希願となすのみ。

一、著者自身も露西亞につきて、更らに多くの云ふべきことを有す。此等は適當の時期を待つて補ふことあるべし。

一、有躰に云へば、これ寧ろ著者が研究の餘、ノートブックに記したるを潤飾したるに過ぎず。而も今日の時勢、一私人のノートブックと雖、之を世に公にするを憚るべからざ

るものありと信ずれば也。

一、材料の豐富ならざりしは著者をして最も困難を感ぜしめたりき。而も集め得べき材料は如何なるものも集むるを怠らず、既に集めたるものは、其の一片も之を麁略にせざりしことは云ふまでもなし。

一、露西亞國民を論ずるの一編五章、佛人ポリユー氏著、露人ラゴジン氏飜譯評註の『ザール帝國及び露西亞國民』に負ふ所、最も多し。彼の著はブライス氏の『亞米利加共和政治』と相並ひ、一は最大民主國の説明として一は最大專制國の説明として双璧の稱を得べきもの。ポリユー氏の露西亞國民を論ずる一篇は價値ある著書中の最も精彩ある部分なり。茲に明記して海外の著書に謝すると共に、志ある讀者諸君に最も有益なる一書を薦む。

一、『新帝ニコラス第二世』と題する一篇は、著者の手に成り『國民之友』第二百六十四號（廿八年十月五日發兌）に掲けられたるもの、轉載して總論に代ふるに足らん乎。

一、書中挿む所の地圖四葉、第一『露西亞膨脹地圖』はチエーンバー商會出版の『エンサイクロペディア』に收めたるものを寫し、第二『中央亞細亞侵畧地圖』は、有名なる中央亞細亞探檢家ヴアンベリー氏の著書に收めたるを基とし、印度政府測量部の地圖を參酌し、第三『パミール高原地圖』は『評論之評論』に掲げたるものを寫し、第四『悉比利亞貫通鐵道地圖』は露西亞政府がシカゴ博覽會に出品したるものを基とし、爾後の經過によりて補ひたるもの、謄寫及び彫刻、共に甚だ粗なりと雖も、また大躰を知るに足らむ。

一、地名の發音に誤謬多かるべきは、著者自ら覺悟せる所、勉めて便利の發音を撰びたり。ブハラを發音してボーカラと記せしが如き一例也。

一、茲に此の書を公にするに際し、材料を供せられたる諸君と奬勵を與へられたる諸君とに感謝す。

明治廿八年十月中旬一夕

國民新聞編輯局に於て

著　者　識

總目錄

序文

緒言

新帝尼格拉第二世

露西亞の天然

第一、總てのもの總て廣大也……一―五

第二、歐羅巴唯一の大陸國……六―一〇

第三、北部森林地方……一一—一六
第四、南部「ステップ」地方……一七—二六
一、最も肥沃なる黑土地方……二〇—二一
二、肥沃なる「ステップ」地方……二一—二四
三、瘠薄なる「ステップ」地方……二五—二六
第五、天成の一大帝國……二七—三〇

露西亞の膨脹力

第一、興味なき歷史……三一—六五
一、『余は生存せり』……三一—三五
二、夥多の小共和國……三五—三九
三、韃靼人の壓抑及びモスコウの成立……四〇—四五
四、保姆と鐵嶺と……四五—四七
五、リスアニア及び波蘭土との生存競爭……四八—五三
六、ペートル大帝……五三—五八
七、ペートル大帝以後……五八—六五

第二、コンスタンチノープル……六六—一七二
一、所謂露西亞の南下……六六—七二
二、露西亞及び土耳其……七三—八〇
三、露帝ニコラス一世……八〇—八六
四、佛帝ナポレオン三世……八六—九四
五、クリミア戰爭……九四—九八
六、巴里媾和條約……九八—一〇二
七、老衰者の火藥庫監視……一〇二—一〇九
八、バルカン半島の不穩及び列國の要求……一〇九—一一六
九、バルカン半島の叛亂及び列國の運動……一一六—一二四
十、露土戰爭……一二四—一三一
十一、サン、ステファノ媾和及び伯林會議……一三一—一四三
十二、伯林會議決定の後……一四三—一五〇
十三、東歐の局邊に如何……一五〇—一七二
第三、印度の寶庫……一七三—二五六
一、所謂露西亞の南下(再たび)……一七三—一七九
二、高加索征服(上)……一七九—一八五
三、高加索征服(下)……一八五—一八九

四、中央亞細亞征服(上)……一八九—一九七
五、中央亞細亞征服(下)……一九七—二〇七
六、トルキスタン及びクルジヤ……二〇七—二一二
七、中央亞細亞露佛界決定……二一二—二一七
八、英露の衝突……二一八—二三五
九、中亞の局遂に如何……二三五—二五一
十、中亞に於ける最近の要件……二五一—二五六
第四、朝鮮及び滿州へ……二五七—三一六
一、悉比利亞征服……二五七—二六〇
二、黑龍江地方侵畧……二六一—二六九
三、露西亞及び朝鮮……二六九—二七八
四、日本、支那及び朝鮮……二七八—二八六
五、所謂露西亞の南下(三たび)……二八六—三〇二
六、東亞の局遂に如何……三〇三—三一六

露西亞の同化力

第一、雜駁なる人種……三一七—三二一

第二、統合せる國民……三二二—三二八
第三、フインランド人民……三二九—三三五
第四、ペルチック地方及獨逸人民……三三六—三四一
第五、波蘭土人民……三四二—三五〇
第六、高加索人民……三五一—三五四
第七、中央亞細亞人民(上)……三五五—三六一
第八、中央亞細亞人民(下)……三六二—三六五
第九、之を要するに……三六六—三六七

露西亞國民

第一、西歐國民と露西亞國民……三六九—三七三
第二、天然の奴隸……三七四—三八五
第三、天然の苦鬪者……三八六—三九一

第四、悲觀的にして實動的……三九二—三九九
第五、到底形容すべからざる國民……四〇〇—四一二

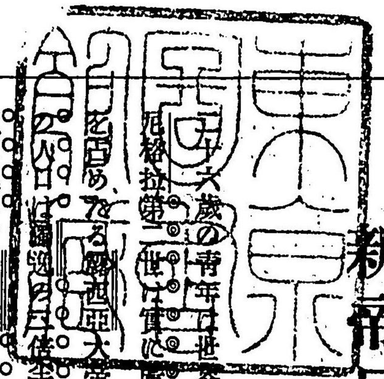
悉比利亞貫通大鐵道

第一、設計の進歩……四一三—四二三
第二、工事の進歩……四二四—四四八
第三、完成の後は如何……四四九—四五六

肖像（新帝ニコラス第二世）……卷首

露西亞膨脹地圖……六十五頁前
中央亞細亞侵畧地圖……百七十九頁前
パミール高原地圖……二百十七頁前
悉比利亞貫通大鐵道地圖……四百十三頁前

新帝尼格拉第二世



二十六歲の青年は世界に於ける最大帝國の帝位を繼承せり。

尼格拉第二世は實に廣大なる版圖を繼承せり。歐亞兩大陸に跨り、世界の陸地の七分の一を占めたる露西亞大帝國、其の面積は佛蘭西の四十一倍八百六十六萬〇二百八十二方哩、其の人口は獨逸の倍半一億一千八百〇一萬四千百八十七人、其の手は四方に延びて獨逸の腹に達し、澳地利の心臟を抑へ、土耳其の肺を刺し、印度の脊髓を摩し、支那の肩を壓し、而して日本の額を指す。其の版圖は世界最大のものとして知られ、世界最大の江河、世界最大の湖沼、世界最大の原野、世界最大の森林を包有す。白海より黑海に至るまで、波蘭土より悉比利亞に至るまで、坦々たる平原、天然の疆界なく、同調の地勢、同調の氣候、

洵にとれ天成の一大帝國也。新たに皇帝の位に即ける尼格拉第二世は此の廣大なる版圖を繼承して何をなさんとする乎。

尼格拉第二世は實に專制なる權威を繼承せり。露西亞が完全なる專制帝國なることは今更ら云ふまでもなし。而も二十六歲の一青年を以て此の如き專制の權威を繼承せるもの、現今文明列國と稱するもの〻中に其の例を見ず。彼の隣國なる獨逸若帝維廉第二世の膽勇、精悍、獨擅を以てするも、議會に拘束せられ、聯邦諸侯に牽制せられて、充分に其の意志を貫徹する能はず。されど露西亞に於て、誰かまた「ザール」の意志を拘束し得るものあらむ。國家の首長にして教會の首長たる彼の意志は、皇帝の命令にしてまた上帝の命令の表示也。天然の法則を變更するの外、露西亞帝國に於て「ザール」の爲し能はざる者一もなし、「ザール」の命令によらずして爲され能ふもの一もなし。「ザール」若し好まば、人は生かさるべし、殺さるべし、富者は奪はるべし、貧者は惠まるべし。上は一國政治の運轉より下は僻村小學の教育に至るまで、大は內閣の椅子より小は病院の寢臺に至るまで、皇帝の命令によらずんば存在する能はざる也。尼格拉第二世は此の專制なる權威を繼承して何

を爲さんとする乎。

尼格拉第二世は實に强大なる軍備を繼承せり。露西亞の陸軍は世界に於て最大の兵數を有するもの也、而して世界に例なき戰鬪的便宜の編制（例せは平時に於て戰時出戰軍高等司令部の編制を定むるが如き）を有するもの也。單に數字のみを以てするも、千八百九十四年度の戰時兵數は、實に左の如き驚くべきものなりと算せらる（千八百九十五年政治家年鑑による）。

兵員		馬匹	大砲
野戰隊	一、二六三、二一三	三七八、五八三	四、一四六
哥索克	一二二、二五二	一一三、八五七	一六二
第一線備	五四四、五七八	三九、五一九	七三六
要塞隊	二一〇、九二一	一、七三五	一二八
第二線備	二九〇、四九三	二八、六〇二	一九二
地方隊	一〇一、〇三九	一五、五〇〇	
合計	二、五三二、四九六	五七七、七九六	五、二六四

大陸的地勢は露西亞をして海軍國たるを得せしめず、其の港灣の欠乏は多數の軍艦を容る能はさらしめたりと雖、尙ほ

	一等	二等	三等
戰鬪艦	一七	一	一
海防艦	二五	一	一
巡洋艦(甲)	七	二	二九
巡洋艦(乙)	七	七	一六
水雷艇	六八		

を有し、其の海軍費は、千八百九十二年には四千七百八十八萬二千二百三十三「ルーブル」なりしもの、九十三年には四千九百八十九萬二千八百九十三「ルーブル」となり、九十四年には五千二百四十九萬二千八百〇三「ルーブル」となり、年々歲々著しき增加進歩を示す。

尼格拉第二世は此の如き强大なる軍備を繼承して何をなさんとする乎。

尼格拉第二世は實に豐饒なる富源を繼承せり。此の富源や未た充分に整理せられず、充分に開拓せられずと雖、良巧なる施設を得、確實なる發達をなさば、露西亞をして單に世界最大の帝國なるのみならず、世界最富の帝國たらしめずんばあらず。南方「ステップ」の一半はミスシッピーの平野と共に、世界をして再たび飢饉なるものを知らざらしむる最膏腴の大耕地たるべく、世界の總ての家畜を養ふ大牧場たるべく、北方の森林存する間は、『ソドム の火』來りて世界の總てを燒き拂ふも、人類の住居なきを憂へざるべく、烏拉爾山は中央金庫たるべく、其他悉比利亞の鑛山、バクの石油、黑龍江の水產、一として天賜の富源にあらざるはなし。製造業は漸を以て發達し、貿易額も漸を以て增進す。尼格拉第二世は此の如き富源を繼承して何を爲さんとする乎。

尼格拉第二世は專制の帝位、廣大の版圖、豐饒の富源、强大の軍備と共に、貴重なる傳說を繼承せり。此の傳說や單に彼得大帝の著作のみにあらず、寧ろ實に天然の著作也。露西亞は天然の指導に從ひ膨脹して完全なる大陸國となれり。大宮殿は大なる門戶を要し大陸國は大なる港灣を要す。これなくして大宮殿として大陸國として其の地位其の威嚴を維持する能はず。大陸國なる露西亞は何處に此の大門戶を求むべき乎。彼は北に於て東に於て陸地の極に達したり、されど白海、オコツク海共に結氷して用をなすに足らず。彼は數々生死を堵して瑞典と戰ひ、西方に出口を求めたり、されどバルチツク海は餘りに狹隘也、餘りに僻陬也、以て充分の用をなすに足らず、而も彼は既に歐洲强國の堅壘に防がれて更らに西方に進む能はず。殘れる一只た南方あるのみ、南下は天然か指定し、ベートルか通

譯せる露西亞最重の傳說なり。

一、東歐に於てコンスタンチノープルへ。

二、中亞に於て印度半島へ。

三、東亞に於て朝鮮半島へ。

コンスタンチーノプルに座して地中海に臨まずんば世界の大勢を制する能はず、印度を英國より奪つて、世界の中央海に臨まずんば世界の大勢を制する能はず、朝鮮半島を領有せずんば本國よりも大なる悉比利亞領土の完全を望むべからず。而して土耳其より朝鮮に至るまで能く露西亞の南下を防き得るものはあらざりき。アレキセイのペクチサライ條約よりアレキサンドルの伯林條約に至るまで、幾多の變遷進歩を經て、ペルカン半島南下の傳說は愈々貴重なるものとなれり。ペルトルの中央亞細亞遠征よりアレキサンドルのパミール條約に至るまで、幾多の變遷進歩を經て、印度半島南下の傳說は愈々確實のものとなり、千六百八十九年のチルチンスク條約より、千八百九十五年の馬關條約に至るまで、幾多の變遷進歩を經て朝鮮半島南下の傳說は愈〻必要のものとなれり。尼格拉第二世は此の

貴重なる傳說を繼承して何を爲さんと欲する乎。

若し夫れ尼格拉第二世が繼承せし露西亞國民に至つては、吾人をして尋常の說明によりて其の國民的血情及び性質を說明する能はざらしむ。露西亞人は搖籠を出てたる時よりして戰鬪者なりき。彼は際涯なき土地を征服せんが爲めに苦鬪せり、彼は猛烈なる氣候に對して自衞せんが爲に苦鬪せり。彼は天然に於て苦鬪せし如く、歷史に於て苦鬪せり、韃靼人の鐵枷を脫却せんが爲めに苦鬪し、瑞典人、リスアニア人、波蘭土人、土耳其人と長き間、生存競爭の苦鬪をなせり。不斷の苦鬪は露西亞人に附與するに最も錯雜し最も矛盾せる血情を以して性質を以てせり。彼は一方に於て半は被征服者の消極的耐忍力を有すると共に、半は征服者の積極的勇往心を有す。服從は彼の義務也、進擊は彼の特質也。其の靜かなるや、磐石頭上に落ち來るも、甘んじて粉碎の運命を受くべく、其の激するや、一點の微火よく全國を沸騰せしむべし。露西亞人がクリミアの戰爭に狂奔せしが如く一時の感情によりて國民的存在を賭し得る者なく、露西亞人がバルカンの戰場に耐忍せしが如く氣候の猛烈、道路の嶮惡、糧食の欠乏、あらゆる困難を排して神と「ザール」との命令に服從し得た

るもの少なし。彼等は創造の才よりも適用の力に富み、文學よりも活動を重んじ、哲理よりも實際を尊ぶ。されど其の適用、活動、實際は屢々極端より極端に奔る。或は强く或は弱く、或は硬或は柔、或は輕快、或は沈鬱、或は遠大、或は深刻、總ての矛盾撞着は露西亞人の中に在り。彼に大小の差別なく輕重の商量なし。彼を觀察するものは、如何なることを彼はなし能ふか、如何なることを彼は爲し得ざるかを分別する能はず。西歐の文明を以て誇るものは曰く、彼は歐洲民族にあらず、文明家族にあらず、到底歐洲文明の社會に加入する能はずと。而して彼は任じて曰く、露西亞國民は露西亞國民の文明を有す。歐洲の文明は腐敗せり、之を匡濟するは露西亞也。歐洲の文明は停止せり、之を鞭韃するは露西亞なりと。尼格拉第二世は此の如き形容すべからざる國民を繼承して何をなさんとする乎。

露西亞新皇帝尼格拉第二世は何を爲さんとする乎。彼、生れて未だ二十七に滿たず、即位して未だ一年を經過せず、誰か遽かに此の問に答へ得るものあらんや。されど草を見るものは其の華かんことを推し、卵を見るものは其の鷄たらんことを察す。青年專制皇帝果して如何に世界の疑問たるべき乎、世界の安危に如何なる關係を及ぼすべき乎、乞ふ我等を

して少しく覗に其所に以、覗に其所に由、察に其所に安せしめよ。

* * * * * * * * * * * * * * *

尼格拉第二世、千八百六十八年五月十八日を以て首都彼得堡の宮廷に生る。生れて幸福なる家庭の子なりき。彼の父アレキサンドル第三世を知るものは評して曰く『露帝にして若し一市人として生れ給ひしならば最も妙なりしならん』と。彼の母ダグマーを知るものは評して曰く『如何に深く露帝を惡む仇敵と雖、一たび皇后を知れるものは皇后をして慟哭せしむる如き擧動をなすに忍びざらん』と。父としては父らしき父、母としては母らしき母、世界最大帝國の專制皇帝もペテルブルクの宮廷に於て、コペンハゲンの避暑に於ては、只だ夫たり只だ妻たり只だ父たり只だ母たりき。ダグマーは其の始めアレキサンドルの兄皇太子に配たるべかりき、不幸にして皇太子早世するに及び、アレキサンドル三世は皇太子の位を繼承すると共にダグマーをも繼承せり。されば彼等の結婚は其の初めに於ては政

畧的結婚たりき。而して相互の義務と尊敬とによれる結婚は愛情の結婚よりも幸福なるものとなれり。露西亞國廣しと雖人衆しと雖、皇帝の如く其の妻に忠實なるものはなく、皇后の如く其の夫を敬愛せしものはなしと評せられたりき。彼等はまた生理學者、進化論者が相互の幸福の爲めに子孫の幸福の爲めに最とも適當なる結婚と云へる、相反し相補ふ性情血液を有したりき。父は肉躰に於て强健にして鐵を細にするの膂力を有し、精神に於て遲緩にして憂鬱の調を帶び、擧動に於て沈靜、人を見、事を見るに猜疑の眼を以てし、人に處し己に處する嚴肅精確なりき。母は肉躰に於て優雅、精神に於て思慮早く、決斷早く、彈力强く、擧動に於て輕快、人に處するに温情、公平、忍容、信實を以てする婦人なりき。此の如き父と此の如き母とが正當に傳へ明確に印したる子の資性は幸福なるものならずんばあらず。アレキサンドルはニコラスに讓るに眞理を愛し虛僞を惡むの念を以てし、宗教を重んじ露西亞を重ずるの念を以てし、正直にして道德を奉じ義務に從ふの念を以てしたり。父より受けたる嚴格なる意志は、母より受けたる温篤なる心情の光と熱とに照され、和らげられたり。アレキサンドルの如く嚴格にして而も彈力を缺かず、アレキサンド

ルの如く冷頭にして而も熱情を失はず。尼格拉若し今日まで世界に示したる傾向を、年と共に發達せしめなば、彼は專制皇帝の稱號なきも、尙ほ人をして敬慕尊重せざる能はざらしむる人たるべし。

アレキサンドル三世は純乎たる武人なりき。彼は武將として兄皇太子の右腕たるべく徹頭徹尾武人的教育を受けたり。餘儀なき運命が彼をして思ひ掛なき皇帝の位を繼がしむるや、時を失はず力を惜まず、萬能皇帝たるに適せん爲め自ら修養するを最も務めたりと雖、幼時よりの偏重的教育が齎し來る苦痛不利を脫却する能はざりき。さればアレキサンドルは其の儲君をして同一の苦痛不利を感することなからしめんが爲めに最も教育に力を用ひたりき。アレキサンドルまた先帝が虛無黨の毒刃に斃れたる怨を忘るゝ能はず、虛無黨を保育したる西歐文明に對するや、恰かも不俱戴天の仇敵の如くなりき。『露西亞人の爲めの露西亞』、これアレキサンドルの標語なりき、彼は露西亞人中の露西亞黨なりき、彼は其の領民を露西亞化するが爲めに最も銳意急性なる「ザール」なりき。此の二つのものはアレキサンドルをして其の皇子教育の方針を決定せしめたり。尼格拉第二世は露西亞人のみにより

て教育せられたり、其の精神に於て徹頭徹尾露西亞的なる教育を受けたり。かく尼格拉を教育するの重任を任ぜられたるはゼヲラル、ポクダノウイッチなりき。剛直、勇悍にして而も博識多才、博識多才にして而も嚴正方立なるゼヲラルが著しき教化を幼皇に及ぼしたることは疑ふべくもあらず。多病は幼時に於て尼格拉の進歩を妨げたりと雖、彼は敏捷なる小兒たり、勤勉なる生徒たり、偏固狹隘ならざる少年なりき。徹頭徹尾露西亞的精神を以て教育せられたるも彼はまた近世的方法の教育より漏れざりき。歴史、憲法史、經濟學、法律學を授けられ、英、佛、獨の語を教へられ、グリームの『神仙譚』、フェヲロンの『テレマーク』、スコット及び、ヂッケンスの小説を聞かせられたりき。

尼格拉は十八歳にして交際社會に入るを許されたり。二年にして彼は外人排斥政策の張本ポビエドノチエフ、擴張露西亞主義の使徒イグナチエフ、布衣の宰相新聞記者カトコフ、チエルニシエフスキー等に圍繞せられ、ドレヤサンドルの無事外交政策に憤慨せる擴張露西亞黨の秘密運動に擁立せられんとしたりき。懇篤なる父は彼をして陷穽より離れしめんが爲めに世界漫遊の途に上らしめたり。歸り來りて彼は公生涯に入り、實際に於て露西亞

政治の運轉を學びたりき。各種の地位を踐み、各種の人民に交りたる血氣の少年は、變愛の深淵に跳り入れり。彼は猶太種の女優の擒となれり。女優の種族は最も卑賤なりき、其の容姿は最も秀麗なりき。尼格拉は彼女の爲めに、總ての寶を献じ、總ての情を捧げ、未來の皇帝なるべき地位さへも棄てんとせり。世界最高最巧の媒妁婆と稱せられたるウイクトリア女皇さへも、適當なる緣を結ばん爲め、此の小説的戀愛を割く能はざりき。尼格拉をして最初にして又た最大なる苦痛を忍び、ヘッセのアリスと結婚するを承諾せしめたるは、只だ露西亞の爲め、露西亞帝國、露西亞國民の爲めと云ふ嚴格なる義務の命令のみなりき。

尼格拉は實に沈毅の君子たると共に血性の男子たることを示せり。彼が始めて交際社會に出づるや、寧ろ之を好まざるの風あり、人或は彼を目して病弱、憂鬱事を執るを好まずとなせり。此に於てか彼は宮廷の大舞踏會に於て、有名なる將軍の娘と手を携へて舞踏し、實動によりて臆説を破碎せり。其の舞踏の輕妙なること胡蝶の花を廻るが如く、壯快なること天馬の空を行くが如く、對手をして疲勞禁ずる能はざらしめたる後謝して曰く『多謝

す、貴孃を勞することの甚しかりしを、而も余は露西亞皇太子たるものが血性を有するを示さんと欲したるのみ』と。彼が湖南事變に際して左手、頭上の創を抑へ、右手卷莨を薫しつゝ『これ決して大日本皇帝陛下の知ろしめす所にあらず』と云ひたるが如き、近頃首都街上の襤褸漢が彼の馬車を要して封書を馬車に投じたる時、騎兵、警官、侍從等が虛無黨の陰謀と誤りて周章狼狽しつゝある間に、徐ろに書を熟讀し『書中の事委細聞屆けたり』と彼の漢を慰め、警官をして彼を保護して引き去らしめしが如き、誰か彼の沈毅を稱せざるものあらんや。而して彼が各種の官職を經過し技倆を示し公平を示したるが如き、千八百九十一年の飢饉に際し自ら乞ふて救濟委員長となりしが如き、極端なる露西亞黨の稱賛たると共に温和なる自由黨の感服なりき。

我等が尼格拉第二世につきて知る所、世界の總てが然る如く甚だ多からず。則ち甚だ多からずと雖、我等の知れる所ろにより、彼を以て英主なりと歸納する、誰か其の不可なるを論じ得んや。

* * * * * * *

去年十一月一日即位の後、尼格位は宣言して曰く――

『露西亞帝國、波蘭土帝領、フインランド大公國の位を踐む此の悲哀にして而も重大の時期に際し、先帝の遺言を記臆し、之に皷吹せられ、朕は今齋しんで上帝の前に誓ひ、朕が愛する露西亞の勢力及び光榮、及び朕が忠良なる臣民の幸福の平和的發達を以て朕が唯一の目的となさんことを誓ふ。』

露西亞の勢力及び光榮の平和的發達を來さんが爲め、尼格拉が解釋すべき疑問甚多し。彼は專制の權威と共に繼承したる廣大の版圖、强大の軍備、豐饒の富源、勇往の國民を以て何をなさんとする乎。彼は二十以上乃至七十の異人種を集めたる人民を如何にして同化し支配せんとする乎。彼は三國同盟及獨逸に對して何を爲すべき乎。佛蘭西に對して、英吉利に對して何をなすべき乎。支那に對し、日本に對して何をなすべき乎。常備軍を有する殖民地の專制主人として、內に於て如何に殖民を成効し外に對して如何に侵畧を成効し得べき乎。或るものゝ望むが如く皇后の感化は彼をして獨逸嫌の念を減せしめ得る乎。或るものゝ論する如く、英國は彼との個人的關係によりて露西亞との調停を望み得べき乎。

尼格拉登極未だ一年ならず、而も其の施政、人をして刮目せしむるものなきにあらず。政

治及び宗教上の犯罪者に、專制「ザール」以來絶無稀有なる特赦の恩惠を與へたるか如き、鐵道事務、建築事務の腐敗を調査せしめたるが如き、地方總督、長官及び司法行政の事務に練達したる官僚を召集して政治更新の會議を開きたるが如き、波蘭土の壓制太守ゼチラル、グルコを召還したるが如き、今尚ほ悉比利亞鐵道會議總裁として、即位最初の會議に於て廉價と迅速とを以て先帝の遺業を完成するを宣言したるが如き、英才達識の參畫者其の人を得たるによると雖、また專制皇帝尼格拉の力に負ふものなくんばあらず。

若し夫れ、外交の活動に至つては、新帝尼格拉第二世の政府は短少なる時日の間に、竦手敏腕を以て世界をして屢々嫉妬の目を側たて、驚怖の眼を瞬らしめたり。佛國外務卿モッシュル、アノトーが代議院に於て露佛同盟の演說をなしてより未だ二日ならず、即ち獨逸キール運河開通式の日に於て、『聖安得烈』の最榮勳章は佛蘭西大統領モッシュル、フォールに贈進せられたり、露西亞艦隊は佛國アドミラル、メナールに指揮せられ、相合し相携へてキール港に入れり。露佛同盟、これ露西亞の政府、佛蘭西の政府が陰かに結んで久しく言ふを難かりたる所、而も尼格拉第二世の政府は敢て之を世界の大舞臺に於て廣告せり。

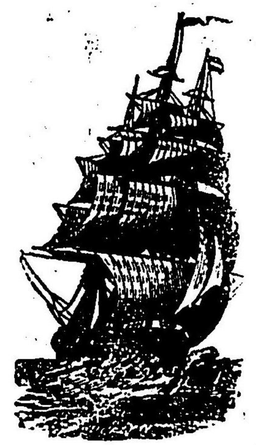
露西亞がまた日清戰爭に於て如何なる陰秘、神速の運動をなしたるかは、四千萬の記憶に新也。露西亞は嚴重の照會を出兵の際に發したり、而して滿足せるものの如く退けり。日本は連勝せり、露西亞は沈默せり。歐洲の爭端は休止せられたり、軍艦は亞細亞海に集まれり。馬關條約は調印せられたり。三國同盟は露西亞を張本とし忽然として出で來れり。而して其の終極は……日本は百戰の地を失ひ、露西亞は支那に對して一千六百萬磅の公債保證者——事實に於ての債權者となれり。これ豈に近世外交の神出鬼沒を一點に集めたるものにあらずや。

十九世紀以來の露西亞皇帝、曾世界大波瀾の中心たりし傳記を遺せり。亞歷山第一世（千八百〇一年—二十五年）は大ナポレオンの雄圖を挫き、神聖同盟を以て歐洲の覇權を握りたり、尼格拉第一世（二十五年—五十五年）は高加索を征服し、クリミア戰爭を戰へり、亞歷山第二世（五十五年—八十一年）は中央亞細亞を征服し、露土戰爭を戰へり。亞歷山第三世（八十一年—九十四年）に至りては赫々の雄名なしと雖も尚ほ世界平和の擔保者と稱せられたりき。尼格拉第二世は果して如何の功業を以て此の目錄に加ふべき乎。

露西亞の天然

第一、總てのもの總て廣大也。

西歐羅巴の小天地に幾多の列國相對峙する時に於て、東歐羅巴に一大帝國あり、露西亞と云ふ。其の土地は最も廣く、其の人口は最も多く、其の勢力は最も大に、而も其の世人に知らるゝこと最も少なし。加ふるに彼の國が經過せる最近の大回轉、大進歩は、傍觀者をして其實相を誤解せざる能はざらしめたりき。今世史に於て短日月間の大變遷、大進歩を以て世界を驚かしたるは、歐羅巴に於ては伊太利、亞細亞に於ては日本、歐、亞に跨りては露西亞也。三ッのもの共に其の大變遷によりて傍觀者をして誤解に陷らしめたり。伊太利は、其の實際よりも強きものとして誤解されたり、此に於て歐洲中原の覇權を握るべき



三國同盟の一に加へられたりき。日本は其の實際よりも弱き者として誤解されたり、此に於て支那と戰爭せば必ず敗ると豫言せられたりき。

露西亞もまた誤解の塊なりき、今に於ても尙ほ然り。或ものは問ふ、露西亞は歐羅巴に屬する乎、將た亞細亞に屬する乎、或るものは答ふ、露西亞は歐羅巴にも屬せず、亞細亞にも屬せずと。また或るものは答ふ、彼は歐羅巴にも屬し、亞細亞にも屬し、歐羅巴の亞細亞にして亞細亞の歐羅巴なりと。或るものは云ふ、西歐羅巴の民主的共和政治及立憲的君主政治と此の『神聖露西亞』との間には少なくとも數百年の間隔あり、彼は外形の文明を裝ひ、物質的科學を採用せしと雖、其の國民の風儀精神に於ては依然たる中世のものなりと。或るものは以て文明進歩の妨害者となし、或るものは以て世界平和の擔保者なりとなす。或るものは云ふ、露西亞は常に其の領地を廣ぐることによりて、終に勢力の中心、平衡を失ひ、沙の上の家の如くに顚倒すべしと。或るものは云ふ、西歐の文明膨脹、既に「ピラミッド」の絕頂に達したる時に於て、露西亞が年々其の領土を廣げつゝあるは、更に大なる「ピラミッド」を建てんが爲めに其の基礎を廣げつゝあるにはあらぬかと。或は罵詈し、

或は恐怖し、或は疑ひ、或は贊し、或は嘲り、或は侮る。而して露西亞人は傲然として曰く露西亞人にあらざれば以て露西亞を知る能はずと。

議院國たる英國の勢力が貴族の間に存せし如く、專制國たる露西亞の勢力は、露、土戰爭等の如き大事件によつて明らかに示されたる如く多數國民の間に存す。露西亞の勢力は多數國民の勢力なり。此の多數人民は如何なる才能を有し、如何なる性情を有し、如何なる種類に屬し、如何なることを爲し能ふものなる乎、如何なることを爲し能はざるものなるか。之を知るは露西亞の現在及び未來を知る最初の鍵鑰と云ふべき也。されば、我等をして先づ、露西亞の天然、土地、氣候等を畧說して、此の天然、此の土地、此の氣候は如何なる人民を育て、如何なる力を與へ、如何なる進歩を約束し得べき者なるかを察し、而して後、國民的性質及國民的血情に說き及ぼさしめよ。

* * * * * * * * * * * * * * *

露西亞帝國の地圖が、一見直ちに人の膽を奪ふは、其の版圖の廣大無邊なるに在り。東は波蘭の舊地東經十八度の邊より西は悉比利亞の新地西經百七十度に至り（殆んど百七十度

の間)、南は北緯三十八度の邊より七十七八度の邊に至り、一の不規則なる長方形を成せる其の領土、積算一千二百萬方哩、之を佛蘭西に比して約十一倍、伊太利に比して約十五六倍なりとす。世界に國を立つる總てのもの〻中、只だ領土の廣大に於て、少しく英國に讓り、人口の衆多に於て、大に英國に讓るものなりと雖、其の領土は英國の如く散亂せず、其の人種は英國の如く異雑ならず、以て優かに其の利を占め得べき也。他の歐洲諸大國餘りに狹小にして、比較により以て他の廣大を知るべからず、されば現世紀に於ける最大科學者の一人アレキサンデル、フオン、フムボルトは天文學の助けにより、僅かに其の廣大の度を示したり、曰く、我が地球の露西亞に屬する部分は滿月の時に於ける月球の表面よりも大なりと。

總てのもの皆然り

廣大なるもの皆に其の領土のみならず、露西亞に於ては總てのもの皆な廣大也。中部亞細亞の脊髓山脉まで廣かれる其の原野は世界に於て最大のもの也。黑海とカスピアン海の間に誇りて此の平野の一方を限れる高加索山脉は其の麓は水面よりも低く、其の頂は、歐羅巴の最高山モント、ブランク(一萬五千七百八十一フィート)よりも更に三千呎高し。北西

原野

には歐羅巴最大の湖ラドガあり、オニヱガあり、北東悉比利亞には亞細亞最大の湖バイカルあり、而して世界最大の湖としては南にカスピアン海及アラル海を有す。其の河は其の原野の大なるが如く大なり、亞細亞の領地にはオビ、ヱニセイ、レナ及黑龍江あり、歐羅巴の領地にはドニプル、ドン及ブルガあり。廣大なる平野、江河、其の十分の九は未だ開かれず住まれざるも、其の人口は既に歐洲最大國の二倍九千萬以上に達せり。啻に平面圖によつて現はれたる原野、江河の廣大なるのみならず、其の構造も亦廣大なり、其の氣候も亦廣大なり。總てのもの總て廣大ならざるなき也。

湖水
江河
人口
氣候

西歐諸國は島國也

地勢斷片氣候溫和

第二、歐羅巴唯一の大陸國。

西歐羅巴の人常に好で『大陸』なる語を用ひ、時としては自ら誇稱して『余は大陸の人なり』と言ふ。之に對し時として我等の或るもの自ら卑下して『余は島國人なり』と言ひ、以て大陸人たる歐羅巴人に及ぶ能はざるを嘆ず。大陸なる語、固より誇るべし、大陸人なる稱、固より誇るべし、大陸は島よりも大に、大陸國人は島國人よりも大なれば也。されど日本にして島國ならば、西歐羅巴諸國も亦島國なり、日本人にして島國人ならば、西歐羅巴人もまた島國人也。歐羅巴に於て大陸國と稱し得べきもの只た東歐羅巴に一の露西亞あるのみ。

他の諸大陸に比して歐羅巴の異れる重要の點二つあり。（第一）、其地勢の斷片なること。モンテスキューが"All cut up into small pieces"と云へるものフォボルトが"Peninsular articulate"と云へるもの是也。（第二）、其氣候の溫和なること。これ其地勢のきれ〳〵にして海に沿る地の甚だ多きより來る結果にして、島國たる日本と同く、夏は餘り暑からず、冬も餘り寒からざる溫和の氣候、他の大陸の同緯度地に其例を見ず。合衆國のボストンと伊太利のベニスとの緯度を比較するに、ボストンはベニスの南約三度に當る。而もベニスの冬は猶樂園の如きにボストンの冬は、却て其兒女をして港内一面鏡の如き氷上にすべり遊をなさしむる也。

文明の活動地にあらずして發育地

希臘は歐羅巴の縮圖

此二のもの及び此二つあるが故に出で來る多くのものは、歐羅巴をして大陸たるよりも寧ろ島たらしめ、文明の好發育地たらしむるも文明の大活動地たらしめざるものなるべし。試に歐羅巴の地圖を開き見よ。東方に於ける露西亞を除き去れば、其殘れる面積は最も小也、海岸の屈曲は最も繁なり、山脈の起伏は最も多し、地勢の分裂は最も甚し。英吉利と云ひ、佛蘭西と云ひ、西班牙と云ひ、伊太利と云ひ、墺地利と云ひ、獨逸と云ひ、瑞西と云ひ、嗹馬と云ひ、瑞威、瑞典と云ふもの、單に政治的疆界の名稱のみならず、また地勢的分立の標號たり。歐羅巴自身の中に、其説明を求むれば、恰も希臘文明の時代に於て、一小半島中、數多の小邦、天然の地勢によりて分裂せるが如き乎。希臘は歐羅巴の縮圖也、

歐羅巴唯一の大陸國

希臘を廣げて印刷すれば歐羅巴となる、歐羅巴を縮て印刷すれば希臘となる。前代の文明は、其發育の爲に希臘の如き島國的地勢を要し、而して其大活動の爲に羅馬帝國の廣大なる版圖を要せし如く、今代の文明は、其發育の爲に西歐羅巴の如き島國的地勢を要し、而も其大活動の爲には東歐羅巴及亞細亞の廣大なる大陸的地勢を要するにあらずとせんや。」東歐羅巴を專有する露西亞は西歐羅巴に異なれり。露西亞は實に歐羅巴に於ける唯一の大陸國也。露西亞本國と悉比利亞とは單に政治的合併の名のみならず、地理的合併の名なり。カスピアン海の北、五十二度の邊より北極の地に至るまで蟠れる大山脈は露西亞と亞細亞との天然の境界なるかの如く、露西亞の祖先によつてウラル(壁の意)と名付けられたり。されどウラルは其名に反して、實は一の偏長なる高原たるに過ぎず、殊にペルムよりエカテリンブルクに達する中央部の如きは、一の山を見ず谷を見ず、旅客も其兩大陸を限れる名高き山を越しつゝあるを知らず、之れを通過する鐵道は一の隧道を要せず大工事を要せず、技師をして其技倆を示す能はざらしめたりき。此の如くウラルは露西亞と亞細亞の境界なりと定められたれども、兩者の地勢に一の差異を與へず、氣候に一の差異を與へず、

露西亞に境界なし

大陸的地勢

大陸的氣候

動物植物に一の差異を與へず、却て兩露西亞の中央に位し、一面平野なる兩露西亞が有する能はざる貴重の鑛物を藏する中央金庫たり。後年若し殖民の効を收め悉比利亞の人口增加するの日來らば、ウラルは露西亞兩半球の軸たり脊髓骨たるべき也。

廣大なる土地は西は波蘭より東は西比利亞の端に至るまで變化なき一面の原野也。北西より北、北より北東を繞れる海の殆ど全部は北冰洋に屬して沿海の利を收むる能はず、かくて露西亞は地球の表面に於ける最も著大にして最も完全なる大陸國となれり。

露西亞はまた西歐羅巴諸國の溫和なる氣候を欠く。露西亞の氣候は大陸的也、夏は最も暑く冬は最も寒し。南は三十五六度より北は七十七八度に亘れる一帶の地、正月に於ては、殆ど全國寒帶の寒を感じ、七月に於ては、殆ど全國熱帶の熱を感ず。夏に於て熱を蓄積し、冬に於て熱を發散する土地は餘りに廣大にして、夏に於て、冷氣を與へ、冬に於て熱氣を與ふる海は餘りに遠く餘りに小し。一方に於てはスカンデナビヤ半島に塞がれて太西洋の溫潮の恩惠に浴する能はず、西歐諸國に拒まれてサハラ沙漠の熱風の恩惠に浴する能はず、一方に於てウラルの山脈は其隆起充分ならず、其方向適當ならざるが爲め（ウラルは南北

の方向に連る）北極の寒風を防ぐ能はず、かくて冬は全國寒帶の寒を感じ、夏は其土地の平野なるが爲め中央亞細亞の熱風に吹廻されて熱帶の熱を感ず。

大陸的組織なる露西亞は島國的西歐羅巴の浴する總ての恩惠に與らず。彼に西歐の温和なる氣候なく、富饒なる地味なく、地層の變化が養ひ育る秀麗なる風景なく、太西洋が齎し來りアルプス山が蓄へ積む適度の雨量なく、文明の滋養たるべきもの一もなく、人類の味方たるべきもの一もなく、却て大なる二の敵、寒氣と空間とを有するのみ。此間に於て彼等露西亞人を慰むるものは、大敵の一たる極寒の熱暑よりも制服し易きと、他の大敵たる空間——荒漠たる土地の既に半は制服せられたるとと、而して全く制服せられたる曉に於ては最も有力なる味方たるべき希望也。

島國的西歐羅巴に發育せし文明は、果して露西亞人の希望する如く、大陸的東歐羅巴及亞細亞を擇で大活動の舞臺となすべき乎。抑こまた大陸的東歐羅巴は如何なる人民を育て、此人民に如何なる性情を附與し、如何なる未來を約束する乎。

第三、北部、森林地方。

試みに先旅行者の案内により歐羅巴に於ける露西亞を旅行せしめよ。

露西亞の最著なる特質は廣大也、而して單調の廣大也。氷塊の浮沈する北海より、ボルガの注入するカスピアン海に至るまで、花崗石の岸に包まれて眠るフインランドの湖水よりクリミヤの濱に至るまで、カーバシアンの山脈よりウラルの山脈に至るまで、コーサカス山脈よりバルチック海に至るまで西歐諸國に十倍し十二倍する廣大の版圖を充たすには、あらゆる天然、あらゆる地勢、あらゆる氣候あるべしとは、地圖を一見したるもの丶直ちに感ずる所ろなるべし。されど實際に於ては然らず。露西亞は單調の廣大也。

西方の地勢は寧ろ温和也、東方は寧ろ荒寥也、北方は寒く、南方は暖也。されど全國の平原的組織は風景に於ても、生産に於ても、南方をして北方と異なること、佛蘭西の西班牙及伊太利と異なる如くなる能はざらしむ。而も天然は、此の單調の中に尙ほ幾許かの區別

を立てたり。かくの如くして旅行者は單調にして廣大なる露西亞の二大區分を知る。二つの部分、其地勢の平坦なること、其の氣候の激烈なることに於ては少しの異なる所ろなきも、其の地味、植物、經濟に於ては混すべからざる區別を有す。試みに長方形的露西亞の地圖を披き、西南隅の邊より起りウラル山脈を踰へて悉比利亞の中央に達する一條の對角線を畫せば、殆んど露西亞を等分することを得べし。此の對角線は面積の等分線にして、また風物の等分線たるべし。

森林地方及「ステップ」地方

二大部分の一を森林沼池の地方とし、一を樹木なき「ステップ」地方とす。森林と「ステップ」との天然的區分は長き間、歷史的鬪爭の源因たりき。北方の耕耘者と南方の牧畜者との鬪爭、露西亞人と「タルタル」人との鬪爭、降つては森林地方の中心に建てられたるモスコー政府と、「ステップ」の子孫たる「コサック」人との鬪爭の如き、自然の區畫に相應したるものなりき。

北極圈以外の地は苔の外、植物なし、馴鹿の外、動物なし、また說くを須ひず。森林地方は、微かに太西洋と白海の氣脈の通ずる北緯六十五六度の邊より起り、モスコーを踰へキ

森林地方の植物

エフに達す。北方にはファー及落葉松(からまつ)の簇るを見、次で松及樺となり、柳及白楊の交るあり、更に南には菩提樹、楓樹、楡繁り、樫の森に終る。此の森林の深き、殊に東北地方に於ては、原始以來未だ人跡を容れざる地甚だ多しと云ふ。

其の地勢

森林を以て覆はれたる地方の大部分、殊に北西地方、白海よりニエメン河及びドニプル河に至る殆んど全躰は、低濕の平野にして、其の最高の高原クルダイ山さへも、僅に一千呎に達するに過ぎず。沼及び泉最も多く、露西亞の四大海——カスピアン海、黑海、バルチック海、北海に注ぐ諸大河、皆な源を此の地方に發す。地の起伏するなく、諸大河の流域を明白に區劃するものなく、氷解の節に際しては、此等の諸大河の上流混同して幾多の大湖水を作る。其他の諸水、傾斜の餘り緩なるにより、流るゝ能はず、湛へて沼を作るあり、集まつて大なる湖となるものあり、ラドガ湖の如きは其大なるもの、アルキヤンゲルスク一千一百湖の如きは其の多きもの也。

其の氣候

此地方一躰、毎年六ヶ月以上は嚴寒の冬に封ぜられ、稼穡、耕作のことに適せず。地面の雪に埋められゝこと二百日以上なること稀有ならず、河流は四月の末、或は五月の初に至

らざれば氷の衣を脱する能はざるを常とす。北方に於て見る如く春風、春水一時至るものなく、草木春に遇ふて忽ち電氣に打たれたる如く、萠芽するものなくば、此地方唯一の穀物たる大麥(バーレー)及稞麥(ライ)も終に見るを得べからざりしならむ。

住民は農作のみによつて飢餓を免るゝ能はず、鎖末の手工を以て僅かに生活を補ふ、數字の上より云へば人口甚だ稀薄、一方哩僅かに十五人以下を容るに過ぎずと雖、此地方に於ては既に絶頂に達したる也。露西亞は其の歐羅巴領土の面積の半以上を占むる此の北部に於て、單にモスコー地方及ウラル地方の工業を奬勵するのみを以て、將來人口の蕃殖、富の增加を望む能はざる也。

ニコラス皇帝曾つて誇稱して曰く、『露西亞は世界の六分の一を占むる』と。また揚言して曰く『露西亞は農業國なり』と。世界の六分の一を占むる農業國、如何に生産に富み、如何に希望多き歟、人をして殆ど量り知る能はざらしむ。而も世界の六分の一を占むる農業國との妄想は、露西亞國民の進歩の爲めに保護者とならずして、寧ろ妨害者となりたること多し。農業を奬勵する爲めには、露西亞の經濟的運命を定むるとも見るべき大慌惶に際しても、他

の利益を犧牲として計畫せられたり。されど北方の地は此の高恩に酬ゆる力量を有せず。農民解放の擧は農民をして地主の縛より脱せしめたり、されど解放せられ、土地を給せられたる農民は、其の土地を離るゝことを禁ぜられたるが爲め、恩惠は却つて苦痛となれり。地主の奴隷たりし農民は土地の奴隷となれり。地主は必ずしも慘酷なるものゝみならず、而して土地は肥沃なるもの曾つてなし。豐年と雖、其の家族を養ふが爲めに唯一の穀物稞麥を、來年の種も殘さゞる迄に食はねばならず、重き租税を拂ひ、地代の償却をなす爲めには半ば飢餓を忍ばねばならぬ也。『農業國』との妄想か皇帝を蹶ふことなかりしならば、世界の六分一を占むる農業國たらんが爲めに森林の亂伐なかりしならば、露西亞は、今の富强よりも十倍の富强に達せしやも知るべからず。ノウゴロット、プスコフの地に大なる森林あり、河流此を通じ、沼池此に湛へ、多くの水狸を畜ひたるは、今より僅に百五十年前のことなりき。北部一帶の地、上には森林あり、下には銅鉛諸鑛あり、其の多量なる、農民耕作の間往々、鍬によつて純粹のものを掘出すに至る。之を採掘するの方宜しきを得ば、獨逸、亞米利加の冒險商業者をして、狼の如く露西亞に來り、囊の物を探る如く、露

西亞人民の財を攫み去り、而して露西亞人の愚鈍を笑ふ能はざらしむるに至らん。アレキザンドル三世の農民救濟策、或は種子を頒ち與へ、或は貧乏を救助し、或は燒失せる村落を再建する等至らざるにあらず、盡さゞるにあらずと雖、終に農民をして滿足せしむる能はず、北方の土地をして豐饒ならしむる能はざる也。而して千里涯なき南方の沃野は双手を開きて總ての人の來るを待つも、其の來るもの甚だ少なきを歎じつゝある也。

第四、南部ステップ地方。

ステップ地方

露西亞帝國二大部分の一たる南部「ステップ」地方（ステップとは特に此の地方を云ひ顯はす爲めの語なり）の狀態及び其の將來の希望は、前に述べたる北部森林地方と全く異なれり。露西亞の天然の力は寧ろ此地方に在り。

其の由來

最初は森林地方よりも遙かに小なりしが、森林亂伐の結果として前者は追々其領地を狹め、「ステップ」地方は追々其領地を廣め、南方一帶の地を占め、東に至るに隨つて廣がり、ウラル山脈を踰へて悉比利亞の荒野に達す。

「ステップ」地方は前の森林地方に比して更に平坦なり。佛蘭西全國に數倍する土地に於て三百五十呎以上の丘陵を見る能はずと云はゝ、以て其の平坦の度を推測するを得べし。水平線より水平線に至るまで山なければ谷もなし。山なき、谷なき平野なれば、風の暴威を免る能はず、雨の恩惠に浴する能はず、樹木、森林の如きは固より見るを得べからず。而して樹木、森林のなきことは土地をして益ゝ乾燥ならしめ、土地の乾燥は樹木をして終に

全く生長する能はざらしめ、因果循環して、歐亞に跨る一種特別の地を作り、「ステップ」なる特別の名稱を附せられたり。

其の天然

ボルガ、ドン、ドニエペル等歐羅巴の最大河水皆な此地方を貫流するも、此の地方をして水の欠乏を免れしむる能はず。北方より南方に行くに隨ひ、西方より東方に行くに隨ひ、旱魃の患益〻甚し。天は雨を與へず、地は泉を與へず、僅かに不規則なる降雨あるは春と秋とに於てのみ。樹なく蔭なき裸地は亞細亞特有の劇熱なる太陽に照らされて、あらゆる濕氣を吐き出し、山なく海なく、森なき平野は高き天を逍遙する雲を誘ふ能はず、南方の地に於ては一ヶ年若くは十八九ヶ月の間、一滴の雨も見ざることありと云ふ。また或る地方に於て、農民等は、腐敗して黑色をなせる沼の泥を絞りて、之を飲料に供すと云ふ。

其の氣候

之に加ふるに劇烈なる氣候あり、冬は悉比利亞及び氷海の寒風に曝され、夏は中央亞細亞及南東砂漠の熱風に煽られ、北方の地と同じく、寒帶の寒に苦しみ、熱帶の熱に苦しむ。而して此の寒熱兩極の間には僅かに二三週間の春と秋とあるのみ。實例を擧ぐれば黑海及びカスピアン海の北に於て、巴里或は維納（四十八九度）と同緯度の地にして、正月は

ストックホルム（約六十度）の寒氣を感じ、七月はマデレイド（三十五六度）の暑氣を感ず。黑海とカスピアン海との間、高加索山の麓、北緯四十四度、即ち佛蘭西の南部に相當する地に於て、冬は「センチグレード」の寒暑針、氷點以下三十度に降り、夏は四十度に騰る。「キルギッツ、ステップ」と稱せらるゝ亞細亞との接壤地方は佛蘭西の中部に相當する緯度に於て、寒暑針中の水銀氷結して數日間動かざるとあり、沸騰して硝子管を破裂せしむることあり。

悉比利亞及土耳其斯坦の如きは更に甚し。露西亞の中央亞細亞遠征隊はアラル湖の周圍に於て極寒極熱の差、八十度乃至九十度なりとの苦痛なる實驗をなせりと云ふ。氣候の點に於ては、露西亞の南部と北米合衆國の北部と甚だ相似たるものあり。紐育州の如き、ペンシルベニヤ州の如き、黑海北方の「ステップ」と同樣の極寒極熱に苦しむ、西歐羅巴の如き温和なる氣候を附與せられたる土地は、他の大陸に其の類を見ざる也。

此の如く、南部「ステップ」地方、土地平坦にして旱魃に苦しみ、寒暑の差甚だ大なるに苦しみ、春と秋との甚だ短かきに苦しみ、森林、樹木の如き一の影さへも見る能はずと雖、

其の地味

其の三區分

世界最大の耕地

其の境界

其の地必ずしも不毛ならず。膏腴無比なる沃野千里、此等の不便、不利を補ふて尚ほ餘ある地方少なしとせず、露西亞の天府と稱すべきもの此地方にあり。

地味、風土、及人口の狀態に隨ひ「ステップ」地方を區分して更に三となすべし。曰く最も肥沃なる黑土地方、曰く肥沃なる「ステップ」地方、曰く瘠寒なる「ステップ」地方。

一　最も肥沃なる黑土地方。

露西亞に於ける最膏腴の地にして、地球の表面に於ける最廣大の耕地也。「ステップ」地方の最北部に位し、直ちに森林地方に隣るが故に餘波の及ぶ所、尚多少の森林あり、漸く南方に進めば樫、白楊、楡の類或は沙漠の中のオーシースの如く群り立ち、或は大波に漂ふ木片の如く獨り立つ。されば此の地方は他の「ステップ」地方に比して多少の蔭あり、多少の濕氣あり。

西南ポドリア及びキェフ邊より東北カザン邊に及び、ウラルを踰へてトボルスク州の南部に至る一帶の地方、平均厚一呎半より、五呎に至る黑色の土層を以て被はる。太陽に遇へ

其の人口

ば直ちに乾きて粉の如くなり雨に遇へば忽ち濕ひて石炭の如く黑き泥となる。故に黑土地方の稱あり。野草の腐敗せるもの化して土となり、長年月の間積み重なり終に一層をなすに至りたるなりと說明せらる。其の膏腴なることミスシッピー谿と相競ふべく、此の二つの谷は世界をして再たび飢饉なるものを知る能はざらしむべし。而も此の最も膏腴なる地方に於て、最も著しき最も長き最も救ひ難き飢饉の生ずること最も多きは管理の法に於て宜しきを得ざれば也。若し今日の如くして進み行かば、一方には耕作法の不完全なるあり、一方には行政の不都合なるあり、農民の無學と政府の苛稅とは相待つて、露西亞第一の沃野にしてまた世界第一の沃野なる此の地方を荒し盡すに至るべし。

膏腴なる地方、人口もまた多し、此の地方既に平均一方哩六十乃至六十五人を容れ、最も多きは七十五人以上に達せり。

二　肥沃なるステップ地方

膏腴なる黑土地方と黑海及アゾフ海との間に夾まり、兩海に注く諸大河の下流を包含し、

西南ドニエステル河及ボツク河よりドン河及クバン河に及び、ボルガ河の下流を避け、東北を指しウラル山脈の南端に達する地こそ眞の「ステップ」にして、「ステップ」なる語はもと此地方に與へられたる特別の名稱なりしが、遂に樹木なき地方一帶に適用せらるゝに至れり。土地の平坦なること其極に達し、雨水の欠乏すること其極に達し、旅行者は一本の樹も見ず、一寸の蔭も見ず、一滴の水も見すして數日の旅行を續くることあり。歐羅巴露西亞のみに於てさへも、五十萬方哩以上に達する此地方、一見沙漠の如しと雖、全く左のみにあらず。砂と石と鹽とを以て組織せられたる其の一半は永遠不毛の「ステップ」として存在すべきも、他の一半は黑土地方の如く膏腴ならざるも、之を開墾し、耕耘する人口の移住、蕃殖を待つて、直ちに露西亞の富源たるべき運命を有す。

地は第一地方と同じく草木の腐敗より化成せる土を以て被はれ、亞米利加の「プレーリー」の如き驚くべき强健なる草の繁生することによつて、其の豐沃の度を示す。漠々たる平野一面、五六呎の草を以て被はれ、雨量多き年には八九呎に達することあり。Umbelliferous, Leguminous, Labiate, Composite 種の千紫萬紅、隙間なきまでに咲き亂るゝあり、勃々

たる生氣、直ちに人に迫らんとす。其の間また處々に多少の灌木の立つあり。此等の大なる草、大なる花、平原をして黃金世界の海の如くならしむる植物、皆な短かき春の間に、恰も魔術師の杖によつて喚起されたるが如く驚くべき迅速の生長をなし、春雨を飲みて充分の力を蓄ふ。春時若し雨の來ることなき年に於ては、數週間の榮華の後、劇しき日光に燒かれて忽ち枯死し、自然に最良の枯草となつて、一年の間、家畜の食料となる。

此の花草の「ステップ」は年々開墾によつて漸次其の領土を失ひつゝあり。チヤールス十二世が其の軍隊と共に伏し能ひし野も、今は整然たる耕地となり、ゴゴルの「ステップ」はクーパーの「プレーリー」と共に、遠からずして記錄中のものたらんとす。數百千年の間、亞細亞より歐羅巴への移住の大道たる運命を免れ、十八世紀の末に至るまでも、クリミア、カウカサス、南ボルガ地方の遊牧人種の侵畧に任さるゝ如きことなかりしならば、今や黑土地方と區別する能はざる耕地となりしも知るべからず。

人口の稀薄に加へて樹木のなきことゝ水の欠乏することゝの二つは此の地方の開墾を妨くる大なる原因たり。此の地方旱魃に對しては殆んと講ずべきの救濟策なく、住民をして只

人口

便利

だ天然の命するまゝに豊年凶年の來往を忍び、露西亞帝國の米庫とも稱せらるべき地方に於て屢〻飢饉の來襲に會するを免れざらしむ。樹木のなきことは更に大なる不便を與ふ。住民は家屋を建つる爲めに苦しみ、食物を炊き、暖氣を取る爲めに、枯草の莖を用ひ、家畜の糞を用ふるを常とす。比類少なき肥沃の地方に於て、一方哩僅かに三十五六人を有するに過ぎざる固より故ある也。

されば此の地方が有する地理的利益は他の地方に於て望むを得べからず、黑海及ひ之に注き流るゝ諸大河及其分派は歐洲諸國と最も便益なる貿易通路を此の地方の爲めに開く。若し道路の改築、鐵道の敷設によつて、生活の不便の幾分を減するを得、人口の蕃殖を助くるを得、開墾の功を舉ぐるを得ば、露西亞は世界に於ける最膏腴地、黑土地方を二倍することを得べく、佛蘭西全國土の二倍、約六十萬方哩乃至八十萬方哩の耕地を所有し、亞米利加合衆國と競爭するを得べき也。而して此の進歩の成否如何は施政の善惡によつて決せらるべき也。

其の地位

地味

氣候

面積

三　瘠寒なる「ステップ」地方。

肥沃なる「ステップ」地方の南と東とに接して、永遠耕作に適せざる瘠寒の地方あり。ウラル山、カスピアン海間の低地の如き、最初は一帶の海なりしもの、漸次海水の蒸發し低減することによつて陸地となりしものなれば、其の土地、砂にあらざれば石、石にあらざれば鹽にしてサハラの如き純然たる沙漠也。ボルガの下流に沿へるザリジンより起り、廣大なる「キルギッツ、ステップ」を含み、土耳其斯坦の中央に達する此のウラル、カスピアン間の「ステップ」は實に歐羅巴露西亞中の最も乾燥、最も不毛にして、最も劇烈なる氣候を有する地なり。

南クリミアの諸山及カスピアンの沿岸より肥沃なる「ステップ」地方まで達する瘠寒の地方、歐羅巴露西亞のみに於て約三十萬方哩を占む、更に廣大なる亞細亞の部分と共に僅かに牧畜の用に供するのみにして、最近に至るまで「クリミア、クルタル」族、「ノガイ」族等の住居たり、今尚ほ「カルミーク」、「キルギーッ」等未開種族の馳驅するに任せらる。

されば此の南端カスピアン地方は北端白海地方と共に、悉比利亞を除きて、露西亞中、人

口最少の土地にして、ボルガ地方に集まれる衆多の漁民、其他處々に散せる衆多の製鹽業者を合算して尚ほ一方哩平均六人に達する能はず、カルミーク地方に於ては一方哩二人に過ぎざるあり。南方に於けるカスピアン地方は、北方に於ける白海と共に利益、未來、希望を露西亞に約束する能はざる也。

第五、天成の一大帝國。

地味瘠膏の差により、生産貧富の差により未來の希望の大小により露西亞の土地が南北兩大部に區分せられ、兩大部が更らに數小部に區分せられ得べきことは既に前に述べたるが如し。されど此等の區分をなし得べきことを見たるによつて、露西亞全國の大勢の同調一樣なることを忘るべからず。廣袤八百萬方哩以上なる露西亞は、半島國或は島國に異り、分割すべからざる天成の一國也。南部「ステップ」地方と北部森林地方との狀態の異なれること甚だ大なりと雖、天然の一塊たり。(第一)兩者の地勢共に平坦にして山なく谷なし。(第二)其の氣候共に激烈にして七月には南端より北端まで同樣の極暑に苦しみ、正月には一面の氷雪、白海を閉ざすと共に、アゾフ海をも閉ざし、フインランド灣を閉ざすと共にカスピアン海の北半をも閉ざし、アルキヤンゲルスク、ペテルブルクよりアストラキヤンまで少しの障礙なく橇を通ずるを得べし。

天然の疆界なし

露西亞と北亞米利加

樹木の有無により森林地方、「ステップ」地方の區別を立つれども、此の兩地方、茫々たる數千里の平野、只だ水平線の之を限るあるのみ。山脈と稱するに足る山脈なく、高地なく、自然の疆界たるべきもの一もなく、却つて漫々たる諸大河によつて自然に結ひ付けらる。北洋に濱せる地とバルチック海に沿へる地とを除きて、中央部及東部の全躰、地勢少しく南方に傾斜せり。されば若し、東はウラルの解けたる氷雪より、西はワルダイ山麓に群がる湖水に至るまで總ての水を合せてカスピアン海に注ぐボルガ河を以て、ミスシッピー河に比すを得ば、歐羅巴露西亞の地勢は最もよく、北米合衆國に似たりと云ふを得べく、悉比利亞の地は加奈陀の地と相對するを得ん。

森林地方と肥沃なる「ステップ」地方との相接する中央部モスコーの邊を除きては、各地方獨自の生存をなす能はず、北部は穀物の供給を南部に仰がざるべからず、南部は木材の供給を北部に仰がざるべからず、彼なければ此は食ふ能はず、此なければ彼は住ふ能はず。此に於て、南部、北部の地味、生産、經濟の差異は却つて、地勢、氣候の同調に加勢し、双方をして相賴り相合すること益ゝ固からしむるの結果を生じたり。

地勢の一致と政治上の統一

地勢の一致が齎らし來る政治上の統一に付きては露西亞は實に北亞米利加合衆國に優るの利益を有す。北米合衆國もまた天然の命じたる一大國なりと雖、ミスシッピーの大河、脊髓骨となつて全躰を統合すと雖、北方と南方との差異多く、衝突多き、到底露西亞の同調一樣、分割すべからざるに如かざる也。

歐羅巴に於ける領土、固より政治上の一致の爲めに最も便也。亞細亞に於ける領土もまた然り、歐羅巴に於ける領土と亞細亞に於ける領土との關係もまた然り。露西亞帝國はウラルの高原によつて歐羅巴の部と、亞細亞の部とに區分せらるゝにあらずして、却つてウラルの高原を軸として併合せる歐羅巴の一部と亞細亞の一部とによつて組成せられたる大塊也。悉比利亞は征服によつて露領亞細亞となりしよりも寧ろ天然に露西亞帝國の一部也。露西亞天然の疆界明瞭ならざるは只だ西歐諸國に接する邊に於てのみ。されば露西亞はバルチック海、カスピアン山の間に於て、多少の領土を增すことあるべきも將た損ずることあるべきも、東歐、北亞を併せて、永久に一大國として存在すべき也。廣大なる版圖は、天然によつて一致すべく命ぜられ、長き間、中央集權、專制政治に服從すべく命ぜられた

る也。

同調一樣なる廣大の版圖は政治上の一致に大關係を及ぼす如く、產業上、社會上また同樣の結果を生ず。地勢同じく、氣候同じければ、衣食住のこと自然に同じく、生活の程度自然に同じく、開化の程度自然に大なる差異を生ぜず。南方に住めるもの北方に移りて住居の差異を少しも感ずることなく、北方に住めるもの南方に移りて生活の差異を感ずることなかるべく、北方の地を耕せる農夫は、同じ方法により、同じ計算により、同じ器具を以て南方の地を耕すを得べし。天然の一致は生活の一致を來し、生活の一致は感情の一致を來す。露西亞人は到る處同調なる天然を見て、露西亞が自然に統一せる國たることを感ずべく、到る處、一樣の生活をなす人民を見て、露西亞人か自然に一致する同胞なることを感ずべし。

露西亞帝國は實に歷史の產物にあらずして、天然の命令也、自然の設計也。天然はペートル大帝以前に、露西亞大帝國の計畫を立てたりき。

露西亞の膨脹力

第一、興味なき歷史。

一『余は生存せり』。

我等は既に、露西亞の天然、風土、氣候等を學びたることによつて、西歐、北亞に跨る露西亞帝國は、歷史の產物にあらずして、寧ろ天然の產物なること——露西亞は實に天成の一大帝國なることを知れり。天然は運命を豫定し、人爲は之を助成す。露西亞は天成の一大帝國なれども、天然の運命に從ひて今日の形勢をなすには、多くの順序と多くの年月とを經たりき。然り、其の膨脹（寧ろ發達）は實に甚だ遲緩なりき。實際を云へば、或は近世歐羅巴の恐怖となり、或は平和の擔保者たる此の一大帝國は、十九世紀末の今日に於て

大陸的地勢と遲緩なる發達

今尚ほ發達の途中に在る也。西歐諸國が既に文明の絶頂に達したる今日、露西亞は尚ほ建國の事業に忙がしき也。所謂大器晩成の語の如き乎。露西亞の强所此に在り、露西亞の弱點此に在り。

基礎制度の容易に定まらざりしこと一。歴史に興味少なく、波瀾少なきこと二。此二のものは露西亞の發達の如何に遲緩なりしかを證明す。

一千二百萬方哩の面積、世界の六分の一を占むと誇稱せられたる版圖、山なく谷なく、天然の疆界なく、變化なく一樣の平野なること、其の風土一樣なること、其の氣候一樣なることは露西亞をしてポーランドより悉比利亞に連り、黑海より白海に亘る天成の一大帝國たらしむることは疑に云へるが如し。

露西亞をして一致したる大帝國たらしむる此の天然はまた其の發達をして遲緩ならしむる源因たらずんばあらず。

世界を家とする近世の英雄も、其の幼時に於ては搖籠の保護を要するが如く、此の如き平野は文明の發生地たると能はず、必ず他の搖籠的地勢に於て發生し、充分成長したる文明

を迎へて活動せしめ得る時來るを待たねばならぬ也。ルーリークの古代よりペートル大帝に至るまでの露西亞が、眠れるが如く、死せるが如く、あるが如く、なきが如くなりしもの、其の天然に負ふ所ろ最も多き也。有名なる歴史家ソロビオフは之を稱して『長き流動躰的時代』と云へる如く、西より東より、侵畧せらるゝには最も都合よく、縱横千里に驅馳すべき鐵蹄を止め得べき方法を有せざる平野に、永久堅固なるべき基礎を立てんとするは、一葉の扁舟に乘じて、大平洋の風波を凌ぐの難きよりも難かりき。かくの如くにして、天然の單調は遲緩なる發達を來し、遲緩なる發達と天然の單調は、必要の治療、必然の結果として中央集權、個人專制を生じたり。

露西亞の歴史に於て最も著しきは其の變化少なきこと、興味少なきと也。其の國は歐羅巴の一部を占むと雖、長き間歐羅巴の歴史に一の關係を有せず、歐羅巴の大事變に何等の影響をも與へず、歐羅巴の大事變より何等の影響をも蒙らざりき。西歐の歴史の時代を區劃する宗教上、政治上、智識上、社會上の大運動は、その餘波だも東歐に及ぼさゞりし也。相互の報酬的關係より今日歐羅巴の人權を產出せし封建制度、名譽躰面の觀念より今日

永き間四歐關係史を有せず

歐羅巴の紳士を產出せし「シベリー」、今日歐羅巴の文明の基礎と稱せらるゝ、市民市府、此等のもの一も露西亞に存在せざりき。露西亞は歐羅巴王政の要素たりし國會を有せず、大學を有せず、宮廷を有せざりき。敎會を有したれども、思想の自由より政治の自由を產みたる改革を知らず、復活を知らず。中世紀の中葉に於て、韃靼人の壓抑を脫したるモスコー帝國は、十字軍なく、勳爵士なく、詩人なく、學者なく、「ローマンス」なき中世を經過し、宗敎上の大改革を知らざれば、政治上社會上の大革命を知らず。露西亞の歷史家自身も、屢々露西亞に歷史なきことを歎息せり。最もよく露西亞を知れるショセフ、ド、マイストルはプリンス、コズロフスキーに書を與へて、『貴國に於ては古來より傳はれるもの一もなきが故に、尊重せらるゝもの一もなし』と云ひ、ザァダェフは『我等は西方大國民の家族にも入らず、東方大國民の家族にも入らず、我等は其の傳說を有せず。我等は時代の外に生活し、人類の敎化に觸れずして生活したりと云ふべきなり』と云ひ、また『人類の文明は我等に手を觸れず。他の國民に於て既に已に生命の一部となりしもの、我等に於ては、今尙ほ空理空說なり』と云ひ、ヘルチェンは『我等の過去は空なり、貧なり、狹なり』と云へり。興味少なく、變化少なき歷史を有する露西亞人は、恐怖時代に於て何事をなして過ぎ來りたりやと問に答へたるシーエの如く『余は生存せり』と云ふるに過ぎざるべし。

スラブ人最初の殖民

二　夥多の小共和國。

露西亞は如何にして長き間、只だ生存せしのみに止まりし乎。西歐文明の波動以外に長夜の安眠を貪りし乎。乞ふ少しく其の興味なき歷史をたどらん。此の歷史興味少なしと雖、實に露西亞文明の眞相を解釋するに足るものなしとせず。

常に大ナポレオンの夢を懸ひたる「スラブ」人は初めより東歐平原の主人にあらざりき。基督紀元の初世期に於ては彼等はダニユーブ、エルブの河畔、バルチックの南岸に住みしが、西方よりして露西亞の地を侵し、南「スラブ」人はポグ、ドニエスタル、ドニエペルの上流を占め、北「スラブ」人はプスコフ、ノブゴロット邊の湖水地方を占めたり。此の移住の年代、今より詳にするを得ざるも、彼等の部落は確かに九世紀の頃、既に今のポーランドの地の外、ペイプス湖及イルメン湖よりドニエスタルの河口に至るまでの地に蕃殖せ

未だ自立する能はず

り。此時「フィン」人は、フインランド及ドウヰナ、ペチョラの流域及ボルガの上流を占有し、「リスアニア」人は南ドウヰナ河とビスチユラ河との間を占有し、「フイノ、タルキッシユ」種族は中央高原の南麓に牧し、カザン地方には「ブルガル」種あり、ボルガ中原には「モルドビン」、「メシエルヤク」「ズーバッシユ」、及「セレミス」族あり、南方「ステップ」には「カザル」族あり、カスピアン、スラツプよりボルガ河の東方に亘る一帶の地には「トルコ」人あり。されば此時「スラブ」人の占めたる地は、今の露西亞の西疆一帶地に過ぎざりき。

當時「スラブ」人の占有せる地はスカンデナビアより希臘に達する大道たり、スカンデナビア商人の隊は常にノブゴロッド、キエフを經て、コンスタンチノープルに來往し、「ノルマン」勇士の群も同一の道を經、多くの「スラブ」人を誘ひ、希臘に行き、諸王の用に從へり。未だ微弱なる「スラブ」人は各種族の間に介立し、大道に沿ふて生活し、自己の力を以て、充分に自己の安全を計る能はず。他の卓出せる勇士「ワランジアン」族の如きもの迎へて、管轄保護を托するを常とせりと傳へらる。かくの如くにしてルーリーク、シニユース、トルーボルの三兄弟迎へ入れられ「フィン」人「リスアニア」人に對して防禦、攻擊の任に當れ

キエフ全盛

りと傳へらる。記錄は云ふルーリークの同胞オレグなるものキエフ及スモレンスクの主權を執り、ルーリークの子イゴルと共にコンスタンチノープルに向ふの軍を起せりと。露西亞人は其後スブヤトスラブを首領として、「カザル」人、希臘人と交戰を續け、ブルグリアを陷れ、諸城砦を占領し、將さにコンスタンチノープルに達せんとして大敗したりきと。九百八十年より千〇十五年に至る間は『光輝あるウラヂミル』の時代として、今尙ほ歌ひ唱へらる。

十一世紀の初半、賢人ヤロスラブがキエフの大公たりし間、其の諸弟、諸甥は、ノブゴロット、ポロツク、ムロムを治め、ウラヂミルはボリニアにあり、トムトラカンは遙かに北高加索にあり、『露西亞都市の母』たるキエフは全盛の榮華を示し、夥多の人口を有し、四方の商隊を集め、セント、ソフィアの大寺院建てられ、學校開かれ、最初の露西亞成文法編纂せられ、殆んど世界の首府コンスタンチノープルと相競はんとせり。晩年に至り、ヤロスラブは殆んど全露西亞人を司配し、其の四女は、波蘭土の王に、諾威のハロルドに、フランスのヘンリー一世及匈牙利の王に嫁したりき。

天然の指導に盲從し漸次東方に領地を拓きつゝ

當時の國家的組織

記錄によれば、次の二世紀間は、ヤロスラブの子孫がキエフの主權を得んゝ爲めの繼嗣爭鬪止む間なく、繼嗣戰爭の外、何事もなかりきと傳へらる。近時の學士は更に多くのことを探究し出せり。露西亞人は此の間に於て漸次東方に其の領地を拓きつゝ、オカ及ドン河の流域及東北に於ける「フィン」人の領地に殖民をなしつゝありき。されど彼等の膨脹は固より溢水の平野を侵すが如く、只だ天然の指導にのみ從ふの外、未だ綜合せられたる主義を有せず、統一せられたる方針を有せざりき。言語、宗教及ヤロスラブの子孫にあらざれば主君たる能はずとの思想の外、諸部落を統合する外部の組織一もなかりき。各領土、各市府に種族會議ありて、其の主權を握り、宣戰媾和の柄を執り、其の決議を以て國君を擇べり。かくして擇ばれたる國君は、法律によつて司配することを宣誓し、國土を保護する爲め兵士を養ふの義務を負はせられたり。別にまた十二審判官あり、市民の訴訟を聞けり。都市は住民の職業によつて、自治の街區に分たれ、其の役員を擇び、而して全市の會議によつて市長及市民軍の指揮者を擇べり。商業の市に在つては、市の事業として貿易を營み、市の費用を以て、商隊を出し、殖民者を送れり。ノブゴロットが北東の地を征し、ウィアトカ、ドウィナ、ポロツダの諸市を立て、遂にウラルを踰へて悉比利亞に貿易せしは此の方法によりてなり。領土には首府の外、幾多の市町あり、首府の自治なるが如く、他の市町も同樣の自治を有ち、土地は耕者の所有たりき。此時キエフは最長の市と認識せられ、最長の公子の領と定められ、希臘及亞細亞との貿易の倉庫たり、ノブゴロットは日耳曼及スカンヂナビヤとの貿易の倉庫たり。プスコフ、スモレンスク、ポロツク等もまた重要なる商業の中心なりき。

最も自由なる無數の小共和國

かくの如く後年の大專制帝國たるべき露西亞は十世紀十一、十二世紀に於て最も自由なる無數の小共和國に分れ居たりき。而も小共和國の分立は大帝國たるべきものゝ最初の階段たること多し。されば其膨脹——膨脹と云ふべき膨脹にはあらざるも——は近世の同化的膨脹にあらずして寧ろ分身的と云ふべく、露西亞は未だプロトゾアの時代に於てありしと云ふべき也。

三　韃靼人の厭抑及モスコウの成立。

ビザンチズムの司配

當時露西亞の文明を司配せしは「ビザンチズム」なりき。諸君主の夢想は常にコンスタンチノープルに走せ、コンスタンチノープルを摸倣して其の都市を飾り、大寺院を立て、好んで希臘教を信じ、希臘の女を娶り、禮式、衣服の末節に至るまでもコンスタンチノープルに則れり。「ビザンチズム」の使徒たる希臘教は人民の間に教育を施き、讀書の嗜好を奬勵し、法律の主義をも變更せり。此の影響は「スラブ」文明の一要素としてコンスタンチノープル滅落の後までも長く殘れり。

キエフ衰ふ

此の間キエフに權を握りし諸公の中、ウラヂミル、モノマクス（千一百十三年——二十五年）の名は特に記せらるべし。彼は露西亞の諸君主を糾合して盟主となり、ポロブスチー人に對して、よく露西亞人の領土を禦ぎたりき。彼の逝くと共にキエフの主權は去れり、南西露西亞地方は、漸次近隣の種類及びポリニア、ガリシアの諸公の蠶食する所となりき。

北東の大露西亞人起る

キエフの榮華を奪ひたるは北東の露西亞人なりき。此より先、オカ河邊及ボルガの上流漸次殖民せられ、東北に（今日にては中央）新しき領土開けたり。其の住民は詩歌的想像力を欠ける活潑の力行者——遂に露西亞國民の中核たるべき大露西亞人（グレートルシアン）にして、スツダル及ロ

蒙古襲來敗北屈服

スツダル露西亞の中核なり

ストフは其の中心なりき。彼等は南西の同胞の如く種類會議を知らず、其の都市はキエフ及ノブゴロットの如く獨立自治の傳說を知らず、初めより專制に傾き、專制を喜び、專制の下に勞働せり。されば スツダル公アンドレー、ボゴルブスキー（千百五十七年——七十四年）出でゝ專制の權により、オカの養流クラズマ河にウラヂミルの新都を建て、キエフの住民を誘ひ移住せしめ、千百六十九年に至り遂にキエフを襲ひしより、キエフの榮華は一炬に付し去られ、スツダルの地は之に代りて露西亞の中核となれり。爾後半世紀間、スツダルは愈々繁昌に赴き、經濟上、教育上、文藝上の進歩著しく、其の領地は益々東方に拓かれ、露西亞は此に至りて、天然の指導に從ひ、權威を以て統合せられたる膨脹をなし始めんとする如く、露西亞文明の芽、此に至りて萠し始めたるが如く見へたりし時、韃靼、蒙古の大種族、鳥の如く落ち來つて其の種子を喙み盡せり。

成吉斯汗の兵既に滿州を平げ、北支那を服し、土耳基斯坦、ボーカラを席卷し、更に西してポロブスチー人の地を侵すや、ポロブスチー人は援を露西亞人に請ひ得て、兩者力を合せ千二百二十四年、ドンの養流カルカ河に於て侵畧者と戰へり。勝利は全く韃靼人に歸せし

モスコウの生長

も、彼等は一たび退き、十三年を經て再び來侵し、遂に東方及中央露西亞を畧し終れり。リアザン、ロストフ、ヤロスラブ、トフエル、トルショクの諸市燒かれ、北西ノブゴロットの共和國のみは天然の沼湖によつて僅かに同一の運命を免れたりき。千二百三十九年四十年の間に、韃靼人及蒙古人は更に南西に進み、チエルニコフ、ガリシア、及キエフを陷れ、遂に波蘭土及匈利牙にまで侵入せしが、モラビアに拒まれて退きポルガ下流のサライに根據を定めたり。露西亞諸公此地に來りて命令を受け、貢獻をなしたりき、されど蒙古人は露西亞の內治に深く干涉せず、被征者の宗敎を尊敬したりき。驚くべく異むべきは、蒙古人の壓抑の蔭に生長し、發達したるモスコー獨裁政府の運命也。恰かも佛蘭西及墺地利の壓抑の下に機敏なる利我的精神を以て、術數ある屈從的態度を以て滑脫なる耐久的意志を以て、漸次其の勢力を增し、領土を廣め、遂に伊太利半島統一の帝王となりたるサボイ家の如く、モスコー政府も、終には大露西亞の主人となるべく、蒙古人の壓制の下に、同樣の精神、態度、意志を以て、蒙古の主人に對しては愚鈍を裝ひ、同胞に對しては最も活潑に、屢〻蒙古の兵を借りて、近隣の諸公を攻め平げ、自己の領域を

蒙古人排斥

擴張したりき。

十四世紀の初年に於て東露西亞には、スツダル、ニヲユニ、ノブゴロット、リアザン、トフエル、モスコウの諸公國ありしが、永き間の競爭軋轢の後、モスコウの勝利に歸したりき。モスコウは千百七十四年ユリイ、ドルゴルーキに建てられたる小村なりき。水運の利ある河に跨り、四通八達の要地を占め、人口衆多にして、農業に勉勵せり。其の君主は共和的傳說に苦しめられず、士族(にして地主たるもの)の上に、農民の上に獨裁の權威を振へり。露西亞に一大帝國を建設せんとの政治的野心を有せる敎會は、モスコウが後來露西亞の中心たるべきことを看破し、千三百二十五年、ウラヂミルに在りし其の首都を此處に移したり。敎會と士族と君主と、如斯、同一の方向に力を協せ、モスコウをして加德力主義のリスアナ、波蘭土等に頡抗すべき勢力たらしめぬ。イオワン、カリタ(千三百二十八年——四十年)、シメオン、セ、プラウド(千三百四十年——五十三年)、イオワン二世(千三百五十三年——五十九年)、ドミトリ、ドンコスイ(千三百五十九年——八十九年)等の君主皆な同一の方針を執り、ニヲユニ、ノブゴロット、トフエル、リアザンの諸隣

全露西亞の主裁者

を弱めてモスコウの勢力を固むるを務めたり。而して後、韃靼諸汗のノガイ、クリミア、カザン及アストラカンに分立して昔日の力を失ひたるに乘じ、東露西亞人の同盟を作り、ドミトリ、ドンスコイ元帥となり、千三百八十年、韃靼人排斥の出陣をなし、ドン河畔クリクポに血戰を試みたり。勝敗判たず。翌年、トクタミッシユ汗突としてモスコウを襲ひ、之を燒き、二萬四千餘を殺し、重大の過金を課せり。されどモスコウが韃靼人の手に落ちたるは此時を最後となす、千四百八年に來りたるエヂゲイ汗は之れを圍んで陷る能はざりき。

モスコウは漸次膨脹せり。アシリ一世(千三百八十九年——千四百二十五年)は蒙古の主より、ニヂユニ、ノブゴロットの主權を購ひ、ロストフ、及ムロムを征服せり。次でアシリ二世せ、ブライインド(千四百二十五年——六十二年)の時にも多少の膨脹あり。次て大王と稱せらるゝイオワン三世(千四百六十二年——千五百〇五年)に至り、コンスタンチン、パレオラゴスの姪ソフイアと婚し、ビサンチン帝國の直傳と稱して全露西亞の主裁者との號を稱するにいたりぬ。全露西亞の主裁者はノブゴロットの內亂を見、千四百七十一年韃靼騎

ノブゴロット征服

兵の力を借りて一大打擊を與へ八十一年に至りて全く之を征服せり。次でノブゴロットの殖民地ウヰアトカ、ドウヰナ等征服せられ、獨逸、スカンヂナビヤ貿易の倉庫までも掠奪せられ、ノブゴロットは全く獨立と貿易とを失ひたり。

韃靼人の分立に乘し、露西亞人は再たび貢献を否めり。此に於てゴルヂン、ホールトの汗、カシミール應援の約を頼みモスコウに向ひ、モスコウは十五萬の兵を以てオカ河に遂へ戰へり。相持する數月の間にして、韃靼人は急に兵を旋したりき。數月の間、活潑なる運動なく、勝敗なかりしも、此の退却は、韃靼人最後の退却となり、露西亞は二百五十年の羈絆を脫して、茲に獨立成長の舞臺に上りぬ(千八百四十年)。

四　保姆と鐵鞭と。

露西亞が二世紀餘の間、蒙古人との苦鬪をなし、遂に蒙古人を退けたることは單に露西亞一局面の出來事のみに止まらず、實に同時代に於ける歐亞の戰鬪大活劇の一齣として見るべき也。舞臺は露亞西の「ステップ」より西班牙の「シエルラス」に至るまで歐洲一圓及亞細

亞、亞弗利加の三大陸に跨れり。一方の亞細亞よりは蒙古、韃靼人鐵馬に鞭ち草木を風靡して來り、一方の亞弗利加よりは「マホメット」教徒左に經典を捧げ右に劍を提げ來りて歐羅巴を卷き去らんとせり。かくて三大陸に跨る大活劇となり、西班牙は歐洲の爲めに其の右翼を防ぎ、露西亞は其の左翼を防ぎ、佛蘭西、英吉利、伊太利及獨逸は十字軍を起して敵の中堅を衝きぬ。韃靼人と戰ふの前、露西亞人は既に絕へず「ペチェネグ」人「ポロブスチー」人等と戰ひつゝありき。露西亞人未だ充分の强固に發達せず、地勢を制する能はず、遂に韃靼人に貢獻するの止むを得ざるに至りしも、南方「ステップ」の地は遊牧種族に最も適したる逸樂場として與へられたる如く、彼等をして自ら其の元氣を消磨するを知らざらしめたり。而して露西亞人の機智ある屈服、術數ある忍耐は露西亞をして亞細亞的鐵鞭の支配の下に尙ほ能く其の制度、宗教、國民的存在を保持せしめたり。

歐羅巴文明的歷史家をして、韃靼人の壓抑は、露西亞をして歐羅巴の進歩に後るゝ二三百年ならしめたりと云はしめよ。さもあらばあれ、韃靼人は奪ふべからざる文明の要素を露西亞に與へたり、カラムザン云へるあり、モスコウは其の强大を蒙古人に負ひ、露西亞は其の獨裁政治を蒙古人に負ふと。獨裁政治を以て直ちに蒙古人の賜なりと云ふ能はずとするも、蒙古人の壓抑は確かに露西亞をして其の一致結合を早からしめ、其の獨裁政治を强めしめずんばあらず。不思議にも保姆なる「ビザンチズム」が温和なる聲を以て教へたるものと、虐主なる蒙古人が鞭撻を以て教へたるものとは露西亞に於て同樣の訓誡を積み重ねたり。上に於ける專制の摸型、下に於ける屈從の摸型は實に「ビザンチズム」によつて教へられ蒙古人によつて確かめられたる最重の政治的教訓也。而して今日露西亞の强大、活動は此の組織に負ふこと最も多きにあらずや。若し夫れ此の間の歷史が一般國民の性情に如何なる影響を及ぼし、延きて露西亞の運命に如何なる影響を及ぼせしかは更に篇を新たにして論ずることあるを期す、兎に角、露西亞人は此の間の苦鬪によつて、困苦を經たる男子の屈すべからざる强健を贏ち得たるものゝ如く、後來の大活動をなし得る强健不屈の國民となりて出で來れり。

五　リスアニア及波蘭土との生存競爭。

リスアニア征討

興味なき歴史はこれよりして漸く興味あらんとす。眞に露西亞の膨脹と稱すべき膨脹は蒙古人の壓抑を脱したる時より始まれり。其の方法、其の順序、其の方向、其の目的は後段に於て詳記すべし。今は順序の命令に從ひ、露西亞歴史の概畧を終へしめよ。

首都に最も近く、常に露西亞を脅かしたるはリスアニアにして、イオワン三世の重なる事業は此國との生存競爭なりき。長き間の戰鬪の後、オカ上流及デスナ（ドニエペルの養流）附近の諸領、イオワンの手に歸せり。クシリ三世（千五百〇五年——三十三年）父王の志を繼ぎリスアニアとの戰爭を續け、スモレンスクを取り、リアザン、ノブゴロット、シエベルスクを合せ、今や北西唯一の共和國として存せしプスコウを平げ其の富豪をモスコウに移したり。

イオワン四世（千五百三十三年——八十四年）幼にして大公の位に即くや、貴族の勢力大に增進し、黨爭軋轢止むときなく、好をポーランドに通ずるものあり、最も信任せられたる顧問官にして忽ち廢立の擧に與するあり、宮中は陰謀の巢穴となりぬ。イオワン長ずるに及びて、陰謀に對する最も慘酷なる報酬來り、其咒詛帳には三千五百餘人の名を記載せられ、陰

悉比利亞征伏

謀の巢穴は復仇の地獄となりぬ。かく内に於ては陰謀、爭奪、復仇、走馬燈の如く廻轉して寧日なく、外に於てはリボニアを征して大に敗るゝあり、蒙古の汗、十二萬の兵を率ひて歸り來り、モスコウの城壁まで迫るありしも、千五百五十二年にはカザンを平げ、二年の後にはアストラカンを略し、末年にはコサック冒險者の功を收めて悉比利亞の地を版圖に加へたりき。「ザール」の尊稱は此世より始まりき。

イオワン四世の子フヨードル（千五百八十四年——九十八年）薄志弱行にして父が鎭壓せし黨爭再び起り、益〻盛となり、義兄弟たりしボリス、ゴドヌフ攝政者として少數貴族の歡心を收め、遂にフヨードル及び其母をウグリッチに流し、フヨードルの死後、貴族會議によつて認識せられたる、「ザール」となれり。少數貴族の歡心を收めん爲にゴドヌフの行ひたる最著の政策は、爾後發達して遂に農民奴隸の制度となり、二百七十年間露西亞を苦むる最大毒害となりぬ。ゴドヌフの「ザール」たること六年（千五百九十八年——千六百五年）。

此時に至るも流動躰的露西亞は未だ露西亞國なる固形躰的結合の時代に達せず。其の然るを證明せんが爲め、露西亞の歴史に於ては驚天動地とも云ふべき未曾有の珍事出來せり。

奪位僭稱者出現

波蘭土の勢力

グリゴリイ、オトレピエフと稱せらるゝ一青年あり、モスコウ寺院の僧徒たりしもの脫走して「ヅボロツシー、コサック」(ドンの下流)の間に數年間を送りしが、波蘭土に來り、ゴドヌフに暗殺せられたるドミトリなりと稱し、波蘭土貴族の一部及「ゼシユイット」派の助を得、波蘭國王シギスムンドもまた聲援を與へたりき。彼は波蘭義勇兵の一隊を率ひて、モスコウの城堡まで迫り來れり。露西亞人は直ちに彼が揚言する如くイオワン四世の遺子に相違なしとし、ドミトリの母自身も彼を以て子に相違なしと保證したり。ゴドヌフは此騷亂の最中に於て頓死し、隱ドミトリは直ちに「ザール」として迎へられ、千六百五年モスコウに於て位に即きたりき。彼は務めて自由の政を行はんとせしかども、露西亞人は直ちに、彼が波蘭土國王に操縱せらるゝ傀儡に過ぎざることを看破せり。ペシリ、シユーイスキー(一千六百〇六年——十年)起ちて潛稱者を殺し、貴族會議より「ザール」の稱を得しかども、露西亞人の認識する所とならず、同稱の潛稱者四方に起り相爭鬪する間に、十數年前より脫走してドン及ドニエペルの邊に集まりたる農民の今は自ら「コサツク」と稱するもの來侵し、都市を壞ち、富豪を掠め、領土を暴し、而して波蘭土王は此の機會に乘じて來り、モス

波蘭土との競爭

コウ貴族の承認を購ひ、其子ウラヂスラスを立てゝ「ザール」となせり(千六百十年)。當時の露西亞は波蘭土を通じて西歐文明の空氣を呼吸し、露西亞と波蘭土との關係は競爭者たると共に一種の師弟たる關係なりき、而して波蘭土風に感染すること最も早く最も多かりしは、云ふまでもなく貴族にして、容貌、風采、住居、禮式、交際一に波蘭土に則り、其の贅澤までも模倣して農民を虐げたるのみならず、波蘭土に於けるが如き寡頭貴族放府を建てゝ權力を專らにせんと期圖したりき。されば露西亞一般千六百一年の潛稱者ドミトリの旗を望んで起り、延て十一年間の騷亂となりしものは、少數貴族に對する多數民衆の反抗運動なりしも。而して此の反抗運動は端なくも、年來の競爭者たる波蘭土及「コサツク」に與ふるに來侵の間隙を以てせり。波蘭土人「コサツク」とが露西亞の運命を握らんとするや、反抗運動は教會と市民との協力より來り、ニヂニ、ノブゴロツト、ミニン等先づ起つてモスコウ恢復の義を唱へ、四方の各市皆な應じ、各市民會議聯合して兵勇を徵集し軍隊を組織することを決議し、各階級の代表者によつて組織せらるべき『國土大會議』をヤロスラブに召集せり。救濟軍既に組織せられポジヤルスキイ及ラプノフ之に將として モ

スコウを恢復し、波蘭土人を放逐し、ミカエル、ロマノフ（千六百十二年——四十五年）を立てゝ「ザール」となせり。

波蘭土との戰繼續せられて困難失敗常に多く、ミカエル、ロマノフは露西亞最後の「ザール」なるべしと思はるゝこと少なからざる程の危機に際して、ドニエペルの「コサック」突として又を倒にし、波蘭土の敵となり、波蘭土の敵となることによつて露西亞の友となり、露西亞の存在を救へり。瑞典のグスタブス、アドルフスとの平和はシエルツセルブルクを以て購はれたりき。

露西亞統合の事業

ミカエルの子アレキセイ（千六百四十五年——七十六年）の事業は邦國として露西亞を統合するにありき。農民鎮壓、加特力教徒鎮壓は其の重なるもの也。今、此等を記述するの煩を避けて、只だ膨脹に關するものを擧ぐれば、此の時代に於て小露西亞地方の「コサック」全力を露西亞に捧げ露西亞は之によりて遂に全く波蘭土に勝ち、再たびスモレンスクを取れり。長き間、波蘭土との生存競爭は、殆んど露西亞の全力を蕩盡せしめたり。而して曩に東に於て韃靼人を逐ひたる露西亞は今又西に於て最後の勝利を得て波蘭土人を逐ひ、

波蘭土人放逐

小露西亞の權利を確かむ

これよりして東歐の確實なる主人として、新しき活動の舞臺に上らんとす。抑も甚麼の人出でゝ舞臺の主人たるべき。

アレキセイはまた「コサック」より得たるドニエペル地方の權利を確かめんが爲めに土耳其と戰ひたり。フヨードル（千六百七十六年——八十二年）「ザール」の位と共に土耳其の戰を繼承し、千六百八十一年に至り、初めて兵を收め、パクチサライの條約に於て、土耳其は全く小露西亞地方に於ける要求を拋棄せり。

六、ペートル大帝。

ペートル大帝の名は夙に今日の露西亞を建設したる中興の祖として知らる。露西亞はペートルの代に於て、始めて歐羅巴の仲間入をなしたり。されどペートルの事業の二大部分——物質上、領土上其の國民をして西歐に近づかしめ、同時に道義上、社會上にも其の國民をして西歐に近づかしむるの事業はペートルより始められたるにあらず、少くとも二世紀の間、先驅者の彼が爲めに道を開くものありき。

ペートルの先驅者

外人任用

イオワン三世以來、蒙古人放逐以來、露西亞の君主は瑞典、「チユートン」諸領及リスアニア人の築きたる疆界を破つて北に道を開き、韃靼人、土耳其人及波蘭土を破つて南に道を開き歐羅巴に達せんとしたり。ペートルの父アレキシスは「ウクレーナ、コサック」を收め、姉ソフィアは再たび遠征軍をクリミアに送れり。

イオワン三世以來の諸君主はまた西歐の技術發明を其國に輸入せんが爲めに外國人を招聘したりき。此の點に於てもペートルの前には多くの先驅者ありたる也。イオワンはまた技術家のみならず、建築者を招き、鍛工を招き、鑛業家、石工、其他工藝家を招きたり。かくて露西亞は先づ物質上、工藝上、實際上より歐羅巴の仲間入をなせり。アレキセイに至つて西歐人の數大に增加し、或は教師として或は顧問として皆な主要なる地位を占め、モスコウは大速力を以て西歐羅巴の後を追ひ、オペラの如きものまで輸入せられ、王女ソフィアの飜譯せるモリエルの劇曲演せらるゝに至れり。ペートルは此間に生長せり。

十歲にして「ザール」の位に卽き、十七歲にして全權を握りたるペートルは、其の最も信任する教師顧問、和蘭陀人メンメルマン、ゼノア人レフォールト、蘇格蘭土人ゴルドン、佛

陸海軍創作

造船業創設

物質的改革

蘭西人ウィエエポア等と共に陸軍を作り、海軍を作り、澳地利、普魯西亞、ベニス、和蘭陀の技術者を集めて造船の業を創め、貴族を留學生として四方に派し新智識を集めしめ、遂に自ら出立して西歐諸國を漫遊し、微服して和蘭陀、英吉利に留學し、其の制度、文物、風俗、習慣、生活に至るまで仔細に看察せり。歸つて後、農業を改良し、工業を改良し、教育美術を改良し、衣服の制度を改良し、善惡大小の差別なく、總ての模型を西歐に取り、頑是なき小兒の萬事大人に倣ふが如く、思慮なき野蠻人の萬事文明人に模するが如く、海軍を創設すると共に、喫煙の風を輸入し、陸軍の制を立つると共に、剃髯の風を定めたり。ペートルが第一に銳意なりしは器械的發明、技術、應用の輸入にして、之を輸入せんが爲めには、自ら弟子となり、教師となり、活動者となり、摸範となれり。造船の業、大工の業、彫刻の業、實際の技術にして、ペートルの自ら爲し能はざるものはなかりき。彼は實に「大露西亞人」の標本にして、彼等を率ひて露西亞帝國を建築するに最も適當なる人物なりき。

革命的なると同時に建設的なる事業の成効は獨裁無上の權力を豫想す。ペートルは獨裁無上の權力を握るに成効して其の大事業に成効せり。ペートル以前の「ザール」は固より云

専制サールの基を開く

遷都

ふまでもなく專制の君主なりき。而して地主會議あり、敎會ありて「ザール」の權力の幾分は削り取られ、イオワン四世、及び潛位者ボリス、ゴドヌフの時代より國會なるもの出て來りて漸次權力を占有せり。國會とは云ふも一定の組織ありたるにあらず、或は全國の代表者を以て成立し、或は特別階級或はモスコウ人民のみの代表者を以て成立したりしが、常に立法上に著大なる勢力を有せり。アレキセイの時代に及び、此の勢力を削らんが爲め、近時の內閣の如きもの組織せられ、政權中集の方針立てられしか、ペートル大帝遂に果斷を以て地主會議及び敎會の權を奪ひ、攝政者たりし姉ソフィアを刑する爲め一たび國會を招集したるのみにて、之を廢し、別に顧問府を立て自ら其の議員を指命せり。而して瑞典に勝つの後遂にサンクト、ペテルブルクに都を建てゝ之に移り、地主、貴族、敎會、モスコウ人民の羈絆を根本より絕ち、無上獨裁の君主として、擇ぶがまゝに、欲するがまゝに其の事業を指導せり。露西亞帝國の基礎茲に至つて初めて定まれりと云ふべき也。

ペートルは始めより露西亞海軍を創造するに熱心なりき。されど此時の露西亞はフインランド、イングリア及びバルチック諸領を併有せる瑞典、及び波蘭土によつてバルチック海

初めて黑海に達す

初めてバルチック海に出づ

より閉ざゝれ、土耳其によつて黑海より閉ざゝれ、白海と北冰洋との外、海を有せず、アルキヤンゲルの外、港を有せず、不毛、寂寥、氷結に妨げられ、海軍を作る能はず、用ふる能はざりき。此に於てか、黑海の一部を取り、計畫を實行すべき海港を得んと、土耳其と戰を開きドンの河口に當るアゾフ港を占有せり（千六百九十六年）。此は、改革時代以前のことゝ也。

ガレリア及イングレリアを取り、バルチック海に出口を求めんとて千七百年、波蘭土、及嚏馬と同盟し瑞典と戰ひ敗れてより瑞典との戰爭屢々開かれ、屢々敗れしが千七百〇九年七月八日最後の復讎をなし、プルトワに於て大に瑞典王チヤールス十二世を敗り、バルチック領地の全部及フインランドの一部を占領せり。

次で再たび土耳其と戰ひ、敗れ、千七百十一年前に占有せしアゾフを還して平和の條約を結びぬ。

既にアゾフを失ひ、再び黑海より閉ざゝれ、銳意バルチック海に向ひ千七百十三年フインランドを占領し、千七百二十一年の條約によつて、遂にバルチック領、イングリア、及フ

カスピアン海に出づ

印度方面

インランドの一部を瑞典より讓り受け、サンクト、ペテルブルクに都を定めぬ。千七百二十二年、波斯と戰ひ三つのカスピアン領デルベント及ベクを畧し地を東南に開けり。

ペートル大帝はまた意を英領印度に留め、之に達する道を探らん爲め、其實地を知らん爲め經營する所ありたりき。此の方面の經營は全く失敗に歸したるも、彼が最初の企圖の如く露西亞は建設せられ、社會上、道義上に於て西歐に近接すべく改革せられ、物質上、領地上に於ても同じく多少西歐に近接すべく膨脹せり。

七　ペートル大帝以後。

ペートルの遺命によつて立ちたるカサリン一世（一千七百二十五年——二十七年）、非改革黨によつて立てられたるペートル二世（千七百二十七年——三十年）の治世は宮廷の陰謀を以て終り、樞密顧問によつて迎へられたるイオワンの女アンナの治世は主權全く獨逸人一派に歸し、其の建策により、前に得たるカーパシアン領を波斯に返し、土耳其と戰ひて大敗

アボの條約

カサリン二世

を得たり。アンナの姪の子イオワン（千七百四十年——四十一年）次で立つや、ペートル大帝の女エリサベス（千七百四十一年——六十二年）其の位を奪ひ、直ちに獨逸人の權を奪ひ、「ザール」の權を復したり。千七百四十三年アボの條約によつてフインランドの一部を得、七年戰爭に加入したりき。次で立ちしフレデリツキ大王の崇拜者ペートル三世（千七百六十二年）は幾何もなく其妻カサリン二世の奪ふ所となりぬ。

內政に於ても、外交に於ても、カサリン二世（千七百六十二年——九十六年）は眞にペートル大帝の繼續者なりき。ペートル大帝の如く些少の道義的觀察を有せず、極妙の經世的識畧を有し、加ふるに女性的人情を以てし、先改革者の改革を和らげ修め、宮廷をして一層禮法に遵はしめ、政府をして一層高き品位を有せしめ、各制度の運轉をして一層圓滑ならしめたり。かくて內に於ては益ゝ中央集權の制を堅め、外に於ては土耳其、波斯、瑞典、波蘭土等の戰に勝利を得て、益ゝ露西亞の領域を開拓せり。曾つて露西亞の微なりし時に於て、脅迫者たり、壓抑者たりし波蘭土は、今や運命の返報に會し、衰退の坂路を急轉直下し行けり。カサリン二世、機に乘じて其の傀儡スタニスラウス、ポニアトウスキを王と

カイナルジ條約及ジヤツシー條約

クリミアを併す

して波蘭土の實權を收め、遂に列國と謀りて、千七百七十二年第一次波蘭土分割を行ひて、第二次、第三次の分割によりて全く波蘭土を滅し、邦國なるものは意外に多くの惡をなすことを說明する歐羅巴の歷史に著大なる一章を加へたり。千七百七十四年カイナルヂの平和に終りし戰爭と、千七百九十二年ヤッシーの平和に終りしものとは、土耳其との戰爭の著大なるものにして、露西亞は終にクリミアの地を收め、黑海に於ける根據地を得んとの年來の期圖を達したり。ペルチック領の中クールラントを收容したることもまた著大なる事實として記憶せらるべし。カサリンはまた、ペートル大帝の如く、印度に對する野心を抱懷し居たりき。

カサリンの子ポール一世（千七百九十六年——千八百〇一年）佛蘭西革命の反對者として澳地利及英吉利の鎭壓同盟に加はり、中途突然、戈を倒にして英國と戰はんとせしが、農民虐待、出版束縛、外國出版物輸入禁止、秘密探偵等の施設に由て激生せられる不平黨の爲めに暗殺せられぬ。

アレキサンドル一世（千八百〇一年——二十五年）か佛蘭西に對する歐羅巴總掛の戰爭に於

て雄名を震ひしこと、千八百十二年佛蘭西大軍が全歐を卷席したる勢を以て襲ひ來りしこと、自らモスコウを燒きて大いに此の常勝軍を破り、一世の豪傑大チボレオンをして『將來の世界は亞米利加人と露西亞人のものなり』と歎息せしめたるとは最も著名なる事實として今尙ほ話說せらるゝ所、而して此の以後の事蹟は、十九世紀の新風雲として、世界の舞臺に於ける「スラブ人」大活動の初期として、露西亞が今日までに有する唯一の歷史——歷史らしき歷史として特に記さるべき也。

大ナポレオン失落の後アレキサンドル發起者となり、千八百十五年九月、澳地利帝フランシス、普魯西亞王フリードリヒ、ヰルヘルム三世と名を連ねて宣言書を發布し、英國王、法王及土耳其帝を除き、歐洲全土の諸君主を合せて神聖同盟を組織したる時に於て、多年の戰爭に疲れたる全歐は黃金時代の來ること遠きにあらざるを望み、或は盟主たるアレキサンドルを目するに『平和のナポレオン』を以てするものすらあり。千八百十五、十六の兩年はアレキサンドル全盛の時代として露西亞は一たび全歐の覇主の如く思はれたりき。されど幾何もなくして神聖同盟の序幕は終り、澳地利の宰相メテルニッヒ本舞臺の主人公

ニコラス一世

クリミア戰爭

アレキサンドル二世

として現はれ出で、反動の旗幟によつて全歐を風靡し、事實に於て歐羅巴の主人となり、アレキサンドルも其の圈外に脫して立つを許されざりき。かくて彼は列國に於ける權勢失墜の悔恨と國內に於ける反亂陰謀の憂慮を抱きて崩殂し、ニコラス一世、革命騷亂の間に、其の後を襲へり。

露西亞はニコラス一世（千八百二十五年——五十五年）の時代に於て、著名なるクリミア戰爭を戰ひ、困難なる高加索征服を始めたり。波斯よりエリヴン及ナヒチエヴンの地を得、土耳其よりクバンの野、ダニユーブ諸領の保護權、及黑海、ダーダネールス海峽及ダニユーブ河の航海權を得たるニコラスは、隴を得て蜀を望みたる人の如く、更に黑海の全權を握り、ダーダネールスを越へて自由なる活動をなさんことを望み、千八百五十三年土耳其と戰を開きしも、英國、佛國及サルヂニアの同盟武力干涉に遇ひ、クリミアの戰爭に大損失を招きたりき。

アレキサンドル二世（千八百五十五年——八十一年）踐祚最初の事業としてクリミア戰爭の局を收め、列國と會して千八百五十六年の巴里條約を結べり。而して露西亞は野心の

巴里條約

カウカサス征服

中央亞細亞征服

結果としてダニユーブ河に於ける航海權、其の河口に於ける少許の土地（ベサラビヤ）及黑海に軍艦を置くの權利を失へり。此の損失が惹起したる憤慨は露西亞の智識的復活となり、民政主義の勃興となり、農民解放となり、刑法改正となり、地方自治制となりしか、不幸にして千八百六十三年——四年の波蘭土反亂は、獨裁帝王をして更に緊しく轡を執らしむるに至りぬ。

千八百七十四年に至り、強制徵兵の組織定められたり。

波蘭土は反亂の報酬として最後の自由を失ひ、高加索は長き抵抗の後、千八百五十九年遂に全く征服せられ、土耳基斯坦の諸州、全く露西亞の正朔を奉ずるに至り、ペルチツク諸領も中央政府の直隸と定められたり。

千八百七十年普佛戰爭破裂するに及び、露西亞は最早巴里條約に服從するの義務なく、黑海に軍艦を浮べ得るの權利ありとなし、翌年の倫敦會議に於て列國の承認を得、クリミア戰爭の損失の一を回復したり。

次で土耳其政府が其の國民中基督教徒たるものを迫害し、反亂鎭定の名に賴りて虐殺を行

サンステファノの條約　伯林會議　アレキサンドル三世

ふや、列國の使臣コンスタンチノープルに會し、改革の忠告を土耳其政府に與ふるあり、土耳其政府之を斥くるに及び、露西亞は歐羅巴の利益との名に賴りて、千八百七十七年四月土耳其に對して開戰を布告せり。これよりして有名なる露土戰爭となり、九軍團の大兵、ダニューブ河を亂り、六ケ月の激戰の後、プレブナの堅砦を陷れ、風雪を侵してバルカン山を踰へ、先鋒は飛鳥の如くマルモラの海に達し、コンスタンチノープルを指顧の間に望みたり。露西亞は勝利の權威を以て、サンステファノ條約を結び、莫大の利益を收めんとせしが、英國の干渉より、千八百七十八年の伯林會議に妨げられ、僅かにベッサラビヤ少許の土地とカルス、アルダハン諸港を得るに止まれり。

アレキサンドル三世が君臨したる最近十餘年間に於て、露西亞はクリミア戰爭、露土戰爭の創痍より快復し、軍備大に張り、財政大に整ひ、工業大に起り、今日の露西亞は如何なる點よりするも第一等國の眞價を有するものとなれり。十九世紀の初年に於て神聖同盟を以て歐洲の覇權を執りし露西亞は茲に再び同世紀の末年に於て佛露同盟を以て歐洲の覇權を握り、アレキサンドル三世は世界平和の擔保者なりと稱せられたりき。アレキサルトル

三世の後、新帝の第一事業は日清戰爭終局に於ける露、佛、獨の同盟干渉なりき。露西亞はこれよりして、亞細亞の新強國たる我等が常住不斷の記憶たるべき也。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

年代の順序によつて露西亞の畧歷史を叙し來つて、露西亞の過去は興味甚だ少なきを見たり。而して今や興味多き活動の舞臺に出でんとするを見る。露西亞は其の甚だ遲緩にして興味少なき發達の間に、大國民たるべき材料、準備を充分に貯へ來れり。されば歐洲列國の文明其の絶頂に達したる今日に於て、建國の途中に在る露西亞の運命を豫言すべきは年月と機會との二あるのみ。

確實なる膨脹

第二、コンスタンチノープルへ。

一、所謂露西亞の南下。

露西亞の膨脹は甚だ遲緩なりき。されど露西亞の膨脹は天然の指定なりき。故に露西亞の膨脹は確實なりき。ミスシッピー河の水が墨哥其灣に注ぐが如く、楊子江の水が支那海に注ぐが如く確實に、達すべき點まで達せずんば止まず。基礎一たび大平野の中央、モスコウに定められてより、同調の速力を以て四方八方に膨脹し、東方、蒙古人をウラルの外に逐ひ、終に全く悉比利亞を畧して太平海に達し、北方、瑞典人をスカンヂナビヤ半島に閉さして白海に達し、西方リスニア人及波蘭土との競爭に勝ちてバルチック海を領し、南方土耳其人を逐ひて、クリミアの地を呑み黑海に出口を求めたり。確實なる不斷の膨脹により、て、既に天然か區劃せる地域の八九分を充たし、既に天成の一大帝國の八九分を完ふし、北と東の兩方面に於ては既に陸地の極點まで達し、西に於ては容易に動かすべからざる西

只だ南方あるのみ

歐强國の基礎まで達したる後、膨脹的特性を有する國民は壓搾せられたる空氣の罅隙を求めて走り出づる如く、抵抗最も少なき點を求めて、此の方面に勢力を集中せり。南方は實に、露西亞——東は太平洋に限られ北は北氷洋に限られ、西は强國に拒かれたる露西亞が武を用ひ得べき唯一の方面にして、また用ふるに足り、用ふるに適したる情態にてありき。東部に於ては「メルタン」の强脅既に魯縞を穿つ能はず、中部に於てはタメルランの子孫、爭鬪分裂に精氣を失ひ、西部に於ては黑龍江畔の主權未だ全く判定せず、バルカン半島より高麗半島に至るまで、確實不斷なる膨脹的勢力を拒き能ふものあらざりし也。所謂露西亞の南下なるもの此の自然の疆界に驅られ、此の馴致の情態に誘はれて起り來れり。而もこれ或るもの、云ふが如く單に露西亞の野心にあらず、ペートル大帝の發明にあらず、露西亞帝國の傳說たるに止まらず、所謂露西亞の南下は寧ろ天然の指定せる運命の如き也。

南下は天命也

邦家に於ても、個人に於ても、自身なる觀念は總ての活動の根本也。自身なる觀念なき人は社會の舞臺に立つべからず、自身なる觀念なき國は世界の舞臺に立つべからず。日本をして世界の舞臺に仲間入をなさしめたる日清戰爭は、對外自主の同盟運動に負ふ所最も

露西亞の自尊心

多きが如きは、最近の的例として、自身なる觀念の最も大切なることを敎ふるものにあらずや。ペートル大帝の歐羅巴文明輸入策は大なる智識と大なる進歩を露西亞に與ふると共に多くの反動的精神を惹起したり、曰くこれ固有の自己を捨てゝ歐化するものなりと。自己なる觀念は始めて明白に言ひ現はされたり。進歩によりて自身なる觀念を得たるものあり、反動によりて自身なる觀念を得たるものあり、其の孰れにせよ彼等の血統は近時に至り露西亞主義の名を以て歐化主義に對し、歐化主義者が露西亞には特有の文明なし、只だ歐羅巴の文明に摸倣するあるのみと云ふに對して露西亞は歐羅巴に異なれる起原を有し、歷史を有し、敎化を有し、歐羅巴に異なれる文明を有し、新文明を建つべき自家の材料を有し、天職を有するとなす。此說一たび唱へられてより、露西亞の思想界一時翕然として之に向ふに至りぬ。ダニレフスキーガ其の名高き著『露西亞及歐羅巴』に於て

『露西亞は歐羅巴が始めには自ら破壞せし舊世界の健全なる液並に不健全なる液を吸ひたる根によりて養はれず——また歐羅巴が「チュートン」主義の底より營養を吸ひたる根によりても養はれず』。

と云へるが如き、露西亞を恃むこと最も大なるものと云ふべし。『ザール帝國及露西亞人』

南下に理想あり

の著者ポリユー曰く——

『十九世紀に於ける露西亞の最も奇なる現象は疑もなくスラボフイリズム (Slavophilism) 也。此の主義が近時思想家に及ぼせし權力は其の純然たる敎徒の數を以て較るべからず。狹隘なる信條、頑固なるドグマを以て立てる小きスラボフィル敎會は未だ多くの確然たる同喜者を有せず、堅固なる信仰者を有せずと雖、其の根底に存する國民的自尊の主義は多くの默契的信徒を吸集す、其の中には全くスラブ人崇拜熱を有せざるが如く見ゆるものすらあり。』

自國崇拜の極、一種の偏狹なる國粹主義となり、唯我獨尊(パーソナリティー)となることありと雖、自身の觀念はこれよりして必ず露西亞人の中に傳播せられたるべし。既に自身の觀念あり、露西亞は西歐以外の存在を有し、西歐以外の特性を有し、西歐以外の天職を有し、『露西亞大帝國』として世界の表面に雄飛すべきものたるを自覺す、其の膨脹は單に祖先の傳說に從ふのみならず、天然の指導に從ふのみならず、此に至つて一の明白なる理想を有すと云ふべきも。

理想を有し、天然に從ひて南下する露西亞は三つの願望、三つの目的地、三つの到着點を有す。

第一　東歐羅巴に於てはコンスタンチノープルへ。

南下の目的地

コンスタンチノープルに關する露の觀測誤れり

第二　中央亞細亞に於ては印度半島へ。

第三　東方亞細亞に於ては遼東及朝鮮半島へ。

露西亞の方面より見て、第一は南下の右翼たるべく、第二は其の中央たるべく、第三は其の左翼たるべし。而して其のコンスタンチノープルへ達せんと欲するもの及び朝鮮半島へ達せんと欲するものは共に中央なる印度の寶庫に達せんと欲するが爲めにあらずとせんや。

千八百五十八年に書かれたるエフレッツ谷鐵道に關する評論に於て、澳地利砲兵監ペロン、クーン觀測を下して云ふ、クリミア戰爭に於て排すべからざる西歐の障礙に會したる露西亞は今後、暫らく歐羅巴方面より海に達する願望を抛ち、主として亞細亞方面より達せんことを務むべし。かくして高加索の根據より一面には波斯灣に達するを得べく、一面にはアルメニア及小亞細亞を經て地中海に達することを得べしと。露西亞にして實に此の如き意を有せしならば、過る六十年間中央亞細亞に於ける政策は實際ありしよりも大に其の趣を異にしたるなるべし。露西亞にして實に波斯灣に達せんと欲せしならば、千八百二十八

年タルクマンチャイの條約以來、波斯と開戰し得べきの機會再三に止まらず、而して一たび此の機會を攫まば千八百六十四年高加索の全定以來、此の方面の兵のみを以て一擧直往波斯灣に達するを得べかりし也。去れど波斯方面に於ける露西亞の運動は甚だ活潑ならず、只だ英國外交官の勢力を殺くに滿足したりき。若し又た露西亞にして實にペルカン半島に對する願望を抛ち小亞細亞より黑海を制し、地中海に達せんと欲せしならば、露土戰爭の終局に於ける政策は實際ありしよりも大に其の趣を異にしたるなるべし。勿論千八百二十九年アドリアノープルの條約によつて、彼は小亞細亞のアカルチク、アカルカラキ、アナパ及ポチを得、千八百七十八年サンステファノの條約によつてカルス及びバツームを得て小亞細亞に於ける勢力を大に增進せり。されど千八百二十九年及千八百七十八年に於て土耳其は全敗者として全勝者たる露西亞の要求の一ケ條をも拒む能はざる地位に立ちたるを思ひ、露西亞にして若し實に小亞細亞に意あらば、ペルカン半島に於けるよりも容易に勝者の權利を貫き得ることを思ひ、而して實際に於ては歐羅巴方面に於ける要求の小亞細亞方面に於ける要求よりも大なりしを思へば、サンクト、ペテルブルクの內閣は小亞細亞に

重きを置かざることを推定すべき也。露西亞は露西亞大帝國の存在を信じ、其の活動を希ふ間は、決してバルカン半島に於ける願望を棄つ能はず、コンスタンチノープルを忘る能はざる也。カサリン女帝はケルソン門の南のアーチに『コンスタンチノープルへの道』と刻せしめ、アレキサンドル一世は我家の鍵はコンスタンチノープルに在りと云ひ、ニコラス一世は英國公使セイムールに垂死の病人土耳其の遺産處分をなさんと云ひたりき。コンスタンチノープルを占有するにあらずんば露西亞は地中海を用ふる能はず地中海を用ふる能はずんば獨力を以て歐洲の大勢を制する能はざる也。佛蘭西との同盟はコンスタンチノープルを占有せざる露西亞の止むを得ざる必要なりと知らずや。

露西亞が英國の金庫たる印度に對して隱すべからず、消すべからざる慾望を有するは、總ての人によりて太陽よりも明白なりと認識せられたる所也。此の慾望を達せんとする中央亞細亞に於ける活潑なる運動は、次節に於て之を詳記せんことを約す。

彼がまた朝鮮半島に達せんとする慾望を有するは既に屢々諷せられたる所にして、十九世紀末期の大事件たる日清戰爭に勝利を得なからも、局外の干渉によりて戰勝の獲物の半以

上を失ひたる我等日本人は、今に於て最も明らかに之を認めたり。

二、露西亞及土耳其。

土耳其の力は露西亞の南下するを拒く能はざりき。過去の歷史に於て然り。

土耳其。「オトマン」帝國。大「ソルタン」。彼は曾つて大なる領地と強き兵力とを有し、歐羅巴の恐怖なりき。十六世紀の末より十七世紀の初に至り、其の覇權漸く移りたる後も、其の領地は尙ほ北はダニユーブ河よりバルカン半島を包み地中海を踰へて南ナイルの瀑にまで達し、東はユーフラツツ河より紅海を踰へて西モロツコにまで達したりしが、十九世紀に至り、アルジール及チユニスに於ける佛蘭西の侵畧により、埃及を獨立國となせし英吉利の經營により、休息することを知らざる露西亞の膨脹により、著しく其の版圖を縮め、其の國力を弱めたり。アルジールは千八百三十年來佛蘭西の有となり、チユニスは千八百八十一年來、事實に於て佛領となり、埃及は今尙ほ土耳其の貢國たる名を有すれども、千八百八十二年以來、再び純然たる土耳其の領地となし得べからざるものとなり、而して千八百

七十八年の伯林條約によりルーマニア及セルビアの貢國は獨立國となりたるのみならず、前者はドブルヂヤ河畔の地を、後者はモラバ河畔の地を併せ、モンテネグロはツルシグノ及アンチハリを併せて獨立し、澳地利はボスニア及ヘルツエゴウイナを保護の下に置き、千八百二十七年に獨立したる希臘はセッサリーを合せ、ブルガリヤは列國監視の下に置かれたり。

始め土耳其をして今日の衰運に至らしめんが爲めに働きたるものは露西亞と澳地利となりき。奇怪にも今日に於て露西亞が東方歐羅巴に南下することを最も多く憂へ、其のコンスタンチノープルに達することを最初に拒むべき澳地利は、再三再四露西亞と協同して土耳其分割を計畫し、常に大なる利を露西亞に與へたりき。而して露西亞が土耳其に對して永遠の仇敵の如く振舞ふものは最初には生存競爭の必要よりし、生存競爭に勝ちたる後は大露西亞帝國膨脹の國是の必要よりして然るも。土耳其が小露西亞地方、南露西亞地方に主權を有し、露西亞の爲めに最重なる南方の出口を抑へたるは、譬へば伏魔殿の石碣の如く、此の石碣一たび取り除かれてより、百十道の異光八方に散りしが如く、露西亞は猛然

として世界の舞臺に現はれ來れり。土耳其が小露西亞地方に於ける權力を全く拋棄したるは、十七世紀の後半に於ける長き戰爭の後、千六百八十一年パクツチサライの條約によりてなりき。而して千六百九十九年のカーロウイツツ條約及千七百十八年のパサロウイツツ條約によりて全くボドリアの地を失ひ、露西亞は既にドニエペルの岸にまで押し寄せ來れり。或るものによりて南下的傳說の著者と稱せられたるペートル大帝、露西亞海軍を創設せんが爲めに黑海方面に出口を求めんとするの願望抑ふる能はず、戰を土耳其に求めて千六百九十六年、ドンの河口に當るアゾフ港を占有してより、更に其の成効を全ふせんと、義俠なる「メルタン」アーメット三世(千七百〇三年——三十年)が敗軍の王、瑞典のチヤールス十二世を庇し、露西亞の手に渡さゝるに口實を得て、再たび土耳其と戰ひ、大に敗れ、僅かにカサリン皇后の謀畧、賄賂によつて身を免れ、暴に占有せしアゾフを還し、再たび黑海の出口より閉鎖されたりき。千七百三十六年に至りて再たびアゾフを取り、オクザコフを取り、澳地利の土耳其分割策に同意し、攻擊同盟を作り、澳地利が常に敗績する間に、常に勝利を得しも、勢力なく雄圖なきアン女皇は却つて平和を希望し、モルダビアの地を

カイナルジ條約

クリミア半島

最強の堤防は崩れたり

歸し、千七百三十九年ベルグレードの條約を結べり。

賢良なる「ソルタン」、ムスタファ三世（千七百五十七年——七十三年）沒するの後、雄圖あるカサリン二世「ザール」の位を踐み、ベルグレードの條約を破り、モルダビアを侵畧し、連戰連勝、ダニューブの諸砦を陷れ、シユムラに於て土耳其の精鋭を滅し、千七百七十四年七月、一たび有名なるクチユク、カイナルヂの條約を結び、また之を破り千七百八十三年に至り、クリミア及カスピアン東方の地を占領せり。

クリミアの半島、——東方歐羅巴と小亞細亞の間にある黑海に突出して形勝の位置を占め、温和なる氣候を有し、富饒なる產物を有し、最初より、各人種の爭ひ奪ふ香ばしき骨なりき。韃靼人は之を希臘人より奪ひ、土耳其人は之を韃靼人より奪ひ、露西亞人は遂に之を土耳其人より奪ひたり。露西亞がクリミアを得、土耳其がクリミアを失ひたるとは、敵對しつゝある兩國の關係の一段落を劃したりとも云ふべく、露西亞はこれにより多年の希望を達し、南方に出口を得、黑海に根據を定め、土耳其をして成効を以て爭ふ能はざるに至らしめたり。東歐羅巴に於て露西亞の南下を拒くべき最強の堤防は崩れたり。

再度の分割案

ヤツシー條約

ブカレスト條約

土耳其の獨力、最早露西亞を防ぐべからざること漸く明らかなるに至りて、澳地利は再たび土耳其分割案を提出し、虎狼と同盟して羊を屠らんとせり。前の如く澳地利の軍は敗れ、勝利は獨り露西亞の手に歸し、土耳其北方の諸領を陷れ、黑海に於ける海軍を滅したり。

「ソルタン」セリム三世（千七百八十九年——千八百〇七年）復仇の役を起し、また〳〵露澳の同盟軍を誘ひ起し、澳にはベルグレートを取られ、露にはブカレスト、ベンデル、アクルマン、及イスメールを取られたり。此時革命の風雲西歐の天地を亂し事情甚だ切迫し澳地利は力を東歐に分つ能はざるの地位に立ち、交綏の必要最大なるを知りしかば、千七百九十二年正月ヤツシーの條約によつて東歐の平和を回復し、カイナルヂの條約を確かめ、ドニステル河を以て露西亞、土耳其の限となし、クリミア及びクバンは露に讓與せられ、ベルグレードは土に還付せられたり。

千八百十二年、土耳其はまたブカレスト條約によりドニステル河とプルス河との間の地を露西亞に讓與せり。爾後露西亞の運動は一段の活氣を帶び來りぬ。

千八百二十六年九月、アクルマンの條約によりて、露と接壤の地なるモルダビヤ及ワラチ

アクルマン條約

倫敦條約

露土戰爭

ヤの君主七年を任期として推選せられ、サンクト、ペテルブルク政府の同意なくして更替せしむると能はずと定められたり。此の如くして此地方の中心點は仔細もなくサンクト、ペテルブルクに移されぬ。間もなく露西亞は條約違反の苦情を唱へ、次て起れる千八百二十七年七月の倫敦條約、ナバリノの戰爭、基督教徒の追放、露西亞船舶の拿捕、其他の事件を口實として、千八百二十八年四月六日、豫ねて待ち設けたる開戰を宣告せり。

開戰宣告の後一ヶ月にして露兵プルス河を越へてモルダビヤ及ウラチヤの地に入れり。されど其の兵は、豫ねてより揚言せられたる如く多からず、其の運動は敏活ならず、ダニユーブ河畔に止まること六週間、イサクゼ、マツチン、ヒルソバ、バザルチク、ツルチヤ、クステンヂの六小砦を陷れたるも、シリストラ、シユムラの攻擊に手痛き損失を蒙れり。僥倖にもユスフ、パシヤの變心より海陸の要衝たるバルナを取り、シリストリア及シユムラを棄て、本軍ダニユーブ河を越へて冬營するを得たり。小亞細亞に於ける運動は之に反して、甚だ幸福なりき。波斯征討に名を知られたるゼネラル、パスケウッチ自からアルメニアに入りてカルス、アキヤルカラキ及アキヤルヂクの堅城を取り、別隊をして黑海沿岸を唱へアナツ

バ及ポチを取らしめ、翌年再度土耳其の軍を敗り。エルゼルームを占領せり。千八百二十八年の役、此の如く大功なく終りしかば露西亞は澳相メテルニツヒが百方妨害の計策を廻すを排し、翌年氣候の歸り來るを待ち氣力强健なるカウント、デービツチを將として再び決然たる運動を始め、六月十一日クレブトチヤに於てシツト、パシヤを敗り、七週間にしてシリストリアを拔き、直ちにバルカン山を踰へて八月二十日アドリアノープルを取り、前衛既にコンスタンチノープルの城壁を脅やかせり。軍隊の運動敏活なると天馬の如く、外交の言語、文書を蹴り飛ばし、コンスタンチノープルの占領、「オトマン」帝國の末期既に眼前に迫ると思はれたり。此に至りて、英國は最早や坐視して土耳其瓦解の弊を受くる能はず、アドミラル、ゴルドンに命じて、露西亞兵コンスタンチノープル攻擊を始むるの日直ちに艦隊を率てマラモラ海に入るの準備をなさしめたり。此に至り列國は最早坐視して英露衝突の弊を受くる能はず、各外交官特に普魯西亞政府の使臣ゼネラル、ムイフリツグの力によつて遂に「ソルタン」を說きて和を乞はしめ、千八百二十九年九月十四日のアドリアノープル條約を締結せり、此の條約により、露西亞は歐洲方面に於ける各占領地並に

カルスを還附したるも、ダニユーブ諸國を以て事實上の獨立國となし、海に於て陸に於て貿易自由の權利を收め、ボスフオルス及ダーダネルス海峽に於て出入自由の權利を收め、小亞細亞方面に於てはアナツパ、ポチ、アキヤルヂク、アキヤルカラキを領有し、黑海東岸の主人となれり。

土耳其は全く滅せられざりき。されど此時に蒙りたる創痍より全く快復する能はず、漸次衰廢して遂に『垂死の病人』となり、露西亞の勢力は大濶歩を以て增進し、爾後二三十年にして土耳其のみならず、獨逸の如きさへ其の影響を被るに至りぬ。

三、露帝ニコラス一世。

ルビコンの河を渡るか渡らぬかの一事は羅馬の運命を定め、ウオトルローの野に雨の降るか降らぬかの一事は歐羅巴の運命を定めたり。外交家をして居常最も堅固なる堤防も只一の蟻螻より壞ることあるを忘れしむるなかれ。若し之を疑はゞ乞ふクリミア戰爭の歷史を繹ねよ。

功名に燃えたるニコラス、露帝の位を踐むや、獨裁政治を完全に行ひ、歐洲文化の來侵を拒ぎ、兵備を擴張し充實し、メテルニツヒの羈絆を脫し、露西亞をして外交に於ける第一位の椅子を占めしむるを以て其の政綱となせり。政綱は實行せられたり。露西亞は土耳其を敗り、アドリアノープル條約に大利を得たり。全歐の君主、七月革命の激動を受け、頓倒の淵に拋げられんとするに際し、「ザール」の位のみは、暴風怒濤を嘲り、嚴然として東歐に聳立し澳帝の乞に應じ八萬の兵を出し匈牙利に於けるコスーの反亂を壓め、澳地利帝の恩人となれり。彼はまたシユレスウイツク、ホルスタイン問題に干涉せり。彼は普魯西亞王の心を攪り、後、東方戰爭の破裂するに及び、普魯西亞王をして、露普の同盟は自殺的なりとの說を唱へたる故を以て軍務大臣セヂラル、ポニンを罷めしめ、英吉利最貧なりとの故を以て「セント、ゼームス」宮廷への使臣セペリエル、ブンセンを呼び返さしむるまで再たび土耳其を計るの時機は來れりと。

ニコラスは寵寐、土耳其を忘れざりき。アドリアノープル條約の後、間もなく埃及の「パ

埃及叛亂に乘ず

シヤ」、土耳其の「ソルタン」に反し、大兵を擧げてコンスタンチノープルを脅やかすや、土帝に助を送るを約し、艦隊をボスフオロスに送り、陸兵をスクタリに上陸せしめ、更に一軍をしてダニユーブよりコンスタンチノープルに進ましめ、土耳其を助くるの名を以て、コンスタンチノープルに於けるセント、ソフィアの寺院に希臘教の十字架を建てんとの夢想——ペートル大帝以來カサリン二世以來の夢想を容易に實現せしめんと計り、英佛の妨害に逢ふて果さゝりき。

英國政治家と土耳其分割を語る

露西亞に對する英國の疑心は嘗つて消へたることあらざりき。而も千八百四十四年ニコラスが再度の旅行を英國に試みたる時より、英國一部の人士はニコラスを以て淡懷、敏活の人なりとなし、ニコラスは、また英國政治家の信用を得たりと思へり。彼はロルド、ウエリントン、及當時の外務大臣ロルド、アベルヂーン等と土耳其の將來を語り、其の必ず何時かは滅亡に會せざるべからざるを豫言し、其の處分につき英露の間に協議をなし置くことの必要を明白に說出したり。ニコラス歸國の後カウント、チツセルロードをして英國政府に致さしめたる覺書は此の際の談話を繰返したるものなりき。ニコラスは此覺書に於て、

チツセルロード覺書

土耳其の慣用政策

眞面目の調を以て露西亞と英吉利とは「オトマン」帝國の獨立して存在するにつき利害を共にし、其の安全を維持するにつきても利害を共にするが故に、外交の刺衝によつて「ソルタン」の心緒を攪亂するなきを以て最上の策となせども、土耳其なるものは嘗つて約束を重んぜず、信義を有せず、却つて自ら信じて一國の約束を破るも、列國の競爭嫉妬は必ず土耳其を孤立の地に陷らしめざるべしとするものなりと說き『土耳其帝にして他の政府の應援を有せざることを見るあらば、直ちに屈すべく、各種の葛藤は爭鬪に至るなくして滿足なる落着に歸すべし』と。覺書はまた土耳其に勸めて其の基督教徒を寬恕せしむるとの急務なること、此の條件だにあらば、英國も露國も共に其の存在を希望せねばならぬことを說き、されど多くの破滅的分子を含める「オトマン」帝國は一朝不事の出來事の爲めに顚覆するに至るやも計るべからずと一轉し、將來の不確實に對する唯一の實際的結論を與へて曰く『土耳其の滅亡に件ひて來る危險は、其の然る時に於て、露西亞及英吉利が執るべき方法につき豫じめ契合し置くことによつて大に減ぜらるべし。此の契合は澳地利の贊同を得ば愈ゝ大利あるべし。而して澳地利と露西亞との間には既に十二分の合同あり』と。

基督教徒保護問題露英澳の協同

英國答へず

垂死の病人

英國の政治家は、云ふまでもなく、此の如き文書に對して答ふる所あらざりき。而してニコラスは自家の解釋を與へて以謂らく『沈默は同意なり』と。

千八百五十三年正月九日、サンクト、ペテルブルクのヘレン大公夫人の宮に於て開かれたる饗筵に列したる縉紳淑女は、星の如く輝き廻り蝶の如く躍り廻りつゝある間に於て、長く記憶せらるべき外交事件か一隅に起りつゝあることを知らざりき。ニコラス皇帝、英國の使臣サー、ハミルトン、セイムールを一室に麈き、包まず隱さず、土耳其の未來を論じ、之に對する英露同盟の處置を論ぜり。曾つてニコラスの英國漫遊に際し、共に土耳其問題を論ぜしロルド、アベルデーン今や新たに內閣を組織せる時なりしかば、露帝は最も熱心に土耳其分割意見を貫徹せんことを希望したりき。『吾等は掌中に病人を有す——垂死の病人を有す。彼れ若し必要の整理成れる前に死去することあらば我等の不幸や甚だ大なるべし』とセイムールに云へるニコラスの言は名高きものとして今尙ほ記憶に殘る。數日の間同樣の談話繰り返され、ニコラスは露西亞か永久にコンスタンチノープルを占領するの意を有せさることを辨じ、英吉利の之を占領するともまた欲せざることを說き、セルウイヤ、ブルグリヤ、ボスニアを獨立國となし、モルダウイヤ、クラチヤと共に露西亞の保護の下に置き、其の代償として英國の好むに從ひ埃及を畧し、カンヂヤを畧するを默認すべきことを提議せり。英國內閣は露帝の診察を信用せず、土耳其は尙ほ健康躰を有すとなせり。バルカン半島分割案に至りては固より同意する能はず、其の露西亞の保護國と云へるは露西亞の領地と云ふ外交的言語に過ぎざることを知れり、而して露西亞にして一たびブルグリヤを領せば、速やかにバルカン山を踰へ、コンスタンチノープルに進み、ダニユブ河よりヤダハン岬に至るまでオリンピアン半島の全部を握らずんば止まざることを知れり、而して此の如きに至らば地中海は既に英の有にあらず、印度は既に英の有にあらざることを知れり。されば英國政府及英國人民はバルカン半島分割の提議を斥けたるのみならず、これよりしてニコラスを目して掠奪者となし、與に事を共にすべからざるものなりと肩を聳やかせり。

英國との相談

英國同意せず

八九年前よりして相談の端緒を開き、必ず贊成すべしと恃みたる英國の爲めに最も大切なる經綸を否定せられたるに失望し、贊成せざるものに最も大切なる秘密を語りたることを

悔恨したるニコラスは、莫遜、獨力其の經綸を實行せんとし、既に來りつゝありたる機會を攫取せり。ニコラスは尙ほ、露西亞との共同に反對せし英吉利も、露西亞の獨行には反對すまじきことを信ずる理由を有したりき。

ナポレオンの功名心

四、佛帝ナポレオン三世。

野心勃々たるルイ、ナポレオン既に「クーデター」を以て佛蘭西皇帝の位を潛し、佛蘭西の思量ある人士のみならず、立憲政治を重んずる全歐の人士をして、且つ驚異し且つ憤慨せしめたり。ナポレオンもまた自家の地位を知れり、「クーデター」を覆ひ隱すに足るべき何等かの事業を惹起し、外交によつて內治を忘れしめ、以て人心を收攬するの必要を感じたり、外交によつて內治を忘れしめ、人心を收攬して皇帝の位を安全鞏固ならしむる最上の策は露帝ニコラスが欲せし如く、歐羅巴の政界に最初の位置を占むるにありと計算せり。而して人情の欠處、離處、乖處、僻處を見るを唯一の能とせるナポレオンは、歐羅巴をして屢々其の常識を失はしめたる『東方問題』に手を著け、コンスタンチノープルに駐劄する

ナポレオン東方問題を再燃す

使臣に命じ、聖塲に關する契約を實行すべきことを土耳其帝に迫らしめたり。

天主教と希臘教との爭

聖塲とは、ヤエルサレムに於て耶蘇が刑せられたる塲所、死せし塲所、葬られし塲所なりと云ひ傳へられたる塲所の總稱也。此等の聖跡を監視するの權は、長き間、希臘教會と天主教會との爭ふ所なりき。千七百四十年には多くの特權、天主教會の戰將たる佛蘭西に與へられしが、其後、希臘教會は更に熱心に土耳其帝に迫り再三再四の勅書を要請し、佛蘭西の得たる特權を打ち消すに足る特權を得たり。

佛蘭西の要求露西亞の激昂

佛蘭西が天主教會の戰將なるが如く、露西亞は希臘教會の戰將たり。而して露西亞人の宗教を重んじ、迷信に富むは佛蘭西人の比にあらず。されば佛蘭西が千七百四十年の特權を恢復せんことを土帝に迫るの報傳はりたるときは、全露人心の激昂せること恰かも蜂窩にマッチを點じたるが如くなりき。知らずや、此の人心の激昂は、功名心に燃へたるニコラスが待ち設けたる機會なることを。ドルド、ジョン、ラッセル、巴里駐劄の使臣ロルド、カウレーに與へて曰く『女皇陛下の政府はコンスタンチノープルに於ける佛蘭西使臣を以て現時平和の狀態を攪亂する最初の人なりと判定するを禁ずる能はず……天主、希臘兩

佛蘭西の脅迫

教會の爭鬪甚だ活潑ならずとせず、されど佛蘭西の方に於て多少の政略的擧動あるにあらずんば、此等の爭鬪は決して親交列國間の關係を妨ぐることなかるべし』と。佛蘭西使臣ラベレットの談判は甚だ嚴重なりき。土耳其にして若し速やかに要求に應ぜずんば、佛蘭西は艦隊をシャフハに送り、シェルサレムを占領すべしとまで脅やかせり。脅嚇は其の効を奏せり。佛蘭西は遂に千八百五十二年十二月二十二日、ベツレヘム寺院の鍵を受取りたりき。

露西亞の反對

アドミラル、メンシコフ

露相カウント、チツセルロード此に對する露政府の決心を示して曰く、『害惡は既に成されたり、既に之を拒くの問題あらず。今や之を療醫するの必要あり。「オルソドツクス」宗教の特權の害せられたること、「メルタン」が確き誓約を皇帝に與へ而して之を破りたることは、返償の必要を訴ふ。……故に皇帝は我等の談判に聲援し、ラベレット氏の脅嚇の結果を打消し、一時の驚怖によつて事を處するを常とせる政府に對して起る急變に際し、自ら保つ爲めに、先づ準備方法を行ふことを必要とし玉へり』と。猶豫なく露西亞軍隊の動員行はれ、急燥、激烈なるアドミラル、メンシコフが使臣としてコンスタンチノープルに來りたるときは、露の艦隊既に黑海に艤裝せられ、三軍團の陸兵、既にプルス河に進みたりとのこと全歐に知れ渡りたり。ナポレオンの野心はニコラスの功名心に油を注ぎたる也。

メンシコフの要求

要求承諾

本幕は開かれんとす

メンシコフは天主教會に與へられたる特權を取り消さんことを要求せず、之に頑抗すべき特權を希臘教會に與へられんことを要求し、聖墓の寺院の塔を修復するの權、聖母の墓を拜する時間に關する權を要求し、希臘教の僧侶をしてベツレヘム寺院の本門に主任を占めしむべきことを要求せり。要求は固より瑣細のことなりき、英國使臣ロルド、ストラツフオールドの周旋により四月の末に至り容易に落着せり。されどこれ僅かに序幕なりき。驚天動地の悲壯劇となるべき本幕は速やかに開かれんとす、メンシコフは直ちにカイナルヂ條約に關する難問を提起せり。

カヂリン二世が戰勝の餘威を以て命したる、大切なるクチユク、カイナルヂ條約—土耳其をしてアゾフ、タガンロク及クリミアを失はしめたるカイナルヂ條約の大切ならざる條項が再たび土耳其の存在を危くすべき出來事を喚び起すべしとは誰しも思ひ設けざりき。

カイナルヂ條約は千七百七十四年七月十日に於て調印せられたり。其の第七條に於て土耳其大皇帝は『常に基督教及基督教會を保護すること、露西亞帝國政府の大臣に許すに、總ての場合に於て、コンスタンチノープルに於ける新寺院並びに此の寺院に執職するものゝ爲めに要請し得る權利を以てすること、而して此の如き要請は、親密なる隣境修交國の信任ある政府によつて提出せられたるものとして相當の考慮を費すことを約す』と宣言し、其の第十四條に於て、七條に載せられたる新寺院のことを説明し、露西亞政府に許すに、コンスタンチノープルのガラタ區に希臘教の公許寺院を建設することを以てし、此の新寺院は常に露西亞帝國大臣の保護を受くべきものなることを明言せり。條文明白にして、コンスタンチノープルに希臘教の新寺院を立つることを露西亞政府に許し、之を保護するの權利を與へたるの外、少しの疑義を容れざるものなりき。されど口實を見出すに熱心なる露西亞政府は明白なる條文に面倒なる解釋を附したり。土耳其皇帝、既に條約によつて基督教及基督教會を保護することを露西亞皇帝—特に露西亞皇帝に約し、而して滿足なる保護を與へず、これ露西亞皇帝に對する責任を果さゞるもの也、故に露西亞皇帝は條約の明文に

第十四條

露西亞政府の解釋

より、土耳其國内基督教徒の保護を要求すべき權利あり、土耳其皇帝はまたコンスタンチノープルに於ける希臘教會及其の會員の保護權を露西亞皇帝—特に露西亞皇帝に與へたり、既に一寺院及其の教徒の保護權を與ふ、豈に總ての寺院及び總ての教徒の保護權を與へざらんやとの論法により、カイナルヂ條約の結果として土耳其國内に於ける希臘教徒保護の權利を露西亞皇帝の手に握らんことを要求せり。メンシコフは最も驕暴の態度を以て此の要求を提出せり。

『此の如きの讓與行はれなば、其の結果は爾後千四百萬の希臘教徒をして最上の保護者として露西亞皇帝を仰がしめ、其の土耳其帝に對する服從をして名のみに止まらしめ、而して土耳其帝自身をして獨立自由の位より貢獻附庸の位に沈ましむべし』と英國外務大臣ロルド、クラレンドンの言ひし如く、到底獨立自主なる君主の承諾し能はざる所なりき。メンシコフは武力の後楯を頼み、到底容れられざるべき要求を强談し行けり、「メルタン」は容るべからざる要求を拒絶しながら、額上に差し向けられたるピストルを掃ふ能はざるを恐れたり。最後の決答遂に答へられ、五月廿一日メンシコフはコンスタンチノープルの土を

獨立自由なる君主の承諾し能はざる要求

拒絶

露軍プルスを越ゆ

ニコラス列國の形勢を測量す

蹴りて去れり。

七月三日露西亞の先鋒、プルス河を越へてモルダウイアの地に入れり。露帝、其の開戰にあらざることを辯解する宣言を發して曰く『百方勸誘の方法を盡したる後、朕はオトマン君主に示すに頑固の結果は如何なるかを以てする爲めにダニユーブに我軍を進むるを必要とせり。然れども、朕は今尚ほ開戰するの意を有せず。朕は此の占領によりて、朕が權利の恢復を確實ならしむる擔保を得んと欲す』と。

ニコラス、列國の形勢を測量して謂らく、普魯西亞王は最も親密なる友として露帝の勢力を尊重す。澳地利帝は匈牙利反亂の時に於ける露西亞の恩を忘れざるべし。英國の人民は商業の利益を第一として戰爭を忌み、其の政治家には露帝との交あるものあり、露西亞の要求を以て條約の意に從ふものなりと明言したるあり、されば曾つてバルカン半島分割に同意するを拒みたれども、露西亞が獨力之を經營するに反對せざるべし。佛蘭西或は反對すべきも、佛蘭西のみの反對は恐るゝに足らず、不信用なるナポレオンは他の强國を誘ふて同盟する能はざるべしと。此の如く測量して彼は何處までも其の要求を貫かんと試みたり。

土耳其皇帝形勢を測量す

列國土耳其の擧動を承認す

露軍ダニユーブを越ゆ

維納ノート

列國外交の失策

一方に於て土耳其皇帝は謂らく、露西亞の脅迫最も切也。其の要求を拒絕せば其の軍隊と會合せざるべからず。强盛なる露西亞との開戰は土耳其の不利に歸すること萬々明らかも也。されど列國の競爭嫉妬は、露西亞をして意を擅まにせしめざるべしと。彼れは英國の使臣ストラツフオードが陰かに、事情切迫に至らば、地中海艦隊に命じて直ちに進備なさしむべしと告ぐるに會して大に力を得、英國及三强國の使臣が談判に關する土耳其政府の擧動を認識するに會し、何處よりか應援の來るべきを賴みて、何處までも露西亞の要求を拒まんと試みたり。

露軍既にダニユーブ河を越えたる後も、外交は其の手を止めざりき。英、佛、澳、普四强國會合の結果として『維納ノート』なる仲裁案草せられたり。英國皇帝が『歐洲は露亞西の綫にかゝれり』と評したるが如く、此のノートなるものは、消極的に、言外の意味に於て露西亞の要求を否定せざるものなりき。露西亞政府は直ちに之を容れたり。ニコラスの計算は中れるが如く見へたりき。されど欠點は烟眼なるストラツフオードによりて看破せ

られたり、土耳其政府は其の敎を聞きてノートを修正せざれば承諾する能はずと拒絕せり。修正容れられて露西亞政府に送られたり。露西亞政府は直ちに拒絕せり。維納の會議其の効を奏せずして、兩國民間に於ける戰爭の熱、其の極に達し、仲裁は再たび入る能はざるに至りぬ。

開戰

シノープ海戰

ソルタンの哀訴

五、クリミア戰爭。

土耳其は十月四日を以て、露西亞は十一月一日を以て公然開戰を宣言し、陸に於てはオメル、パシヤ主力を率ひてダニユーブ河を渡り、十一月四日オルテルニツツに於て露の大兵を破り、海に於てはナキモフ提督、セバストポールを出で、十一月卅日シノープに於て土耳其艦隊を殆んど全滅したり。シノープの役は著しき激動を西歐に與へたり。「ザール」の計算は齟齬し、「ソルタン」の哀訴は成功せり。最初に土耳其を助けたるものは、佛蘭西なりき。コンスタンチノープル外交の時代に於て、第一の助言を土耳其に與へたる英國も、戰爭時代に於て默視する能はず、且つ東方問題なる語は、始めより英國の人心を

英佛土三國同盟

墺澳同盟

攪亂するに足る一種の魔力を有せり。英佛の艦隊は十月廿二日に於て、既に相携へてマラモラ海に入りて示威運動をなせり。維納會議功を奏せざるの後、英佛兩國は千八百五十四年三月十二日土耳其と攻守同盟を作り全二十八日露西亞に對して開戰を宣言せり。二大强國は既に敵となれり、他の二大强國澳地利と普魯西亞とにして若し同樣の地位に立ちしならば、露帝は直ちに屈したるなるべし。されど、露帝は墺地利の必ず忘恩者たらざるべきを頼み、普魯西亞の必ず賣友者たらざるべきを頼み、少なくとも兩國をして中立を守らしめんことを希望せり。普魯西亞は遠く土耳其を離れ、其の成敗により僅かに間接の影響を受くるに過ぎざるも、澳地利は近く境を接し、即時直接の弊を受けざるべからず、此に於て澳地利は先づ露西亞をしてダニユーブ河を越えざることを約せしめ、露西亞此の約を破るに及び、普魯西亞と攻守同盟を組織し、露西亞若しダニユーブ諸州を領有するか、ペルカン山を踰ゆるか、二つの一をなさば、直ちに開戰すべしと決し、撤兵の要求を露西亞に與へたり。露帝の兩國を信ずるの深き、尙ほ此の要求に重きを置かざりき。而して千八百五十四年六月十四日に至り、澳地利は土耳其と條約を結び、ダニユーブ諸州に出兵し、之

西歐同盟
サルヂニアもまた同盟に入る

全歐皆敵

を占領すべき權利を得、再度の維納會議功を奏せざるに至り、十二月二日遂に西歐の同盟に加はれり。ペルカン半島には何の利害の關係をも有せざるサルヂニアすら、カブールの機畧により千八百五十五年一月廿六日の條約により、露西亞に對する交戰同盟國の一となれり。ニコラスの計算はまた瑣末の點に至るまで總て齟齬せり。以謂らく事一たび擧げられなば、土耳其國内の基督教徒は到る處、蜂起して内應すべく、土耳其と不俱戴天の希臘は必ず回々教征伐の十字軍に加はるべしと。されどボスニヤ、セルビア、ブルグリア人は形勢を傍觀して容易に動かず、希臘人の激昂は、列國艦隊の脅迫及佛兵の上陸によつて早くも鎮壓せられたり。千八百五十三年、歐洲の形勢を測量し、或るものは露西亞の友なり、他のものは友にあらざるも敵にもあらず、露西亞は歐羅巴に於て、强大なる敵を有せずと推定して事を殆めたるニコラスは今や千八百五十五年に於て、友と思ひしものは友にあらず、敵にあらずと思ひしものは、敵なることを發見し、最初の企圖を貫かんと欲せば全歐を相手として戰はねばならぬ孤立の地に立てることを發見せり。

同盟軍は南方黑海の濱より、北方ペルチック海の濱より露西亞の兩面を攻擊せり。されど

クリミア戰爭

ニコラス逝去

セバストポール陷落

其の主力を注ぎたるは黑海方面のクリミア半島に在り。クリミア戰爭の名是より來る。一年半餘繼續せるクリミア戰爭に於て露西亞は何處に於ても勝利を得る能はざりき。セバストポールを合圍せる十七萬四千の同盟軍を苦め、ニコラスの股肱と頼まれたる『正月將軍』、『二月將軍』すらも、戈を倒まして ニコラスを刺すに至りぬ。失敗を慣りて健康を傷りたるニコラスはインフルエンザに冒され、千八百五十五年三月二日憾を呑んで逝去せり。『總て朕が精神、總て朕が經營は露西亞の幸福の爲めに盡されたりき。朕は鞏固にして秩序あり、外患の恐なくして十分光榮あり且つ平和なる帝國を爾曹に讓らん爲め、尙ほ働かんことを念ぜり。されど爾曹は今や如何なる時に於て如何なる狀態の下に朕が死するかを見る。此の如きは神の意也。爾は重荷の堪へ難きことを見るべし』。血涙の遺言は此の如くなりき。十五萬の守兵と十七萬四千との同盟軍が日夜交戰すること十一ヶ月の後、千八百五十五年九月八日、セバストポールの堅壘遂に陷りたり。次で十一月廿八日露兵小亞細亞に勝を得、カルスを陷れたり。

平和の希望は双方に起れり。最初より戰爭の發頭人とも云ふべき佛帝ナポレオンは既に其

戰爭の發頭人また平和の發頭人

平和會議

の志望の一分を達したり、佛蘭西の軍隊は同盟軍中の華なりと評判せられ、ナポレオンは希望の如く、全歐に武名を輝やかしたり。虛名を張るを以て第一の主義となせる彼は既に武名を輝かしたる後、また平和恢復者の榮冠を掌中に收めんと欲し、戰爭の發頭人たりし如く、媾和の發頭人となれり。露の新帝アレキサンドル二世は、始めより平和の君主なりしも、一功を奏せずして敗北の平和を買ふは、激昂せる民心を收攬する所以にあらざることを知れり。而してセバストポール陷落の後、小亞細亞に於て得たる大捷は此の困難なる戰爭を收むるに最上なる時機なりき。墺地利もまた既に平和條件をサンクト、ペテルブルク政府に示したり。此に於て、露西亞、佛蘭西、英吉利、墺地利、普魯西亞、土耳其及サルヂニヤの使臣、佛都巴里に會して平和恢復を相談するに至りぬ。

六、巴里媾和條約。

巴里媾和條約は千八百五十六年三月三十日を以て決定せられたり。其の項目の主要なるものの左の如し。

附

占領地還

土耳其を列國に加ふ

歐洲協議の約

土耳其の基督教徒

黑海中立

一セバストポール及其他同盟軍の占領せる土地は露西亞に還附すること。

一露西亞の占領せる小亞細亞のカルスは土耳其に還附すること。

一土耳其を歐洲列國の仲間に加入せしめ、基督教國の法律、制度の利益に與らしむること。

一列國土耳其の獨立及主權を尊重すること。

一列國共に前記の約束を遵奉すべし、故に之に背戻する如き擧動は一般利害の問題となすべきこと。

一土耳其帝は列國に約して國內基督教徒を保護すること（これ土耳其帝が露西亞に約したるものを列國に約せしめ、露西亞のみに對して負ひし責任を列國に對しても負はしめ、事實に於て、露西亞が要求せし基督教徒保護のことを列國協同監視の下に置き、露西亞の獨力經營を妨げんと欲したる也）。

一黑海を中立となし、其の海水、港灣は各國商船の出入航行を妨げざるも、戰艦は其の海岸を領する國のものたると、然らざる國のものたるとを論ぜず、之を嚴禁すること。

一兩國が海上警察及海岸保護の爲めに同數の小艦を使用するは前記規定の限にあらず。（後露、土の會議により兩國は八百噸以下の汽船六隻、二百噸以下の汽船或は帆船四隻を有すべしと定めたりし）。

一露西亞、土耳其共に黑海に陸海軍武庫を造らざること。

一ダニユーブ河の航行自由なるべきこと。

一露西亞は諸占領地還附の應償として且つダニユーブの航行を確かむる爲め、ベサラビヤに於て讓地をなすこと。而して此讓地はモルダビアに合すべきこと。

一モルダウイア、ワラチア、セイウィアは依然土耳其の屬國とし、人民によりて選擧せられ土耳其帝によりて是認せられたる君主を戴かしむること。

一ダルダネルス及ボスフオロス海峽は土耳其平和の時に於て決して他國軍艦の通行を許さゝること。

英、佛、澳の三國は一方には强大なる露西亞に對し、他方には勃興するサルヂニアに對して土耳其が感ずべき孤立薄弱の念に助を與へん爲め、四月十五日を以て別に誓約をなし、

ダニユーブ航海

バルカン諸國

海峽閉鎖

英、佛、澳の特約

土耳其の獨立及主權を尊重すべきことを重ねて明言せり。

此時英、佛兩國はまた別に瑞典と條約を結び、瑞典は現時領土及漁業權利の一部も露西亞に讓與せざるべきことを明言し、英、佛兩國は此點に於て兵力を以て瑞典を助くべきことを明言し、此の方面に於ても露西亞を拒くの法を講じたりき。

シリミア戰爭は此の如くにして終れり。關係せし列國は果して如何の利益を收めたる乎。

ナポレオンは武名を輝やかさんが爲めに戰爭せり、武名は豫期の如く輝き、佛蘭西は露西亞に代りて歐洲の第一位を占めたり。されど十萬の血を以て購ひし武名今何處にか在る、流竄の墓地に一の冷やかなる骨の殘るあるのみ。土耳其は自衛の爲めに戰へり、垂死の病人は兎に角蘇生して、列國と坐を同ふするを許されたり。されど三萬五千の勇士の血によつて拒かれたる國土のバルカン山以北、今は既に「ソルタン」のものならず。サルヂニアは自立の爲めに戰へり、列國は之を認識し、伊太利統一の基礎定まりたり。されど建國、膨脹、繁榮、强兵、同盟の回轉の後、今や後者を飛しむる破產の般鑑として哀れなる影をアドリアチックの水に落す。英國は東方問題を決定せんが爲めに戰へり。二萬六千の人を失ひ、

佛蘭西なか得たる

土耳其は

サルヂニアは

英國は

陸に於て海に於て何事の著しきものをも爲す能はず、列國の間に名聲を損せしも、巴里の媾和に於て、露西亞の野心を挫き、土耳其の獨立を助け、東方問題を決定し得たる如く思はれたりき。されど巴里の媾和が東方の平和を有ち得るは二十五年に過ぎずと云へるロルド、アベルデーンの豫言は的中し、今に至りて益々露西亞の南下に脅やかさる。露西亞は南下の理想の爲めに戰へり。戰場に於て挫かれ、媾和に於て挫かれ、歐洲最强と誇稱したる兵力の評判を失し、無盡無算と評されたる財力の弱點を暴し、自家庭園の湖水なりと誇りし黑海を失ひ、二十五萬の勇士を失ひたり。されど今は、兵力に於ても財力に於ても第一等國として、佛國西を提けて世界の舞臺に横行濶歩しつゝある也。

千八百二十九年ニ子ツスルロートの言

七、老衰者の火藥庫監視。

露西亞が土耳其に對して執り來りたる政策を再記して明白ならしめんが爲め、左に二つの事實を掲ぐべし。

一、千八百二十九年に書かれたる露相カウント、チツスルロートの私信の一節。——陛下ニコラスの決心は「オトマン」帝國を過度に壓抑し滅亡に歸せしむるにあらずして、只だ彼國の鍵鑰を掌握し、我國をして彼國を拘束するに足らしめ、此の負債の存在することに重みを付け、以て土耳其をして長く露西亞に對する自國の地位を知らしめ、若し再たび露西亞に挑むことあらば、必ず滅亡に至らんことを知らしむるに在り。

千八百五十三年ニコラスの言

二、千八百五十三年英國使臣に對する皇帝ニコラスの談話の一節。——吾等は掌中に病人を有す—亟死の病人を有す。彼れ若し必要の整理（遺產分配に付き英露の相談）成れる前に死去するの日あらば我等の不幸や甚だ大なるべし。

一は「アドリアノープル」條約の後に書かれ、一は「クリミア」戰爭の前に語られ、一は土耳其維持政策の利を說き、一は土耳其分割政策の利益を說くもの、而して兩者相待つて露西亞が土耳其に對する年來の政策を說明す、露西亞が土耳其に對する、チツスルロードが云へる如く、ニコラスが云へる如く、容易に滅ぼす能はざる間は、之を助け之を存し、其の微弱に乘じて漸次利益を占め權威を立て、一舉して滅すの機會來り、滅すの利益明らかなるに及んでコンスタンチノープルに進むにありき。所謂存すべくんば之を存し滅すべくんば之

存すべくんば存し滅すべくんば滅す

アベルデーンの嘆息

土耳其の内情

を滅するにありき。されば其の土耳其に對してなす所、一定せず、或は他と聯合して之を攻め、或は之を助けて內亂を鎭定し、時により場合により、友となり、敵となり、敵とも ならず、友ともならざること多年、今や全滅するの時機遂に至れりとして千八百五十三年の役を起したりき。而して意外にも英佛の聯合に會し、クリミアの戰場に於て、巴里の平和に於て大なる創痍を蒙り、軍制整理、銃砲改良、鐵道布設等の準備充分なるまでは、再たび馬をダニューブに飲ふ能はず、船を黑海に浮ぶ能はざる地位に追ひ込められたり。

西歐諸國が滿足の祝杯を擧ぐる饗宴に於て、ロルド、アベルデーンは苦笑して豫言せり、巴里條約は二十五年の平和を維持するに過ぎずと。豫言は不幸にして適中せんとす、二十五年を待つまでもなく二十二年にして適中せんとす。

止むを得ざる運命は世界に於て最も微弱なる土耳其政府に托するに世界に於て最も困難なる事業を以てしたり。土耳其の如き餘り廣からぬ領土に、人種の差異により、宗敎の差異により、相互に仇敵の如き觀をなせる雜駁の人民を抱合し、秩序を以て平和を以て之れを統治せんことは、西歐の强國を以てするも尙ほ成功を保し難し、況んや權威なき土耳其政

最も微弱なる政府

最も困難なる事業

府の手を以てするをや。天主敎徒は希臘敎徒と相容れず、希臘人は「スラブ」人を嫌ひ、「スラブ」人は希臘人を恐れ、露西亞を賴み、「アルバニア」人は「スラブ」人を嫌ひ、希臘人を嫌ひ、「マホメット」敎の「アルバニア」人は基督敎徒の「アルバニア」人を嫌ひ、各人種各敎徒、時としては仇敵の如く相對し水火の如く相爭へり。寬大を以て臨めば、相互の爭鬪紛亂を制する能はざるに至り、壓制を以て臨めば、苦痛の極、近隣の同胞同敎國に逃奔するを拒く能はず、深謀遠慮あり變通自由なる行政制度を以てせずんば、到底中央政府をして權威を有たしめ、反目せる各人種各敎徒をして滿足せしめ悅服せしむること出來べくもあらざるは明白なりき。而して各人種各敎徒が滿足し悅服せざる事は、屢ゝ强國が土耳其內政に干涉する理由となり口實となり、土耳其の平和を攪すのみならず、全歐の平和を攪す源因たりき。曾つて世界の恐怖たりし土耳其政府も此時に及んでは到底此の如き能力を有し、知覺を有するものにあらず、千八百五十三年の苦々しき經驗を嘗たるに拘はらず、政治上の改良、軍制上の改良、以て其の衰勢を挽回し地位を維持するに足るべき事を勉めず、形勢の推移するに任せ、害惡の發達するに任せ、運命の爲めに餘儀なくされたる微弱のも

土耳其の内政一の進歩なし

のが常に執る最も惡しき二つの極端政策を執り、權威の行はれざる一方に於ては全く權威を棄て、なり行くがまゝに放任し、權威の行はれ得べき他方に於ては極度まで權威を張り、權威の最も必要なる場所には少しも之を行ふ能はず、權威の必要ならざる場所には極度まで之れを行ひ、遠くして強きものは之を放任し、近くして弱きものは之を壓抑せり。土耳其政府をして土耳其の政治を行はしむるは實に半身不隨の老病人をして爆烈性激甚なる火藥庫を監視せしむるが如くなりき。

土耳其の權ルーマニアに衰ふ

火藥庫は時々爆烈せり、巴里條約は一項また一項、漸次破碎せられたり。從前の如く土耳其と屬國の關係を保ち、人民によつて撰擧せられ、土耳其皇帝によつて承認せられたる君主を戴き別々に治めらるべしと定められたるモルダビア及ワラチアは、早くより同一の君主を戴き、千八百六十一年十二月二十三日に至り合併してルーマニアの國號を建て、千八百六十六年十二月の內亂により前君主を廢して「ホーヘンゾレン」家のチャールスを迎立し、土耳其皇帝は之を認めてルーマニア世襲の君主となし、かくて此地方に於ける土耳其の權威は單に名のみのものとなれり。セルウィアも千八百六十八年の出來事——君主ミカ

セルウイアに衰ふ

クリートに衰ふ

エル、オブレノウイッチ暗殺せられ、ミラン、オブレノウイッチ十三歲にして立てられ、國會自ら議員中の三人を選び三年間幼君の攝政者たらしめしこと——によりて示さる如く實際に於ての獨立國なりき。

クリート島は九年間の獨立戰爭に於て終始一徹希臘と苦痛を共にしたり。九年の辛苦遂に勝を得て希臘は獨立國として列國の承認を得しも、クリートは千八百三十二年の倫敦會議に於て土耳其に返され、土耳其は之を埃及君主に托したりしが、千八百四十年埃及反亂の後、土耳其の直轄に復せられたり。土耳其の復讎の慘酷なりしは云ふまでもなし、クリート人遂に忍ぶ能はず、千八百六十六年四月「ソルタン」に哀訴し、拒絕せらるゝに及んで九月二日國民議會の名を以て、土耳其に反し希臘に合併することを宣言せり。迅速に送られたる土耳其兵容易に鎭定の功を奏する能はず、千八百六十七年三月、佛蘭西、露西亞、普魯西亞及び伊太利は歐洲平和の攪亂せられんことを恐れてクリートを棄てんことを土耳其に勸告したりしが、土耳其は却つて英國の言に聞き、決して之を希臘に讓らずと主張せり。希臘は始めより巴里條約に平らかならざりき。彼は單に土耳其の壓抑を離れて獨立國とな

りたるを以て滿足する能はず、既に獨立を得て、昔日の榮華、領土の克復を夢想せり、而して巴里條約は此の願望に反對の傾向を示したりき。されば土耳其なる語は時として希臘全國の血液を沸騰せしめ、國王オトは國民の願望に忠實ならず、之を實現するの力量を有せずとして千八百六十二年の內亂によりて廢せられたりき。此に於てクリート人の反亂を見たる政府は議會に於てクリートを併すの政策を執ることを公言し、義勇軍は一團また一團、土耳其公使館の前に示威運動をなしてクリートへ航し行けり。時情愈々切迫、開戰の日、目前にあらんとして、普相カウント、ビスマークが千八百五十六年の巴里會議再興の議あり、列國之を贊し、千八百六十九年正月巴里に會し、列國の權威を以て希臘を鎭め、クリートを壓し、土耳其をして所有權を失はざらしめたりき。クリート人、希臘人共に意を遂せず、土耳其は寸土も失はざりしかども、僅に市民の蜂起を鎭定する能はずして列國を煩はすに至りたることとは、土耳其の衰微愈々甚しきことを吹聽せり。

巴里會議

黑海中立廢棄

普佛兩國運命を賭する大戰をなし、歐洲の中原紛亂するに乘じ、露西亞は千八百七十年十月三十一日、巴里條約の黑海中立に關する項を遵奉する義務の盡きたることを公言し、列

國の交涉に應ずべき意を示せり。普佛開戰の始めに當り墺地利を抑へて普魯西亞の背を突く能はざらしめたる露西亞の恩に報ぜんとて、普相ビスマーク直ちに巴里條約調印者の會議を發議し、千八百七十一年三月十三日倫敦に於て露西亞をして希望を貫徹せしむべき決議をなしたりき。

歐羅巴は三つの明白なる事實が東方に於て日月の進行と共に增長しつゝあるを見たり。

一、土耳其は日一日、漸を逐ふて衰頽しつゝあり。

二、巴里條約は項一項、漸を逐ふて實際の効力を失ひつゝあり。

三、露西亞は日一日、漸を逐ふてクリミア戰爭以前の地位に立ち歸りつゝあり。

八、バルカン半島の不穩及列國の要求。

果然、老衰者は火藥庫監視の職務を完ふする能はざりき、爆烈は始まれり。千八百七十四年ボドゴリッツァに於てモンテネグロ人と土耳其人との間に爭鬪あり、死傷あり、土耳其人五名死刑を宣告せられ二十名禁獄を宣言せられたり。土耳其政府は宣告を

モンテネグロの激怒

ボスニア及ヘルツエゴウイナの飢饉

執行することを拒みたる後、戰爭の脅聲を以て爭鬪に關せるモンテネグロ人引渡を要求したる後、露、獨、澳三强國の勸告に遇ふてモンテネグロの要求に隨ひたるの後、囚人をして逐電せしめ而も刑罰の執行を布告せり。傲慢無禮不信の擧動は甚だしくモンテネグロを激昂せしめ、早くも交戰國の如き感情を以て土耳其に對せしめたりき。

千八百七十四年、ボスニア及ヘルツエゴウイナは不作の爲めに困難の狀態に陷れり、而して土耳其の收稅吏は用捨もなく、手に任せて總てのものを剝き去れり。土耳其の稅法は農産額の十分一を徵收することを期定したりしも、實際の徵收は常に八分一乃至七分一に上り、農夫實際の收得は三分の一に達せざることあり、加ふるに家稅、地稅、家畜稅、煙草稅の如き政府の都合のまゝに增減せられ、稅吏の愛憎のまゝに增減せられ、民皆な豐歲にも餘裕ある能はず、凶歲には身を養ふ能はざるの境遇にありき。かくて凶歲は來れり、家を棄て地を棄て、クロアチア、ダルマチア、モンテネグロ、セルウイアに逃走するもの陸續相望めり。政府は歸るものには恩典を與ふべきことを布告せり、布告によりて歸りたるものは皆な欺かれたることを發見せり。此に於てヘルツエゴウイナの人民は現在の苦痛に堪

ヘルツエゴウイナ蜂起

叛民の要求

墺獨澳の仲裁

へず、且つ澳地利がヘルツエゴウイナ及ボスニアを買收せんとすとの風說を聞きて憤り、モンテネグロ及セルウイアの聲援を頼み、千八百七十五年七月、蜂起して官吏を殺し、反亂の旗を飜し、ダルマチア、モンテネグロは兵器及人員を以て之を助けたり。土耳其の將デルウイッシユ、パシヤ鎭壓の容易ならざるを慮りモスタルの天主敎僧侶の仲裁に從ひ叛民と商量するあり、叛民は全く稅法を改革すること、邦人を以て土耳其官吏に代ふること、及公安維持の爲め市民軍を編制することを條件として戈を拋たんと發言したりしも、到底承認せらるべくは思はれざりき。ヘルツエゴウイナの成敗は、セルウイア及モンテネグロの向背によつて決せらるべく、而して兩州は三强國によつて嚴正中立を有つことを勸告せられたり。されどヘルツエゴウイナ人は少しも屈せず、八月初に於て既に一萬二千乃至一萬四千の兵勇を募り得たりき。

叛民速かに鎭定せらるゝにあらざれば、單に土耳其全國の擾亂となるのみならず、影響の及ぶ所、遂に東方問題の難局を喚起し來るやも知るべからず。此に於て露西亞、獨逸、澳地利の三强國は土耳其政府と叛民の間に立ち調停の勞に當り、土耳其政府も逡巡躊躇の後、

強國の勸告を容れ、セルベル、バシヤを派して叛民疾苦の實狀を視察せしめたり。露、獨、澳、佛、英、伊六國の領事も叛民を諭さんが爲め道を分ちて叛地を巡り、彼等が希望する改革の實行に對して最も明瞭なる擔保を與へらるゝにあらざれば、彼等は決して刃を收めざるべしとの觀察を齎し歸れり。

改革約束

此時に於ける土耳其政府の處置は、東學黨の叛亂猖獗なりしときの朝鮮政府の處置の先例なりき。十月二日及十二月十二日の宣言に於て「ソルタン」は改革を約束せり。司法及行政

●會議員は人民に撰擧せらるゝこと、人民は法律によらずして獄に投せられざること、收稅吏員も公撰せらるゝこと、財產の權利保證せらるべきこと、回々教徒にあらざるものも官に就くを得ること等の改革を約束せり。されど此の恩典は眞實に義務を盡したる忠良の臣民にのみ與へらるとの一節は暗にボスニア及ヘルツエゴウィナを例外に置くの意を包みたる如くなりき。

改革の約束——曾て改革を行はず、曾て約束を行はざりし土耳其皇帝の改革約束。其言語に於ては如何に莊重寬大なるも、列國の保證なく監視なくしては到底紙上の空文たるに過ぎず。此に於て澳匈帝國の外務大臣カウント、アンドラッシーが露、獨、澳三國の委托によりて草し英、佛、伊三國の同意を得たる照會書、千八百七十六年一月十三日を以て土廷に送附せられたり。照會書はボスニア及ヘルツエゴウィナ靜定の要件として五ヶ條を列記せり、(一)宗教の自由、(二)生產の割による徵稅法の廢止、(三)ボスニア及ヘルツエゴウィナの直接收入を以て兩州の直接利益を計ること、(四)同數の回々教徒及基督教徒を擧げて改革實行監視委員となすこと、(五)工業發達の途を計ること。土耳其政府は速に勸告に應じ、二月十三日皇帝の名を以て五ヶ條を布告し、廿三日には叛民に大赦、撫育、救與の特典を施すべきことを宣布せり。されどこれ一場の狂言なりき。優遊不斷なる土耳其政府がかくも速に改革の勸告を承認したるは、承認することによりて拒絕せんと欲したる也。

アンドラッシー照會書もまた空文に過ざりき、土耳其政府が利害異る列國の連署を見て、責任を果さゞるも恐るべき結果を見ずと推定したるは理由なきにあらず、土耳其は常に此利害の衝突に依賴し撰手して推移するを唯一の政策としたりき。最も深く利害を感じたるは澳地利也。異姓のものを合せたる澳地利帝國の基礎は甚だ堅からず、少しの震動にも大

澳地利の利害
英國の利害
露西亞の利害

なる影響を蒙ること、石と木とを合せて作りたる家屋の地震に耐へざるが如く、内に於ても外に於ても、現時の狀態を維持する保守政策を必要とし、現時の狀態を破らんとするバルカン半島の擾亂に苦しむこと最も大なりき。澳地利は現時の狀態を維持せん爲に英國の同盟を求めたり。排露熱其絶頂に達したる英國は排露熱の故を以て妨害の政策を執り、土耳其政府の改革に反對するを奬勵し、他國の勸告を拒絶するを奬勵し、而して一も自己の勸告を與へず、只迅速に用捨なく反亂を鎭定するを勸め、澳地利を誘ひ固く國境を閉し、奔逃者をして隱家を求むる能はざらしめたり。露西亞は寧ろ叛亂を利益と見たれども、尙其の鎭撫の爲に、少なくとも信切らしき助力をなさゞりしにあらず、されど英國及澳地利が力を盡して叛民の不利を誅らんとするが如きを見て、不幸なる叛民の正當なる要求に同情を增し來り、新聞紙は早くも武力干涉の必要を論じ始め、宰相ゴルチャコフの私使は千八百七十六年四月五日スットリナに來り、叛民と商量し、叛民の總代となり、伯林に開かるべき會議に赴けり。

危機は日一日切迫せり。英國及澳地利は何事もなさず、露西亞は最早忍耐する能はざるに

伯林覺書

英國列國協議の政策を破る

至れり。五月十日露相ゴルチャコフ、獨相ビスマーク及澳地利の外務大臣アンドラッシーと伯林に會し、アンドラッシー照會書の主意に基ける覺書を提出せり。覺書は土耳古政府と叛民とを調停する爲め二ヶ月の休戰を布告すること、列國の領事をして改革の實行を監視せしむること、領事を保護する爲め協同艦隊を派遣すること等の要件を列擧し、二ヶ月の間に何事もなされずば列國は强硬手段に出づべきの意志を表示したり。露、獨、澳の三國之を決議し、他の三國に廻附して同意を求めたりき。佛、伊は速に同意を表せり、獨り英國は、覺書を以て叛民を煽動し土耳其の主權を害するものなりとして同意せざるのみならず、私に覺書の條項を土耳其に牒し、優柔不斷を以て歐洲列國の意見を拒絶すべきことを勸めたり、此反覆の擧動により列國協同の望絶へ、列國の協同破れたることによりて巴里媾和の骨子碎かれ、東方戰爭は日を期して待つべきものとなれり。一二年の後、ロード、グレンヴィル譬喩を以て形勢を說きて言ふ、一人の街上を騷がすものあり、若し他の一人來りて之に干涉するあらば、騷擾は益ゝ甚きに至らん、されど五六の巡査來りて力を合せ之を制するあらば騷擾は直に鎭めらるべしと。英國の不同意は東方戰爭再燃に少なか

獨逸、佛蘭西領事殺害

らぬ責を負ふものと云ふべし。

九、ベルカン半島の叛亂及列國の運動。

害惡は單獨にして來らず、常に相伴ふて來る。五月六日サロニカの暴民獨逸及佛蘭西の領事を殺害せり。土耳其官吏及警官が此の暴擧を教唆せるの跡現れて、兩國は直ちに要償を提起し、佛、獨、伊、露、澳、希の軍艦サロニカの港を歷して來り、英國は十二隻の鐵艦をベシカ灣に送りてダーダネルスの海口を扼したり。獨逸が要求したる卅萬フランの遺族救助料は左なきだに財政困難なる土耳其の到底拂ひ得べきものにあらざりき。官吏は數月の間、俸給を得ず賄賂によつて生活し、兵士は掠奪をなすの外生存するの法なかりき。風說は云へり、民間には一錢なく、宮殿には萬金堆をなすと。財政紊亂、兵力微弱、ボスニア、ヘルツエゴウイナの叛亂容易に鎭定せられずして不平黨勢を逞ふし、コンスタンチノーブル市民の劍を執りて起つもの一萬に及び、露西亞排斥、叛民鎭定、モンテネグロ征伐を叫び、五月十一日王宮に迫り、宰相マムード、パシヤを罷めしめ、運動の張本ウセイ

コンスタンチノープル混亂

大混亂

ブルゲリア人剿除策

ブルゲリア反亂

虐殺

ン、アウニ、パシヤをして陸軍總督の職に就かしめたり。二十九日に至り閣臣は遊怠無氣力なるアブヅル、アヂツツを廢し其の長子アブヅル、メヂツトを立てゝ「ソルタン」となせり。

近世史に於て最も慘酷なる悲劇と稱せらるゝことブルゲリアに起れり。クリミア戰爭以來、土耳其はダニユーブ南方の地を占めたるブルゲリア人を剿除し、韃靼人及シルカシア人を移し來り、露西亞に對して堅固なる藩屏を作るの政策を執れり。露西亞に對して堅く本土を防ぎたる韃靼人等はブルゲリアの地に移されてより遊民となり强盜となれり。ブルゲリア人は哀訴請願の方法を盡したる後、ヘルツエゴウイナの例に從ひ、血氣の青年千八百七十六年五月一日を以て、チルノバ附近に反旗を立て、フイリツポポリスとメアイアの間にも同一の例に倣ふものあり、叛民の數一萬以上に達したり。ルーメリア及ブルゲリア守備隊の司令官、兵數の寡きを憂へ、青年、破落戶、囚徒を驅りて軍に加はらしめ、漸く叛民を擊ち平げたり。統一なく血に飢へたる軍隊は虐殺を始めたり。野蠻の犧牲となりし無辜の民、十萬を過ぐとも云はれ、三十萬に達したりとも算せらる。募集兵の隊長アクメツト、

アガの特別保護を信じ居たるバタクさへも、遂に無慘なる運命を免る能はず、男は生ながらにして燒き殺され、女は辱しめられ殺されたり。二三週の後、虐殺の跡を實見したるもの記して云ふ、——

路には骨及小兒の頭蓋骨撒き亂され、丘には半ば衣を著けたる百乃至百五十の屍骸横はれり。全村の殺戮終りたる後、婦女引き出され、殺戮の場所に於て無上の恥辱を受けたる後、獸畜の如く居られたり……寺院の前に出づれば異臭鼻を衝て來れり。墓地は六尺内外の壁にて包まる。此の壁と寺院との間の地は尸骸累々として三呎以上の層をなし、其上には僅に砂礫の撒きかけられたるあるのみ。寺院の内は微斷せられたる肉、半ば燒けたる骨、血に染められたる衣を以て充たされたり。寺院に對して學校あり、三百の幼者婦人、此處に逃れ募集隊の爲め生ながら燒かれたり。……最も少なき計算を以てするも、四千の死骸葬られすして路傍に曝されたり。虐殺の前、バタクの人口は一萬三千なりき、今や僅かに一千二百のみ。

八月十五日、フィリッポポリスよりの通信者は曰く、——

チルノバに囚はれたるブルゲリア人一千二十八人の中、騷亂に加擔せし形跡あるは只だ四人のみ、他は豪商、役僧、教師及農夫なりき。無罪なる役僧、教師殆んど八百名、死に處せられたり。

此の如き慘虐の擧動、殆んど之を列記するに忍びざる也。列國は此の報を聞き、憤慨し、激昂せり。モンテネグロ及セルヴィアの憤慨は其の絶頂に達せり。セルヴィアは永き間、和戰の際に彷徨しつゝありたりき。獨力以て土耳其に敵する能はざるを量り、澳地利、特に匈

牙利の嫉妬を恐れ、露西亞が外見のみに於ても服從を勸告するを憚り、辛ふして激昂の情を抑へ來りしが、ブルゲリアの虐殺を聞きては最早禁ずる能はず、五月五日主戰内閣を組織し、二十二日千二百萬フランの公債募集を布告せり。セルビア既に意を決し、ヘルツエゴウイナも六月二十六日プリンス、ニキタを立てゝ君主となし、越へて二日、ボスニアの叛民もプリンス、ミランを立てゝ君主とせり。外交文書の往復二三回にして六月二十七日セルビアは最後の交渉としてセルビア國境より土耳其兵併に無賴の募集隊を撤回すると、セルビア君主プリンス、ミランを任してボスニアの總督とすること、セルビア兵を以て擾亂地方を占領することを要求せり。土耳其は拒絶せり。七月二日セルビア軍は國境を越へたり。プリンス、ニキタも同時に、戒嚴地として土耳其兵に抑へらるよりも公然開戰を希望することを、「メルタン」に通牒せり。かくの如くしてセルビア、モンテネグロ、ヘルツエゴウイナ、ボスニアは遂に全國を擧げて土耳其に反せり。此に至りて露西亞は最も深き同情を友國に表せり。皇帝及政府は獨、澳との三國協同の約束に制せられ、平靜の態度を保ちしも、三千の義勇兵セルビア軍に投じ、軍費、病院材料輸送せられ、皇后親ら恤兵部

の長となり、戸々寄附をなし、徴集に應じ、セルビア人等を呼んで、「スラブ」人共同の敵と鬪ふ同胞なりとせり。されど兵數は明らかに勝敗を定めたり、ルーマニア及希臘は動かず、ブルゲリアは破碎せられ、ボスニアは遮斷せられ、セルビア及モンテネグロは到底孤立して土耳其軍に當る能はず、一勝一敗の後、九月十六日に至り十日間の休戰を決定せり。

十日間の休戰

十日間の休戰は列國、特に露西亞が開戰の脅迫を以て友國の爲に購ひ得たるものなりき。列國は此間に於て英國使臣サー、ヘンリー、エリオットをして草せしめたる平和條件——セルビア及モンテネグロに於て戰爭前の狀態を克復すること、ボスニア、ヘルツエゴウイナ及ブルゲリアに於て自治の制を定むること、アンドラッシー照會書に言へる改革を斷行することを提出せしも、土耳其政府は全部の同意をなす能はざりき。休戰期盡きて戰爭再び始められ、十月三十一日土耳其軍終にアレキシナツツを陷れ、セルビア全國支ふべからざるに至れり。露西亞の使臣カウント、イグナチーフは六週間若くは二ケ月間の休戰を二十四時間内に決せんことを土耳其に要求し、再びセルビアの爲に開戰の脅迫を以て二ケ月

英國の勸告

二ケ月間の休戰

露西亞の表面及裏面

英國の表面及裏面

間の休戰を購ひ得たり。英國は直に列國會議をコンスタンチノープルに開き平和克復を協議せんことを發言せり。

これより先き、十一月二日露西亞皇帝、聖彼得堡駐在英國公使ロルド、ロフタフに質言して言へるあり、露西亞は已むを得ず武力を以て土耳其に干涉するあるも、コンスタンチノープルを占有するは本來の目的にあらず、ブルゲリアを占領するもまた一時のことに過ぎざるべしと。英國外務大臣ロルド、デルビー翌三日此報に接し、露帝の證言に滿足すと明言せり。されど數日にして、兩國の眞意は表明せられたり。十一月九日、英相ロルド、ビーコンスフイルド、倫敦市長の宴會に於て、英國の富强を演說して曰く、『英國は正義の爲には正義を遂ぐるまで戰ふを辭せず』と。翌十日露帝はモスコウ貴族の集會に於て、朕が必要と思ふ所にして而も列國と協同して行ふこと能はずんは朕は獨力を以て之を爲さんと宣言し、英相の挑に應ぜり。露帝は單にかく宣言せしのみならず、十三日、オデツサ、チヤルコフ及キエフに駐屯する兵により六軍團を編制することを命じ、グラントヂユーク、ニコライ、ニコライエウイツチを司令官に任じ、またゼチラル、セミエカを司令官としてクリ

英露の切迫

獨逸の地位

ミア軍を編制すること、及び高加索にあるロリス、メリコフに援加軍を編制することを命じ、十一月十八日一億萬ルーブルの公債募集を布告し、着々戰爭の準備をなせり。(三月三日更に八軍團及砲兵軍團編制の命ありたり)。英國も亦此準備に對し外交上の照會をなすのみならず、十一月十八日に至り、露軍若しブルゲリアを占領せば、英國はガリポリ及コンスタンチノープルを占領すべきことを揚言せり。歐洲平和の運命は今や獨逸の向背によつて決せらるべく思はれ、人皆ビスマークの政策如何を問へり。ビスマークは十二月五日國會に於てリヒテルの質問に應じ、獨逸は基督教徒に關する露西亞の要求に助力を與ふべきこと、開戰に至るも澳地利は中立を約せしと、露西亞は併呑をなさゞるべきこと、澳地利の利益は害せられざるべきことを諷し、其後また英國は戰爭に加入せざるを信ずと言へり。土耳其もまた一方に於て戰備を怠らざると共に、他方に於ては列國會議に對抗するの政策として憲法制定を急ぎ、列國をして再び内政に容喙する口實を見出し能はざらしめんと試みたり。

かゝる事情の下に、土耳其とセルビア其他諸國との間に和議を調へ、東方の平和を維持す

コンスタンチノープル會議

憲法發布改革約束

叛亂國との談判

る策を講ずべき列國會議は開かれたり。十二月十二日より廿日まで土耳其の代表者を除きたる準備會議開かれ、廿三日第一回本會議に於て、佛蘭西の代表者カウント、ショードルヂ、列國の原案を提出するの時、空砲殷々、會議室に響き、土耳其の代表者サフエット、パシヤ立ちて憲法只今發布せられ、新時代只今開始せることを告げたり。列國の代表者固より此の如き見戲に欺かるゝものにあらず、翌年一月十五日最後の要求として、曩に示されたる改革案と略ゝ同一のものに加ふるに列國の使臣に知事撰擧權を與ふること、列國指定の委員二名をして改革を監視せしむること等の條項を以てしたる決議を土耳其政府に送附せり。土耳其政府は、調和せざる列國の協同要求を拒絶し、列國は使臣を召還したり。

かくて後土耳其はセルビアと直接の談判を開らき、三月一日平和條約に調印せしが、モンテネグロの談判は遂に破裂し、三たび開戰するに至れり。而して三度の開戰はモンテネグロに與ふるにセルビアよりも數十倍強き同盟者を以てせんとす。

列國會議効を奏せずして終るや、露相ゴルチヤコッフ直に列國は如何なる處分に出づべき

イグナチーフ巡遊
倫敦勸告書

やを問ひ、要領を得ざりき。されど露西亞は躰面に於て、利益に於て、敝履を脱するが如く、失敗のまゝに列國協同運動の政策を捨るを好まず、イグナチーフをして伯林、巴里、維納、倫敦に巡遊せしめ、再び六强國の署を連ね、更に土耳其に勸むるに、モンテネグロと和を調へ、改革を實行せんことを以てせり。所謂倫敦勸告書は、コンスタンチノープル決議の幽靈にして、前に土耳其が拒絶したる、列國の知事撰擧權及改革監視權の二項を削り、改革若し實施せられざる時に於ては、列國自ら土耳其内の基督教徒の幸福に必要なる政策を指示すべきことを加へたるものなりき、而して英國政府は露土兩國同時に戰備を撤することを條件として勸告書に調印すとの説明を付したり。これ實に曩に土耳其が拒絶せし項を削り、承認すべき項のみを存したるものにして、僅に列國協議の影の存することを示さん爲め、土耳其をして倨傲の念を増さしむるに過ぎざりき。

十、露土戰爭。

土耳其は最後の拒絶を與へたり。倫敦勸告書拒絶せられたるの報四月十二日ペテルブルクに達し、露西亞は翌日直ちに露西亞全國動員の令を發し、二十四日國境を踰へて進むの命を發し、開戰を報ずるの回章を列國に送りたり。英國外務大臣ロルド、デルビーは露西亞の行爲を以て千八百五十六年の巴里條約を破るものとして非難したれども、英國の利益にして損傷せられたる間は中立を守ることを明言せり。所謂英國の利益とは英國と東洋との交通を安全に維持するの意にして、スエス運河の妨阻せられざること、コンスタンチノープルを土耳其の手に保たしむること、ダルダネルス及ボスフォロス海峽に關する規約を變せざることなりき。ロルド、デルビーはまた露軍のブルゲリア占領、若し必要の時日よりも長きに亘ることあらば、英國政府は之を默視する能はずと揚言せり。

露西亞開戰の布告

英國の意向

ルーマニアの同盟

四月十六日ルーマニアは道を露西亞に假し其の背後を守るべきことを約し、露軍は二十四日を以てルーマニアに入れり。六月六日露帝アレキサンドル、大本營をブカレストの北プロエスチに進め、九軍團の露兵、十一萬五千の土兵、ダニューブを境として相對せり。六月二十八日先鋒の一軍團ダニューブを渡り、二十九日には大本營ミュニッツァまで進められ、七月中旬には六軍團の大兵、既にブルゲリアの地に入れり。

露西亞更に英國を說く

露軍ダニユーブを渡るの前、ゴルチヤコツフは再たび英國と商量を試み、土耳其若し露軍がバルカン山を踰ゆるの前に屆せば、露西亞は、ブルゲリアの自治、セルビア及モンテネグロの版圖の增加、ボスニア及ヘルツエゴウイナに於ける基督教徒の保護、戰償として千八百五十六年に讓與したるベサラビアの地の還附、バツーム港の讓與、ルーマニアの獨立若しくは擴張等の條件によりて媾和すべきことを告げ、此點に於て協同運動をなさんことを勸めたり。

英國の拒絕

英國は到底土耳其の承認を得る能はずと拒絕せり。協同運動の議が拒絕せらるゝとせられさるとは露西亞の顧みる所ろにあらさりき、ゴルチヤコツフの眞意は、英國は如何なる條件を以て中立を守り得べきかを探らんとするにありき。

露軍破竹の如く進む

露軍既にダニユーブを渡り、破竹の勢を以てコンスタンチノープルを指し進めり。本軍は七月一日ピエラを取り、七日チルノバを、十日ドレノウヲ、及ガブロウヲを取り、先鋒は十九日バルカン山を踰ゆるシプカ及ハンキオイの兩道を占有し、別軍は十六日ニコポリを取り、かくて中央ブルゲリアの大部露西亞の手に落ち、二十五日には突進の騎兵フィリツポポリスとアドリアノープルとの間に現はれたり。

英國の運動

破竹の如き露西亞の勝利はコンスタンチノープルの大恐慌なるのみならず、倫敦の大恐慌なりき。されば露軍ダニユーブ河を渡るの報に對して、英國政府はアドミラル、ホーンビーに訓令し、十三隻の裝甲艦を率ひてダーダネルスに近き、小亞細亞のベシカ灣に入らしめ、露軍更に進んでバルカン山を踰ゆるの報に對しては三千の兵をマルタ島に上陸せしめたり。而して後コンスタンチノープル駐劄の公使に命し、コンスタンチノープルを保護せん爲めにダルダネルス海峽に英國軍艦を入れんことを、次で英國兵を以てダルダネルス海峽に於けるガリポリ港を占領せんことを土耳其政府に申込ましめしが、土耳其政府は英國の助力を欲するも未だ攻守同盟をも約せすして土地を占領せらるゝを謝絕せり。單獨にして責任を負ふを欲せざる英國は、次て墺地利の同盟を求めしも、墺地利も亦た中立の報酬を得るの望を懷きて勸誘に應ぜざりき。

疾驅せる露西亞の軍は蹉跌せり。露西亞は敵の力量を速斷し、輕侮し、準備に於て甚だ欠くる所ありき。歐洲の恐怖たりし土耳其の侵擊力は既に爐邊の昔噺となりしも、大河の跡久しく水を斷たず、今尙ほ容易に破碎すべからざる防禦力、抵抗力を存したりき。就中

プレヴナの堅砦

ウィヂンにありしオスマン、パシヤがプレヴナに來り、數日にして第一等の城砦を築き、露軍の背後を脅かしたる時は、露西亞の諸將不意を擊たれ、土兵の天より降り來りたるにあらざるかを疑へり。プレヴナに於けるオスマン、パシヤの驍名は事新らしく說くを要せず、露西亞の大軍、再三再四之を攻擊して拔く能はず、破竹の勢此處に頓挫し、勝敗の數、或は此處に一轉するが如く見へたり。されど大厦の頽らんとする一木の能く支ふる所にあらず、土耳其の實力を輕侮したることを覺りたる露西亞は、更にセバストポールの名將ゼチラル、トットレベンを起し、大國の全力を擧げて來れり。遠く望める英國の觀察者が小亞細方面の戰は既に終り、プレヴナは如何にしても陷るべからず、露西亞の計畫は失敗に歸したりと評せんとしつゝある間に、千八百七十七年十二月十日、プレヴナの堅砦は五ケ月の名譽ある防戰をなして後遂に陷り、露軍再たび破竹の勢を復し、ゼチラル、リルコの軍エトポル路によりてバルカンを踰へ、千八百七十八年一月十六日フイリッポ、リスに達し、ゼチラル、カルソォフは一月三日トラジャン路を開き、ゼチラル、ラデッキーの左翼はシプカ路の東より進み、西より進みたる右翼(ゼチラル、スコベレフ)は九日風雪を冒して三

コンスタンチノープルの指顧の中に在り

土耳其干渉を哀訴す

内應

萬二千の土兵を降しアドリアノープルへの道を開きたり。二十日、諸隊アドリアノープルに集まり、前衛の一は既にコルルに達し、一はマルモラ海濱ロドストよりコンスタンチノープルの尖塔を望めり。小亞細亞の露軍も千八百七十七年十一月十七日カルスを陷れ、エルツエールムに迫りたりき。露西亞の全勝は再び確實となり、叛國はこれを見て再たび活潑の運動を初め、モンテチグロは千八百七十八年一月二十九日、ポヤナ河を踰へスクタリを脅かし、セルビアはニシユを陷れ、ボスニア及ヘルツエゴヴィナも勢を增し、クリートも反旗を飜し、セツサリ及エピルスもまた新たに起ち、一萬二千の希臘兵叛民と力を合せ二月十二日セツサリー、マセドニア及エピルスを占領し、土耳其瓦解の日目前に迫りたるが如く見へたりき。

これより先き、十二月十二日、土耳其は列國に回章して干渉を哀訴せしも、バルカン半島に於ける露西亞の勢力增進に直接の不利を感ずる墺地利すら、國內に於ける露西亞黨と土耳其黨との激烈なる軋轢を制し、依然三國同盟の約束を守り、中立の地位より動くことをなさゝりき。同月下旬に至り、土耳其皇帝は特に書を英國女皇に送り仲裁を請ふの止むを

談判開始

得ざるに至れり。女皇直ちに請を容れ、電報を以て意を露帝に致せしが、露帝は土耳其帝にして若し眞に平和を欲せば何ぞ直接に來りて之れを請はざると答へ、英國は更に露西亞が要求せんとする講和條件につき質問したりしが、露西亞は固より要領ある答辯を與へざりき。土耳其政府此に至り如何ともする能はず、勝者の意に從ひ千八百七十八年一月十九日セルベル、パシヤ及ナミク、パシヤを露西亞の大本營に送り、談判を開始せしも、

英國決心を示す

休戰條約

尙ほ英國政府及議會の態度を頼み、迅速に事を處置するの意なかりき。露西亞も亦た、更に新勝利の報の到るを期し、談判の進捗を好まざりしが、英國女皇が國會開會の勅語に於て、露土の戰爭若し久しきに亘らば、豫じめ不慮の事變に備ふるは朕の義務なりと宣言し、大藏大臣サー、スタッフォルド、ノルスコートが海陸軍費として六百萬磅の追加豫算を提出するの意を示すに及び、速かに媾和するの利なるを思ひ、一月三十一日休戰條約に調印したり。而して此の休戰の條件として、土耳其は黑海のデルコスよりマルモラ海のサン、ステファノに至るまでの間の諸城砦を露西亞に明け渡したりき。英國は此に至り、自國の利益を保つが爲めに最も活潑なる運動を始め、平和條約は必ず列國の會議に附せら

サンステファノの媾和

英露の切迫

れざるべからず、決して露土兩國の私約たるべからずと公言し、其の艦隊は土耳其政府の反對するにも拘はらず、一月三十一日、英國臣民の生命及財產を保護する爲めコンスタンチノープルに航すべしとの訓令に接したり。露相ゴルチヤコッフは之に對し、英國若し艦隊を派遣せば、露西亞もまた基督教徒を保護する爲めに軍隊をコンスタンチノープルに進むべしと列國に牒知し、英露の破裂切迫し來りしが、相互の讓步により、英國は艦隊をコンスタンチノープルに入ることを止め、二月十三日アドミラル、ホルンビー六隻の軍艦を率ひて、土都を距る十哩のベリンス島に碇泊せり。露西亞は此に至りて媾和の落着を急ぎ、千八百七十八年三月三日、サン、ステファノ媾和條約を決定せり。イグナチーフ及ヲリドフは露西亞を代表して調印し、セルベル、パシヤ及サヅラ、ベイは土耳其を代表して調印せり。

十一、サン、ステファノ媾和及伯林會議。

サン、ステファノ媾和によりて定められたる主要の綱目は——

一、ベサラビアをルーマニアより露西亞に讓與せしむること（ベサラビアは巴里媾和條約により露西亞よりルーマニアに讓與したるもの）。

一、土耳其はモンテネグロ、セルビア及ルーマニアの獨立を承認すること。

一、モンテネグロはニクシッチ及ガクコを得、北方に少許の地を得、南方の境界をスクタリ海及ロヤナ海まで擴張すること。

一、セルビアは南方及西方に於て領土を加ふること。

一、ルーマニアはベサラビアを露西亞に讓りたる代として土耳其より下部ドブルッジヤの地を得ること。

一、ブルガリアは基督教政府及國民兵を有する自治の屬國となし、人民に撰擧せられ、土耳其帝及列國に承認せられたる君主を戴かしむること。而してブルガリアが自治に慣るゝまで二年間、露西亞の委員をして監視せしめ、民兵を充分に訓練し得るまで二年間、五萬を越へさる露兵をして占領せしむること（サン、ステファノ條約に云へるブルガリアは現今のブルガリアよりも大にして西は黑ドリナ河まで、南はエゲアン海までの

境域を包括したれば、此のブルガリアを露兵に占領せしむるはバルカン半島の大部分を露西亞の手に委ねる也）。

一、ボスニア及ヘルツェゴウイナに於ては、列國かコンスタンチノープル會議に於て決したる改革案を實行すること。

一、クリート島か千八百六十八年發表したる希望を納れ同島の行政組織を改革すること。

一、セッサリー、エピルス、其他に於ても改革をなすこと。

一、ダニューブ河邊にある諸要塞及防禦工事を破毀し、ルーマニア、セルビア及ブルガリア三國の水上には軍艦を碇繫するを禁すること。

一、ボスフォルス及ダルダネルス海峽は戰時と平時とを問はず、總ての中立國商船に公開せらること。

一、露國公使及領事は露國宣教師及教徒に對し、聖墓、寺院及其他の慈善的建築物に對し保護權を有すること。

償金

一、土耳其は軍費賠償金九億萬「ルーブル」、商工業損害賠償金四億萬「ルーブル」、コウカサス地方に於て土耳其の煽動により起りたる暴徒損害賠償金一億萬「ルーブル」、土耳其國内に在る露國官衙及臣民の損害賠償金一千萬「ルーブル」、合計十四億一千萬の償金を露西亞に拂ふこと。

讓地

一、露西亞は土耳其の財政困難なる狀況を酌量し、土耳其をしてアルメニアに於けるアルダハン、カルス、バツーム、バヤヂット及ソガンリ山地方を割讓して十一億萬「ルーブル」に代へしめ、實際賠償金三億一千萬「ルーブル」を拂はしむること。

露西亞皇帝は翌日、土耳其「ソルタン」は即日之を批准せり。バルカン半島を併呑する階段として先づ數多の小「スラブ」國を建設し、人種宗教の關係より、全く之を露西亞の權下に置かんとする露西亞の政策は遂に實現せしめられたるか如く見へたり。英國及澳地利の利益は此の如き條約を默認する能はすと宣言し、列國會議を要求せり。露西亞はサン、ステファノの條約を列國會議の審査に附することを承諾せり、されど露西亞と土耳其との間のことは露西亞と土耳其とによつて決すべきものなりと論し、列國の勸告を納ると斥くると

英國及澳國の故障

露國の主張

英國の主張

は露西亞の自由たるへしと主張せり。之に對して英國は主張せり、サン、ステファノの媾和條約は列國が決議せる巴里媾和條約の規定を變更せんとするもの也、故に單に露土兩國のみに關すと云ふべからず、露土兩國のみの合意を以て確定すべからず、必ず列國の會議に於て、巴里條約を基礎としてサン、ステファノ條約を取捨せねばならずと。澳地利も堅くブルゲリア國の建設に反對し、バルカン半島に於て「スラブ」人の勢力に對し希臘人の勢力を扶植するの方針を主張し、英國と運動を共にするの傾向を示せしが、イグナチーフの力よくアンドラッシーを說き露澳の調停成立せり。英國は益ゝ堅く前說を主張し、ロルド、デールビーの辭職により非戰論、跡を内閣に絕ち新外務大臣ロルド、サリスボリー四月一日列國に回章して、英國はサン、ステファノ條約を取捨改正するの自由なき會議に列することを拒絕すと斷言し、造兵廠、船渠をして日を夜に繼ぎ戰備を整へしめ、六千の印度兵第一次輸送として四月廿九日ボンベイを發してマルタに向へり。露西亞はオデツサへ歸すべき兵を乘船せしむるの口實を以て、ボスフォルス海峽にありてコンスタンチノープルへ一時半程なるブユクデールを得んことを望めり。英國は之に對してコンスタンチノープルへ

露澳の調停

英の戰備

軍艦を入るの承諾を得たり。露艦二隻水雷艇を率ひてブユクデールに向へり。土耳其は防禦工事を施せり。露西亞はロドストよりサン、ステファノに至るまで沿岸防禦工事を施し、援加軍を出し、新購入軍艦受取委員を合衆國に派遣せり。彼一歩、此一歩、英露の開戰は目前に迫れり。

獨逸の調停

兩國の戰備繁忙なるに從ひ、歐洲の危機切迫するに從ひ、列國外交の斡旋もまた繁忙の極に達せり、此の間最も務めたるは獨逸なりき。而して調停の方法は發見せられ、露西亞の代表者カウント、シユウァロフと英國の代表者ロルド、サリスボリーと倫敦に會合し五月三十日一の密約を締結し豫しめ左の諸點を決定せり。

英露の密約

一、ブルグリアはペルカン山を中央として南北の兩部に分ち、北部は依然土耳其の屬邦として維持し、南部は「メルタン」の指命、列國の承認を得たる基督教君主を戴く半自治州となすこと。

一、サン、ステファノ條約に決定せるアルメニア讓地の中、バヤヂット及びアラシユカート谷は土耳其の手に殘し、土耳其はコツルの土地少許を波斯に讓與すること（バヤヂ

ットは土耳其波斯間貿易の要衝に當れり）。

一、露西亞は將來土耳其領亞細亞の方面に國境を擴めざること。

一、ベサラビアをルーマニアより露西亞に讓與することにつきては、英國の利益に直接の損害なき限り、英國に於て異議なきと。但し露西亞軍隊がルーマニアを通路とすることとは列國の協議に附すると（二年間露西亞兵をしてブルグリアに駐屯せしむとのサン、ステファノ條約はブルグリアと露西亞との間に介立せるルーメニアを二年間露西亞軍隊の横行に任す所以也）。

獨相ブリンス、ビスマークの招待により露、英、墺、佛、伊、土の巴里會議列席者伯林に會し、六月十三日より協議を開始せり。希臘、ルーマニア、セルビア、及モンテネグロも特に自國に關係ある議事に列席するを許されたりき。伯林會議一ケ月間の景況、ピーコツスフイルドの得意、ゴルチヤコツフの憤慨、衝突の切迫、ビスマルクの調停は最も興味あり教訓に富める外交史に待つべし。今は乞ふ其の爭點及決議の要領を記載せしめよ。

第一、ブルグリア問題。

東ルーメリア州の創設

倫敦密約既に其の大躰を定め、居たれども、英國は尚ほ出來得るだけブルゲリアの境域を狹めて露西亞の勢力を縮め、南部ブルゲリアに於て出來得るだけ土耳其の權を强くせんと試みしより、英露の間に再び激烈なる衝突を生しロルド、ビーコンスフイルドは別仕立の滊車を命じて歸り去らんとするに至りしが、ビスマルクの調停により協議を完ふせり。即ちブルゲリアはペルカン山を南方の限界として自治の屬邦（土耳其の）たらしめ、人民より撰擧し土耳其政府の任命と列國の承認とを得たる君主を戴かしむること。而してブルゲリアの自治に慣るゝまで、露西亞をして其政治を監視せしむるはサン、ステファノの條約の如くなるも其期限を縮めて九ヶ月となし、土耳其の委員及列國の領事も監視に與ると。

ペルカン以南は新たに東ルーメリヤ州と爲し、政治上、軍事上土耳其の直轄に屬し、行政上には自治の權を有し、「ソルタン」の任命と列國の承認を得、五ヶ年を任期とせる君主を戴かしめ、基礎定まるまで土耳其及列國の委員にて財政を管理すること。

土耳其軍は直にブルゲリアを退去すること。

ブルゲリア及東ルーメリヤヲ占領する露軍の數は五萬を越ゆ可からず、期限は九ヶ月を越ゆ可からざる事（かくすることによつて露西亞が勢力を及ぼすべきブルゲリアの版圖を半以下に縮め、サン、ステファノの條約の最も大切なる個條を變更せり）。

第二、ペルカン半島諸小邦の問題。

ルーマニア、セルヴィア、モンテネグロは獨立國と認識せらる。

ルーマニアはベサラビアを露西亞に讓與し其の代價としてドブラドジヤ及ダニユーブ河口の諸島を得べし。

モンテネグロは、澳地利の發議により、アドリアチック海の岸に於て土地を得たるも軍艦を保つことは禁ぜらる。

第三、ポスニア及ヘルツエゴウイナ問題。

此地方は今回の騷亂の誘因にして土耳其政府は屢々改革を約束したるも之を實行せず、隣邦の澳地利は之が爲に迷惑を蒙りたること甚だしく、露土の平和克復後と雖土耳其は此の地方に秩序、平和、良政を齎らし來るの信用なしと澳地利の論ずるあり、英國使臣の

アルメニア

英土密約

發議に因り此等の二州占領及施政の監督を澳地利に任じ善後を畫することゝ決したり。

●第四、アルメニア問題。

倫敦密約あるに拘はらず、英國は此點に於ても亦出來得るだけ露西亞の手を縮めんと欲し土耳其より露西亞に讓與すべきバツーム港に於ける露西亞の權利を制限せむと試み、再三英露の衝突を來たせり。ビスマルクは之を調停せむが爲めに自ら『タイムス』の通信者を訪きて英國の輿論を動かし只バツームを自由港とするだけに滿足せしめたりき。

カルス、アルダアン、バツームを土耳其より露西亞に讓與すること。

コツールを彼斯に讓與すること。

土耳其はアルメニアに於て速に改革を實行すること。

是より先き伯林會議の開會以前、六月四日に於て英國と土耳其との間に成立せる秘密條約あり。此條約に於て土耳其は小亞細亞の改革を實行するを約し、英國は土耳其を保護するを約し、此約束を保證する爲め土耳其はサイプラス島を英國に讓與（條約の表面は一時占領）するを約したり。此條約は伯林會議に於て公けにせられ、獨露兩國は之れを

希臘談判

是認せしも、佛伊兩國は地中海に於ける英國の勢力益々伸張せんことを恐れて反對せしかば、ビーコンスフイールドは佛國のチユニスを占領するを默認すべしと密約し、漸く此條約を確定するを得たり。

●第五、希臘問題。

希臘が土耳其の敗軍に乘じ其の境域を擴めんと欲して、千八百七十八年二月一萬二千の兵を土耳其境內に進むるや、土耳其は現に露西亞と休戰して顧慮するなく逆擊の軍を出し、平和再たび亂れんとせしかば、列國殊に英國は希臘に勸告して兵を退けしめたり。英國は希臘が直ちに勸告に應じたる宏量に酬ひん爲め列國會議に於て希臘の希望を援助すべしと約したりしが、會議の日に於て希臘の希望を援助したるは英國にあらずして佛國なりき。列國はセツサリーの南部及エピルスを希臘に讓與せんことを土耳其に勸告し、兩國の談判若し調はざれば、列國は仲裁の權を保つべしと定めたり。

●第六、航路問題。

クリートには千八百六十八年の改革法を實行すること。

航路問題

ボスフオルス、ダルダネルス兩海峽のことは從來のまゝになし置くこと。

ダニユーブ河はルーマニア、セルヴイア、墺地利三國境界の接合點たる鐵門まで中立とすること。

第七、償金問題。

償金問題

償金の事は交戰兩國の相對談判に一任するも、必ず現金を以て之を拂ひ、土地の讓與を以て之に代へざるべきこと。

第八、宗教問題。

宗教問題

土耳其政府は其國内に於て信教の自由を許すこと。

モンテネグロ、セルヴイア、ルーマニアに於ても獨立の條件として信教の自由を保つこと。

サン、ステファノ條約と伯林會議の修正とにより、東歐の平和は再たび克復せられ、コンスタンチノープルに達せんとする露國南下の希望は再たび抑制せられ、土耳其は再たび垂死の病床より匐ひ出で、ビスマークは平和の祝杯を擧げ、ビーコンスフイルドは『光榮の勝利』を談し、ゴルチヤコフは『最哀のベーヂ』を書けり。

十二、伯林會議決定の後。

伯林會議の決定は果して全く實行せられたる乎。『垂死の病人』は果して恢復したる乎、英國は眞に成功せし乎、露西亞は眞に果して失敗せし乎。總ての問は同一の語を以て答へらるべし。曰く否。

曰く否

英國は

然り、列國皆な伯林の分取會議に於て大なる獲物を得たり。英吉利はサイプラスを得て直ちに之を占領せり、而してサイプラスの占領により、殊に責任を負へる小亞細亞の改革を土耳其に促せり。千八百八十年四月二十七日公使レーヤルトの公文に云へる如く、土耳其帝國は殆んど破滅の淵に臨めることを警告し、土耳其に於て改革の實擧らざるは「ソルタン」か如何なる約束にてもなし、如何なる約束も實行せざるにあることを極論し、敏活なる改革を促したれども殆んど一の益もなかりき。

澳地利は

然り、澳地利もまた大なる獲物を得て、直ちに之を確かむることに着手せり。土耳其と

ブルゲリアは

の相談纏らざるに拘はらず、三軍團の兵を以て千八百七十八年十二月四日ボスニア及ヘルツェゴヴィナ全土を占領したり。一時の占領と定められたるものは永久の占領の如くなり、而して後外交と脅迫とを以て結ひたる鐵道及通商條約によりベルカン半島鐵道の主權を握り、ダニューブ河を專有し、事實に於てセルビアの主人となり、コンスタンチノープルに達する大道を占め、ブルゲリアまて其の手を延はさんとせり。

償金額決定の困難は再たび露土の開戰を惹起すに至るやも計られさる程に切迫したりしも、千八百七十九年二月八日露西亞公權カウント、ロバノフと土耳其全權カラテオドリ、パシヤとの間に結ばれたる追加條約により、伯林會議に上らさりしサン、ステファノ條約の條項は有効と確定せられ、八億二百五十萬フランの償金額決定せられたり。

ブルゲリアは千八百七十九年四月廿四日新憲法を確定し、露西亞皇后の甥、ヘッセのプリンス、アレキサンドルの子ペッテンブルクのプリンス、アレキサンドルを撰びてブルゲリアの君主となせり。露西亞軍隊は約を守り八月三日ブルゲリアより撤去せられしが、露西亞の勢力は依然としてアレキサンドルを支配せり。されど次の君主フェルヂナントに至り

東ルーメリアは

希臘は

て、排露政策は多くの紛糾葛藤を來したり。

ルーメリヤ人民及露西亞の願望と英吉利及土耳其の猜忌との衝突により困難の事業となりし東ルーメリア組織の問題は露西亞が捕虜給養費約二千萬フランの要求を捨てたると、土耳其がブルガス、イッチマン及ペルカン山路に兵を置かざるべきを約したるとによりて調和せられ、千八百七十九年四月二十六日憲法制定せられ、プリンス、ウオゴリート迎立せられ、七月二十二日露西亞は全く其の軍隊を撤去したり。

希臘の要求願望の爲めに伯林條約に記されたる列國の勸告に對して土耳其は少しも顧慮することあらさりき。伯林會議決了の後四日を經て、希臘は土耳其に照會して答を得ず、九月六日再たび新疆界線決定委員の任命を照會して再たび答へられず、九日調印諸國に回章して周旋の勞を執らんことを乞ひ、同時に兵備を增し軍費を增し、必要に應するの準備をなせり。遂に伯林會議に於て希臘の爲めに盡力したる佛相ワッヂントン之を默視する能はず、希臘の訴願に應し列國に廻章し、佛蘭西と協同して希臘の爲め土耳其に迫らんことを促かせり。十二月に至り土耳其は遂に意を屈して委員を任命し、千八百七十九年二月八日

希臘に關する伯林會議

土耳其應ぜず

希臘の委員とプレウェザに會し商議せり。されど土耳其の委員は伯林決議を以て談判の根據とするとを拒み、單に希臘の爲さんと欲する所を拒絶するの外何事もなさゝりしかば、會議は効なくして停止せられたり。希臘は再たび列國に訴へ、グッヂントンは再たび列國の協同運動を促せしも、英國の冷淡なる擧動（千八百八十年四月グラッドストン内閣に至り希臘を助けたりき）は土耳其をして頼む所あらしめ、幾多の商量を費したる後提議せられたるセッサリー及エピルス實檢委員派遣のことも、土耳其が此の如き委員の安全を保證することを拒みしによりて破れたりき。次で佛蘭西は希臘問題決定の爲め伯林會議の續會を促し、英吉利は希臘、モンテネグロ及アルメニアに關し同一の照會書を別々に土耳其へ送らんことを促がせり。列國の照會狀は千八百八十年六月十二日を以て送られ、伯林會議は十六日を以て開かれ、其の決議は列國の連署を帶び七月十六日を以て土耳其、希臘兩政府に送られたり。（此の會議の決定したる疆界は前伯林會議の決定よりも北方に進み、アブロロンゴス河口より山脈に沿ふてカラモス河に達し、夫れよりカラモス河に沿ふてイオニア海まで達するものなりき）。されど土耳其は武力干渉の後楯なき連署の照會書に對して

土耳其終に屈す

モンテネグロは

何の恐るゝ所もあらざりき。かくて希臘が列國の助力に失望し、長く戰備を維持するの困難に催促せられ、最後の勇氣を以て獨力生死を堵せんとて境上に兵を送り、歐洲の平和再たび破れんとするに及び、佛蘭西及獨逸は極力希臘を諫め、慰め、列國はあらゆる外交の手段を盡し、千八百八十一年三月に至り、漸く調停の効を奏し、土耳其をしてテサリヤ及プレウェナ及エピルスの大部分を除き、セッサリーに於て伯林條約に記載したる讓地をなさしめたり。

モンテネグロも亦條約に規定せられたる讓地を容易に土耳其の手より受領する能はざりき。土耳其の頑迷、アルバニアの不服は相待つて伯林條約の實行を妨げたり。アルバニア人を鎮撫しモンテネグロと商議せんため派遣せられたるメヘメット、アリは千八百七十八年九月六日ヂアコバに於て暗殺せられたり。土耳其人民は兇行者を喝采し、政府は兇行者を處罰せざりき。千八百七十九年二月、プリンス、ニキタ、アルバニア同盟の首領等が八千の兵を以て守らんと決したるボドゴリサを降せしも、クシンエ及ブラベの人民が劍を執つて讓與を拒むのみならず進んでモンテネグロの境を侵さんとするを見、土耳其に照會し

列國の要求土耳其の不信

授受期限を定め、土耳其政府にして何事もなさずして此の期限を經過せば、直ちに兵力を以てグシンエを占領し、抵抗者を罰すべしと脅かせり。土耳其は此に於て千八百七十九年十二月十三日列國の調停を乞ひ、列國の商量また始まり、千八百八十年四月十二日クッシ、クライナの地方を以てグシンエ及プラパに代ふべしと決せられたり。土耳其はまたクッシ、クライナをもアルバニア人に與へたり。四月廿五日列國は土耳其を責めクッシ、クライナを恢復すべきことを命じたり、土耳其はしかなさんことを約せり、而して何もなさゞりき。英國は八月三日再たび土耳其を責めクッシ、クライナを渡す能はずんばヅルシグノ地方を以て代ふべきことを命じたり。土耳其はヅルシグノを讓ることを約し、二千の兵を送れり、而して二千の兵はアルバニア人がヅルシグノを固むる前に立ちて袖手傍觀せり。此に於て列國艦隊二十隻、七千三百の兵と百三十六の大砲とを以て九月二十日よりラグサの港に示威運動を始め、モンテネグロの兵はこれに聲援を得てヅルシグノを進擊せしも成功せざりき。次で例の如く列國の外交は再たびコンスタンチノープルに迫り、十一月二十二日土耳其をしてヅルシグノを攻擊せしめ二十七日モンテネグロに交付せしめたり。

セルビアは

ルーマニアは

土耳其自身は

依然たる土耳其

セルビアに關する條約は容易に實行せられ、獨立の要件たる信教自由も千八百七十九年一月二十六日猶太人の權利を制限する憲法の條項を廢棄することによりて完ふせられたり。ルーマニアも、困難なる猶太人問題を解きたる後、千八百八十一年に至り列國の承認を得、王チャールス一世の名歐洲立憲君主の目錄に加へられたり。若し夫れ土耳其自身に至つてはまた說明するまでもなし。列國と條約したる上に英吉利と密約したる小亞細亞地方の改革を實行せざるが如く、歐羅巴領に於ける改革固より實行せず、また實行することを欲せず、會議前、虐政に馳られて蜂起せしセッサリー人に大赦の恩典を約しながら最も慘酷なる復讐をなし、會議後改革の空約、失政の增進に驅られて蜂起せしマセドニアを鎭定するにブルゲリアの虐殺を繰り返せり。されば千八百八十年四月廿七日附英公使レーヤートの公文に云ふあり、『伯林條約の第二十三條に記載せられたる憲法未だ發布せられず、アドリアノープルの外には豫約せられたる警察官置かれず、故にマセドニア、セッサリー及エピルスに於て生命及財產安全ならず、無政府の狀を呈し、盜賊群をなして橫行劫奪す』と。クリートは約束せられたる如く千百六十八年の憲法の實施を見す、

千八百八十一年には早くも再度の叛亂を考慮するに至れり。基督教徒保護、信教自由の約束も曾つて實行せられれず、千八百七十九年十二月には詩篇其他宗教書籍の翻譯に從事せしドクトル、コール及モラ、アメット、テフィク捕縛せられ、草稿沒收せられ（英使臣の詰責により返與せられしも）テフィクは一たび死刑を免されてチオス島に禁錮せられたりき。

伯林條約——全歐の血液を沸騰せしめ、或るものをして怒らしめ、或るものをして喜ばしめ、笑はしめ、悲ましめたる伯林條約の實行は此の如きものなりき。思ふに彼——伯林條約は巴里條約と地下に相抱きて、歐洲列國の不信無情を欺したるならむ。

十三、東歐の局遂に如何。

小冊子の範圍内に於て露西亞と土耳其との過去の關係を記すこと既に繁に失するの嫌なきにあらず。而もかく過去に於ける關係を記して繁なりしことは、單に土耳其が過去に於て露西亞の南下を防ぎ得ざりしことを說かんと欲したるのみならず、將來に於ても土耳其が

露西亞の南下を拒ぎ能はざるべき理由を此處に見出さんと欲したればなり。

チエール曾つて云へるあり、『彼の奮帝國は甚だ堅固なり。微塵に破壞せらるの機、眼前に迫りたる如き擧をなして動搖す、されど今日或は明日一肢を失ひ一州を損するとあるも尚ほ生存の力を有す』と。露帝がナポレオン一世と土耳其の分割を論じてより既に一百年、而して「メルタン」は依然としてコンスタンチノープルに君臨す。ニコラスが土耳其を評して瀕死の病人となし英國使臣と繼續を論じてより既に五十年、ニコラス及セイムール共に逝きて瀕死の病人は尚ほ生存す。千八百七十八年露西亞の大軍バルカン山を踰へ、飛將スコベレフ劍を提げてスタンブールの道に現はれたる時、土耳其の最後は遂に來りたるが如く見へたり。されど伯林會議は危機を排し、瀕死の病人は尚ほ生存す。然り、土耳其は今尚ほ生存す、而して瀕死の病人として生存す。巴里の媾和は一たび彼の生を起したり。されど幾年ならずして一部は露西亞に破壞せられ、一部は土耳其自身に破壞せられ、二十二年にして露土戰爭起りたるときは既に微塵となりて影をも止めざりき。伯林の會議は再たび彼の死を回したり。されど列國苦心の決議今何處に在る。

土耳其の生存は平和を援ける

成否の問題にあらずして遲速の問題也

露西亞に利益あるサン、ステファノ條約の無事に經過せる部分は速やかに實行せられたり、土耳其をして露亞西の運動を制限するに足らしむべき伯林決議の重要なる條項は遂に實行せられず、露西亞はクリミア戰爭に失ひたる總てのものを回復せり。飽くまでも土耳其を扶け、彼をして露西亞の慾望に對する障礙たらしめんとの政策を主張したるものも、再たび三たび勞多くして功少なき經驗をなしたる後、土耳其の生存は東歐の平和を擾し、露西亞に勞少なくして功多き利益の地位を與ふるに過ぎざることを發見するに至れり。土耳其が露西亞の南下を拒き能はざるは一掬の水か大火を拒き能はざるが如し。露西亞若し今年コンスタンチノープルを取る能はざるも、明年能く之を取るべく、今世紀に於て之を取る能はざるも、來世紀に於て能く之を取るべし。これ成否の問題にあらずして遲速の問題也。

伯林條約か特に英國に於て最も非難せられたる點はブルゲリアの分割に在り。ブルゲリアを分割せしものは以爲らく宗教、人種の差異により反目せる人民を一國に集めなば間斷なき軋轢紛亂を繰り返して遂に再たび西歐洲の平和を破らん、如かず、之を分割して人種に

ブルゲリアの分割の失策

バルカン半島固より露西亞を拒ぐ能はず

從ひ宗教に從ひ適當なる政府を立てんにはと。彼等また以爲らく、大なる一國を立つれば露西亞をして容易に勢力を擴けしむ、一國露西亞の權下に落つれば則ち總てのもの露西亞の權下に落ちたる也、如かず小さき數國を立て、一國露西亞の權下に落ちたる後も尙ほ一國をして露西亞の前に當りて障礙とならしめんにはと。巴里條約が數多の小ダニューブ國を立てたるものは、此の政策より出て露西亞の勢力を減せんとする計算なりき。而して二十二年の間に示されたる如く、二十二年の後に示されたる如く、却つて露西亞の勢力をして容易に延長せしむるの結果を來したりき。ブルゲリアの分割も同一の政策より出で同一の結果を來さんとす。大なる一國にして尙ほ露西亞を拒く能はずんば、之を分割して小なる數國となし如何にして拒くことを得ん、却つて抵抗力を弱くするに過ぎざるのみ。强大なる露西亞に對するに分立の小邦を以てし、統一せる人種に對するに軋轢する人種を以てす、バルカン半島を以て露西亞の南下を拒んとするの政策既に非也、之を分割して小邦となし、操り手段を以て、遣り繰り計算を以て自ら多くの罅隙を作るに至つては更に非なるものにあらずや。

バルカン諸州は云ふに足らず、土耳其を以て露西亞に敵對するは老人を以て壯年に對するが如く、乞食を以て富豪に對するが如し。露西亞は千八百七十八年の戰爭に勝利を得たりき、而も其の勝利なるものは廉價を以て買はれたるものにあらず。官報によれば三十二萬一千餘の人を損じたりといふ。壯丁三十二萬一千餘の損失既に大なり、而して戰爭は兵制の改革すべき點少なからざるを敎へたり。莫大なる戰爭費を支出したる上に莫大なる擴張費を支出せざるべからず。戰爭後の露西亞は兵備に於ては破滅の境に陷り、財產に於ては破產の境に臨めり。露西亞財政の紛亂は殆んど一種の諺の如く云ひ傳へられ、近時伊太利の破產の如く誰しらぬものもなき事實なりき。エル、チクホミロン記して曰く、——

政府が新財政策(紙幣增發)を執りてより、支出經費は愈々增加し、其の增加は常に歲入の增加に超過せり。これ現時露西亞歲計豫算の特色にして、其の然る所以は、現政府の政策の作爲的なるにありて存す。生產力發達に正反對なる方針を執り、決して償却せられず償却せらるゝも極めて少額のみ償却せらるゝ莫大の費用を支出す。故に經費の增加は歲入の增加よりも速也。

必要に應ずる爲め、政府は新紙幣發行の策を執れり、此の如きことは決してなさざる常に公言し、總ての紙幣を融通より撤回する希望を公言したるにも拘はらず新紙幣發行の策を執れり。千八百五十七年には紙幣の流通するもの僅かに五億六千八百萬ルーブルなりしに、千八百八十三年には十一億萬以上のもの發行せられたり。此の止み間なき流入が常に如何なる波瀾を露西亞商工業界に起したるを解すること難きにあらず。……而して一方に於て政府は未曾有の勢を以て借入をなせり。

千八百五十六年に於て國債額は二十五億三千七百萬ルーブルなりき。千八百八十三年に於ては五十四億二十四萬となれり。此の二十七年間財源の全額は左の如くなりき。

一、豫算歲入　……　百二十七億七千萬ルーブル
二、國　債　……　二十八億八千七百萬ルーブル
三、紙　幣　……　五億五千萬ルーブル

譬を換へて云へば、政府は年々實際歲入よりも五分の一多く費し、かくて年々平均一億萬ルーブルの公債を增したるなり。此の公債は既に莫大の巨額に達し、單に利子の支拂のみにて毎年豫算の四分の一(全經費八億萬ルーブルの中より二億萬ルーブル以上)を奪ひ去れり。此の國債が露西亞に負はす重荷は軍備維持の重荷に讓らず。

此の危險なる財政施行の結果は、政府の政策が投機を奬勵し商工業に作爲的活氣を帶はしめたるとによりて一時隆盛せられたりき。されど此時よりして、ルーブル交換の比例に激烈なる亂高下を來し、株式賣買の投機事業を利し、投資なる商工事業に大損を與へたり。

最初には、政府が市場に投下出したる貨幣の一部歲入の增加となりて歸り來れり、されど千八百七十六年以來生產力と經費との不平均は益々酷なる復讐を政府に加へたり。動かすべからざる不足は豫算に著し。千八百七十六年より千八百八十五年まで十年間、歲計の不足なりしは只だ三回のみ。アレキサンドル三世の治代に於て經常歲入の不足は既に一億二千萬ルーブルに達せり。

これ千八百八十六年に出版せられたる著書中の一節にして、政府が新帝に進めたる奏文中の一節にして、而して千八百九十四年十二月大藏大臣が新帝に進めたる奏文中の一節には云ふあり、

國家財政の整理上亦大に見るべきものあり。即ち先帝の初年千八百八十一年の歲入は六億五千百萬ルーブルなりしも

露土戰爭後の土耳其

最近の土耳其

の千八百九十三年には十億二千五百萬ルーブルの巨額に達したり。而もよく濫費の弊を去り、貯蓄の銀を養ひ、千八百八十一年より千八百八十八年までの財政は常に收支相償はざるの悲境にありしも、千八百八十八年以後、歳入は歳出に對して巨額の增加をなすに至りたり。殊に先帝陛下治代の初年以後、往々政府豫算外の支出を要し借入金を爲すの必要に迫られたることありしも、逐時此の借入金を償却し得たるのみならず、現時の如き、天災の外殆んど此の種の支出を要せざるに至れり。後者を以て前者に比すれば殆んど世を隔て界を別にするの感なくんばあらず。十年前に於てプリンス、ビスマークの干渉なくして伯林に於て借入をなす能はざりし露西亞は今日に於て十億萬の準備金貨及金塊を蓄ふと計算せらる。

數度の防戰に於て土耳其の損失は更に大なりき、而して土耳其は此の大なる損失より回復する能はざりき。年一年歳入は不足し、負債は增加し、官吏は生存する爲めに賄賂を收めねばならず、兵士は生存する爲めに掠奪を行はねばならず、自己の力を以て整理する能はず、一國の財政を擧げて列國の委員に托したるが如き土耳其——豐歳にも妻子を養ふ能はず、凶歳には相携へて餓死する土耳其人民、——此の如きものにして彼が如き露西亞を拒がんことは、零を三倍して三を得、四倍して四を得るの時代來らずは能はず。近頃、キール運河開通式に際して獨逸の招待を受け、實際航行に堪ゆる軍艦一もなきを以て辭したる

土耳其の政策

聯合運動の結果

大オットマン帝國の末路、誰が爲めに悚然たらざるものあらむ。

土耳其政府の列國間に處して土耳其を有つや、輕業師の綱渡をなすが如く、チャリヲの曲馬を乘るが如し。そのこれをなすや巧ならざるにはあらざれども、時に失墜して或は腕を折り脛を挫くことなきにあらず。彼は兩極に於て相對し相反撥する性質を有するマクヂットの中央は、兩端の性質の孰れをも有せざる零位(ゼロ)なりとの理法を知り、露西亞、澳地利、英吉利、列國の利害集中し、衝突する土耳其の地は、右にも就かず左にも就かず、利害の平衡によりて無事に維持せらるべきを知れり。土耳其をして此の如き發明をなさしめたるものは土耳其自身の罪なるか、列國の罪なるかを判定するも益なかるべし。列國は土耳其に對して屢々聯合運動の政策を執れり、聯合運動は土耳其をして愈々カヂアヒ政策によりて自ら保つことを覺へしめたり。列國は連署して土耳其に勸告せり。列國連署の勸告果して何者ぞ。理學者がマクヂットの中央に零位に見出したるが如く、土耳其は列國の聯合に零位を見出したり。列國連署の勸告を受けたらば如何、之を受けたるも之れを實行せずんば如何。列國はインキを以て勸告書照會書の上に連署したるが如く、劍を連ねて土耳其の地に血判

彼に頼らずんば此に頼るべし

し能ふ乎。露西亞の希望は英吉利の希望と衝突し、澳地利の希望は露西亞の希望と衝突す。露西亞若しコンスタンチノープルを取らんと欲せば英國は之を拒ぐべし、澳地利若しコンスタンチノープルを取らんと欲せば露西亞は之を拒くべし。危急の場合に於て一方に攻められなば必ず一方に頼るを得べきは羨望すべき地位にはあらざるも、また絶望すべき地位にあらざることを土耳其は知れり。クリミア戰爭前に於て然るが如く、巴里媾和後に於て然るが如く、露土戰爭前に於て伯林會議後に於て然り、今日に於て然り。此の如き政策を以て、一たび爲さんと決したることは、幾何の人員を要するも幾何の費用を要するも幾何の時日を要するも遂に之を完成せずんば止まざるの政策を執る露西亞に對するは、木の楯に隱れて鐵丸を拒かんとするが如し。兩方より四方よりの壓力相平均すれば中間は零位たるべし、されど一方の壓力、時として一方の壓力よりも強き時は中間の地位は保たれ得べからず。過去に於て屢々示されたるごとく、露西亞の進行力は列國の妨害よりも強き也。

露西亞は如何なることにてもなさゞるなし、土耳其は如何なることにてもなすことなし。

露西亞は何にてもなし、土耳其は何をもなさず

依然たる形勢

歴史は繰り返しつゝあり

サン、ステファノ條約、伯林決議を速かに實行したるは露西亞のみ、土耳其は戰勝者たる露西亞に對して目前に餘儀なくせられたることの外は何事もなさず、自己の利益の爲めに、自存の必要の爲めに定められたる條項さへも實行せざりき。露西亞をして利用せしめたる機會、歐洲の平和を攪亂したる素因、露土戰爭前に存せし如く、伯林會議後にも存し、時を經るに從ひ、今日に至つて增したることあるも減したること曾つてあらず。平和回復平和維持の要件たる改革は終に實行せられず、虐政は依然たる虐政、不穩は依然たる不穩也。歴史は繰り返すものなりとせば、土耳其の歴史の如く、眞に數々繰り返すものはあらず。今日土耳其の形勢は二十年前の歴史を其のまゝに實演しつゝあるものにはあらずや。ブルグリアの虐殺——ボスニア、ヘルツエゴウィナの蜂起——列國の勸告——土耳其の躊躇——押問答——モンラチグロ、セルビアの反亂——列國の干渉——露西亞の要求——露土戰爭——これ二十年前の歴史也。二十年前紛亂の源を塞がん爲めにバルカン諸州のこと處理せられ、アルメニア及歐羅巴双方の領土に於ける改革、勸告せられたり。改革の實行せられさるは前章に於て説明したるが如し。かくて殆んど二十年を經過せり。而して現今に於

アルメニア虐殺

列國の改革要求案

てアルメニアの虐殺――マセドニアの蜂起反亂――列國の勸告――土耳其の躊躇――押問答――歴史はかくの如く繰り返されたり。歴史は更に類似を完成せんが爲にシリア人をして今年六月英國領事、露國領事、佛國領事館書記を襲擊せしめたり。試みに二三の歐洲電報を摘錄せん乎。

○アルメニアのサスコーンに於て土耳其のバシバツク兵は六千乃至一萬のアルメニア人を虐殺し、婦人數百名を凌辱し、銃創殺したり（千八百九十四年即ち昨年十一月十六日倫敦電報）。

○英國外務大臣はアルメニア虐殺事件につき土耳其に嚴談し、列國委員立合の上、事實審査をなすこととなれり（千八百九十四年十二月八日電報）。

英國は前章に云へる如くアルメニア改革につきては特別の責任を有するもの也。

○土耳其政府は佛、獨、伊諸國に廻章し英露二邦の要求を和らげんことを請へり（九十五年一月四日發電）。

○土耳其は虐殺の命令を下したるものを賞せり。

次で英、露、佛の三國は改革案を提出したり。『デーリー、ニユース』の報ずる所によれば改革案は六ヶ條より成り、其大要左の如しと――

一、委員を設けて改革實施の任に當らしめ、且諸外國大使をして、領事より得るアルメニア人の哀訴を該委員に通報するを得せしむべし。

土耳其の躊躇腹眼

一、列國の承諾を得且つ期限を定めて基督教徒若くは回々教徒を擧げて委員長と爲し、該委員長をしてアルメニヤの施政に關して責任を帶び、列國の大使と直接交渉するの權利を有せしむべし。

一、基督教徒の多く住居する諸州には基督教徒を擧げて知事とし、回々教徒を以て其副とすべく、回々教徒の多く住居する諸州には之と反對にすべし。

一、クールドの騎兵組織を改革し、平時は帶劍せしむべからず。漂泊の民に齎して土著民となし、之をして惡行を爲さしめざるの方策を實行すべし。

一、刑事裁判官の團體を編成し、各州を巡回して民の訴訟を裁決せしむべし。

一、基督教徒及回々教徒を以て、陸軍に屬せざる憲兵隊を組織すべし、而して此事最も急を要す。

土耳其は例よりて滿足なる答を與へざりき。

○三國は土耳其政府をして改革案中、承諾の點と不承諾の點とを明白に返答せしめんとせしが効なかりき、（六月二十一日報）

○土耳其皇帝は折衷案を作り、シヤキル、パシヤを監督官となせり。是れ列國の要求を避くるの手段ならんと信ぜらる（七月二日）。

○八月二日土耳其は內閣會議を開きアルメニアのみならず、全土耳其の改革案を議決したり。

○英國は伯林條約の締盟國の委員によりアルメニアを治めんことを要求せり（八月五日）。

○土耳其はアルメニアの政事を監督せんとする諸國の要求を拒絕せり（八月廿二日）。

見るべし、二十年前の歴史が其の一字一句も殘さず繰り返されつゝあることを。露西亞は何處まで要求を押し通すべき覺悟を有する乎。二十餘年前の如く最後まで押し通さんと欲

二十年前の歴史一頁を遺へす

マセドニア蜂起

せば其の結果や知るべきのみ。土耳其帝國の存在する間は東歐の形勢は少しも進化せず、露西亞は何時までも新たなる口實を見出すの勞を執るを要せざるべき也。

千八百八十八年版ダブリユー、チー、ステッド著『露西亞の眞狀』に曰く——

『アルメニア人保護の爲めに約束せられたる改革は曾つて實行せられざりき。マセドニア及他の諸州に滿足を與ふる爲めの憲法は列國委員によりて制定せられ、而して其の時ありしかまゝに放棄せられたり。されば其の結果として叛亂は何時にても、マセドニアに於ても他の州に於ても蜂起すべく、歐羅巴は理論上叛民の要求の至當を證明すべき地位に立つ。』

これ總てのものが、堤防を修築せざりし地に於て洪水の來るべきことを豫言し得るが如く確かに豫言し得たるものなりき。果してアルメニアの虐殺は、マセドニア人に機會を與へたり。

○マセドニアに於て、伯林條約に定められたる改革を望むの運動愈盛になれり、騷亂は三ヶ處に起りたりとの報あり（六月廿四日倫敦發）。

ブルゲリアの義勇兵は境を踰へて陸續マセドニアに入り叛徒を助けて土耳其兵と戰へり。露西亞は千八百七十六年ブルゲリアに出兵したると同じ方法を以てマセドニアに出兵しつゝありと七月廿九日『デーリー、ニユース』の維納通信員は報ず。

澳地利の政策

ボスニア及ヘルツエゴウイナ占領

○露西亞のダニューブ航運會社の滊船は露西亞の士官及び兵卒を、密かにブルゲリアの海岸ロムドランカの近傍に輸送しつゝあり。是等の兵は陸路マセドニアに進み入る筈なり。

最近の報知は殆んど鎮定を告げ來りたるも未だ心を安んずべからず。今や列國は、土耳其が伯林決議の第二十三條を忽諸に附せしを默視したるを悔ひつゝあらむ。

土耳其は既に健全なる邦國にあらず、其の約束を重んぜざること固より怪しむに足らず。されど澳地利——ペルカン半島に於て露西亞に讓らざる利害の關係を有する澳地利が、また伯林決議の精神を蔑視し、露西亞の爲めに爵を驅るに至つては、人をして其の何の故なるかを知るに苦しましむ。伯林決議によりて澳地利はボスニア及ヘルツェゴウィナを占領し、秩序を恢復するの權を得たり。澳地利は自衛の理由を以て此の權を得たり。されば占領は一時のものなりき、而して澳地利は之を永久のものとなさんと欲す。秩序既に恢復せられて權限既に盡きたるも澳地利は撤退せず、却つて之を併呑するが如き政策を執り、兵士とゼスイットとを以てボスニア及ヘルツェゴウィナを壓す。而して更に進んでセルビアを其の權下に收め（戰時に於てセルビアの軍隊を澳地利司令官に屬せしむる條約ありと傳